魔法科高校で龍は生きる

ドンマッシュ

【注意事項】

このＰＤＦファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にＰＤＦ化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でＰＤＦファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

【あらすじ】

西暦２０９５年　国立魔法大学付属第一高校に波乱を呼ぶ新入生が入学した。

一人はある欠陥を抱える劣等生　司波達也。

一人は完全無欠な優等生　司波深雪

だがここに、更なる波乱を呼ぶものが入学した。

果たしてこの邂逅は、世界に何をもたらすのか・・・

初投稿です。筆が進む限り、早めの間隔で投稿していこうと思います。

クロスオーバーは特に予定しておらず、オリ主ものです。

気になった方は是非よろしくお願いします。

なお、本作品は達也たちの最初の一年間のみの話となります。その後の反応次第で２年生編以降を作成するか決めます。

目次

1．入学編

1―1　龍の入学　1
1―2　入学式　6
1―3　交流　11
1―4　急襲　15
1―5　強者　20
1―6　新たな交流　25
1―7　生徒会室　31
1―8　風紀委員　38
1―9　対峙　44
1―10　蓮司ＶＳ達也（前編）　50
1―11　蓮司ＶＳ達也（後編）　56
1―12　新入生勧誘活動期間　62
1―13　恐怖の帝王　71
1―14　心のままに　79
1―15　有志同盟　87
1―16　襲撃　95
1―17　〝人間〟と〝魔法師〟　101
1―18　決意　109
1―19　エピローグ　117

2．九校戦編

2―1　選考　124
2―2　理由　131
2―3　九校戦メンバー選定　139

2―4　クラウド・ボール　145
2―5　新たな出会い　152
2―6　新たな出会い　その2　159
2―7　出発　168
2―8　事故　175
2―9　懇親会　182
2―10　老師という存在　190
2―11　温泉交流会　199
2―12　九校戦の始まり　207

1．入学編

1―1　龍の入学

―魔法―

それが伝説の産物や御伽話ではなく、現実の技術となってからおよそ一世紀が経とうとしている。

当初は「超能力」と呼ばれていたそれも、研究を重ねていく過程で、少しずつ「魔法」を伝える者たちが表舞台に姿を現し、いまや「超能力」は「魔法」で再現可能となっていた。「超能力」は「魔法」によって技術体系化され、やがて「魔法」は「技能」へと変化し、「超能力者」は「魔法技能師」と呼ばれるようになる。

世界各国は魔法技能師（通称：魔法師）の育成に競って取り組んでいるが、魔法教育には教育機会の均等などというものは存在しない。

徹底した才能主義。

残酷なまでの実力主義。

そして…生物の原点たる圧倒的な弱肉強食主義。

それが魔法の世界なのである。

だが、いつの時代にも例外や規格外、理屈だけでは説明できないものが必ず存在する。

国立魔法大学第一高校。本日はその入学式。ここに波乱を巻き起こす者たちが入学されることとなる。

第一高校の校門前に一人の男子学生が佇んでいる。身長は高く、目測だけで１８０ｃｍは超えている。比較的細身でありながら、ピンと背筋を伸ばした背筋や物静かな雰囲気がより少年を大きく見せている。後ろ髪を伸ばしており、しかし無造作ではなく一纏めにされている。何より特徴的だったのがその瞳であった。気怠そうにしていながらも鋭く、睨まれれば唯では済まされない雰囲気を醸し出してい

た。
　およそ少年が醸し出す空気ではない。しかし第一高校の特徴である緑と白の制服を着用していることから間違いなく生徒である。そして少年は目の前の校舎を見上げ…
「めんどくせぇ…」
　と気だるげに呟いた。実際彼は本当に面倒だったのだ。しかし…
「友達ができれば世界観が変わる、ねぇ」
　それは彼がここに訪れる前にある人物に言われたことであった。
『確かに君は魔法師として優秀の域には収まらない才能、実力を兼ね備えているよ。更には〈魔法師の現実〉というものをその年で理解し、受け入れている。この世の誰よりも圧倒的に〈魔法師〉として完成されているといっていい。』
『でもね…君は同時に〈人間〉でもある。私の目から見ても、君は圧倒的に〈人間〉としては未熟だ。それこそ赤子同然とも言える。』
『怒らないでくれよ。それは言外に認めているようなものだよ?』
『そこで君に提案だ。学校に通うといい。』
『何もふざけてなどいないさ。学校は別に勉学だけをしに行く場所ではない。たくさんの同世代の考えや行動に触れて、自らの可能性を広げることができる。今の君が〈人間〉として成長するには最適な場所さ。もしかしたらそこで出来た友達が君の見る世界を変えてくれるかもしれない。』
『学んでくるといい。魔法師を。人間を。そして友達をね。』
「あいつの口車に乗っちまった気もするが…まあいい。せいぜい学ばせてもらうとしよう。」
　少年…龍童蓮司（りゅうどう　れんじ）はそう呟き、門をくぐっていく。

　同時刻、第一高校の講堂前で男子生徒と女子生徒が言い争いを終えようとしていた。
　女子生徒は万人が認めるほどに容姿の整った美少女。名を司波深雪。

男子生徒は平凡な容姿ながら鋭い目つきが特徴の少年。名を司波達也。
ここに、波乱を巻き起こす生徒たちが集結しつつあった。

「納得できません！」
「まだ言っているのか？」
入学式の講堂の前で男女が言い争っていた。
女生徒は司波深雪。今年度の魔法科第一高校の主席である。男子生徒は司波達也。主席たる深雪の兄である。
「なぜお兄様が補欠なのですか？入試の成績はお兄様がトップではありませんか！」
「お前がどこから入試結果を入手したかは横に置いておくとして…魔法科高校なんだからペーパーテストより魔法実技が優先されるのは当然じゃないか」
どうやら兄の待遇に納得がいかず、妹が不満を漏らしているらしい。そして深雪がさらに不満を述べた瞬間、達也は張りのある声でそれを制止した。
「分かっているだろ？それは口にしても仕方のないことだ」
「ですが…」
「それに気持ちはすごくうれしい。お前が俺のことを考えてくれているように、俺もお前のことを思っているんだ」
「そんな、お兄様…想っているだなんて／／／」
会話の流れが変わったのか、今度は深雪が頬を押さえて悶えている。会話の主導権は今や達也にあった。
「それにな、深雪。俺は楽しみなんだ。可愛い妹の晴れ姿をこのダメな兄貴に見せてくれ」
「お兄様はダメではありません！…ですが分かりました。我儘を言って申し訳ありません。それでは…行ってまいります！見ていてください！」
「ああ」

そこで会話が終了し、深雪は元気に体育館へ向かっていった。
（さて、これからどうしようか？）
そして達也は入学式までの時間をどう過ごすか考え始めるが…そこで周囲の声がわずかに聞こえてくる。
―なにあの子、二科生じゃない。こんな早い時間に来たの？―
―所詮スペアなのに。何を気合入れてんだか。―
そんな内容だ。
（やれやれ。まあ仕方ないのかもな）
ここ第一高校では生徒が主に二分されている。上位１００名は一科生と呼ばれ、優秀な証でもあるエンブレム付きの制服を着用している、通称「花冠（ブルーム）」。残りの生徒はエンブレムのない制服となる二科生、通称「雑草（ウィード）」。両者の間には明確な差があることから、二科生はスペアと呼ばれることもある。
（まあそれ自体は正直どうでもいいがな）
そんなことを考えながら時間つぶしに読書をするために適当にベンチを探している時だった。
「キャッ！」
そんな女生徒の声が聞こえたためそちらに振り返る。そこには大柄な男子生徒と、恐らく男子生徒にぶつかったであろう、先ほど達也をスペアと侮辱していた女生徒たちが向き合う構図になっていた。
男子生徒は恐らく１８０～１９０ｃｍ程はありそうな背丈をしており、大柄というよりは長身痩躯という言葉が合いそうである。髪は長く後ろで一纏めにしており、その目は気怠そうにしている。だがその視線はとても鋭く、目の前の女生徒を睨み下ろしていた。
「ちょっと、危ないじゃ…」
「おい」
女生徒が怒りの言葉を放とうとしたとき、男子生徒が先に言葉を発した。
たった一言。しかしそれは圧倒的な存在感を放っていた。
「どけ。邪魔だ。」
またしても言葉は少ない。それでもその男子生徒からの威圧感が

放たれていた。
「は、はい！」
「すみません、すぐ！ほら行こ」
そう言って女生徒たち慌てては走り去っていく。やり取りとしてはわずかな時間。しかしその時間は、達也の中で強く印象に残るものだった。
（なんだ、あいつの圧倒的な存在感、威圧感は？まるで巨大な力の塊そのもののような…）
制服にはエンブレムが付いており、一科生と判別できる。しかしそういったことを抜きにして、達也はその生徒から目が離せなかった。その時、その男子生徒はこちらを横目に見た。しかし見たのはわずかな時間であり、すぐに視線をそらし入学式の会場へ向かっていった。
（やつは一体…）
達也の思考はその生徒のことで埋め尽くされていた。
一方視線を向けられていた男子生徒、龍童蓮司も同様に自分を見ていた相手のことを考えていた。
（制服を見る限り二科生。普通に考えれば気にする必要はない。…だがなんだ？あいつからはただの生徒じゃない「何か」を感じた。）
そう、考えていたのはその男子生徒の視線そのものというよりその視線を放っていた時の雰囲気だった。興味本位で見物していたのかと思ったが、それにしては観察していたような、何かを見極めようとする類のものを感じた。
「人間を学べ、か…。確かにあんな奴がいるなら、それは面白そうだ。」
そう独り言ち、入学式会場に入っていった。

1―2　入学式

入学式の会場に着いた蓮司は席を探す。しかし一通り見回して

「はぁ～～～～…だる…」

早速ため息をついていた。それも盛大に。

見回して分かったが、席は前側と後側できれいに分かれていた。前は一科生、後は二科生。いっそ清々しいほどに二分されていた。

「たかが成績で何をそんなにいきってんだか…これだから魔法科高校なんてのは…」

しかしそう言っている間に続々生徒が入ってきたため、大体真ん中あたりの席を見つけ、座った。だからと言って周囲と何か話をするわけでもない。普通の生徒なら交流を深める意味合いも兼ねて何かしら会話を弾ませるものだが、生憎と彼は普通ではなかった。

「寝るか…」

そう口にして眠ることを決めた。そしてそれから僅かな時間の後、彼は熟睡を始めた。会場の明かりがちょうど薄暗かったことも後押ししたせいもあった。

そして規定の時間となり入学式が始まったが、彼は一切起きることはなった。ほとんどの生徒がくぎ付けとなった主席入学者である司波深雪の代表挨拶においても。

「ちょっと君、さすがに起きてないとまずいんじゃないの？」

「無理だね、これだけの歓声の中でも起きないならどうしようもないよ。ある意味のスターさ」

女生徒が隣でそんなことも話していたが、蓮司はそれでも起きることはなかった。

―…え、ねえ、ねってば！いい加減起きてよ!!」

「んあ…？」

呼び起されて、蓮司はようやく目を覚ました。寝ぼけ眼で声のした

先を見る。
　目の前には二人の少女がいた。一人はルビーのような光沢のある赤毛が特徴的な、いかにも怒ってます、という雰囲気が漂っている。もう一人は眼鏡をかけた女子にしては高身長であり、やれやれと呆れたような雰囲気である。
「どうした、何かあったか？」
　そう言うと二人はそれぞれの雰囲気をますます強くした。
「何かあったか、じゃないよ!?隣の席に座った時から寝てたし、最初はそっとしといたけどまさか入学式の間まったく起きないなんて思わなかったもん！」
「前日夜更かしでもしていたのかい？あれだけの歓声の中でも眠り続けるなんて」
　そう言われて状況を理解した。どうやら自分は最初から最後まで眠りこけていたらしいと。蓮司はこの儀式に一切の興味がなかったからある意味仕方ないのかもしれない。少しでも意識が向いていれば変化があった時に起きたはずだからだ。
「悪いな、塵ほども関心が湧かなかったんだ」
「それを言い切る君もすごいね!?」
　赤毛の少女は大げさに驚いたが、きっと本心なのだろう。嫌味な感じはしなかった。
「んで爆睡してた俺を起こしてたのか。悪かったな、手間をかけた。」
　蓮司は素直に謝罪した。自分に非があるときは素直に謝ることにしていた。
「はい、どういたしまして。それより早く移動しよう？もう皆行っちゃったよ」
「この後何かあるわけではないけれどね。自分のクラスを把握しておかねば明日笑いものにされてしまうさ」
　そう言って眼鏡の女子は髪をサラリと払った後、眼鏡に指先を当ててポーズのようなものをとった。一見するとまるで役者のような素振りだったが…
（こいつ、この感じは…）

蓮司はその違和感に気づいた。
「あ～～、これはね…」
「認識阻害の類か。だから敢えて自分を大げさに表現することでそれ押さえている、と」
赤毛の生徒が説明しようとし、先に蓮司がそう呟くと、二人は驚いた顔をした。
「すごいな。初対面で、しかも一度見ただけで見抜かれるとは思わなかった」
「生憎と、そういった感覚的なものは敏感な方でな。ところでそろそろ移動したほうがいいって話だったか」
そう言うと二人は落ち着きを取り戻したようだった。
「そうだね、そろそろ行こう」
二人とともに移動をし始める。と、そこで
「そういえば自己紹介してなかったね」
と、赤毛の女子が振り返る。同時に眼鏡の女子も振り返る。
「私は明智英美、よろしくね！」
「僕は里美スバルだ。以後、よろしく頼むよ」
「龍童蓮司だ。まあよろしく」
そう言葉を交わし式場を後にした。

「二人とも、クラスはどうだった？私はB！」
「僕はDだったね、エイミィと別れてしまったか。龍童君はどうだい？」
「Bだ」
「やた！知り合いが一人でもいるといいね！」
そんな話をしながら廊下を歩いていると、目の前に集団ができつつあった。一方は4人組で、その中には今朝見た男子生徒がいた。
（あいつはあの時の…）
そう思ったがそれ以上かかわろうとはしなかった。それはもう一方の集団も関係していた。その集団はある女生徒を中心にできており、その生徒の後ろには堅苦しそうな男子生徒が控えていた。直感的

に、面倒そうだと蓮司は判断したのだ。
「俺はもう行く。あれは面倒そうだ」
「あ、そう?それじゃ、また明日ね!」
「それでは、龍童君、また」
「ああ、じゃあな」
そう言ってその集団から離れ、帰路に着いた。
(はてさて、何が起こるのやら…)
野生の感ともいうべきか。蓮司は何かが起こる気がしてならなかった。

「会長!それではこの後の予定が…」
「事前にアポを取っていたわけではありませんし、明日以降でも問題ありません。それでは深雪さん、また明日ね」
「はい、よろしくお願いします」
そう言って生徒会長、七草真由美は踵を返した。実際にアポを取っていたわけではないのでここで引くことに何の問題もなかった。むしろ人だかりができ、深雪の兄である司波達也にまで悪口や陰口が出ることは避けたかった。それでは彼女の掲げる目標にたどり着けないからだ。
(それに…面白い子もいたしね)
そう、真由美は見逃していなかった。自分たちのもとに集団が出来始めたのを確認すると、すぐさま踵を返してその場を去っていった、長身痩躯の少年を。
(彼が龍童蓮司君。入学試験は実技面では主席だった子。そして…筆記試験を途中で解くことを止めるという予想外の行動をとった生徒)
そう、真由美は蓮司の成績を把握しており、その異常な点数ゆえによく覚えていた。筆記試験は途中からすべて白紙であり、明らかに途中でさぼっている内容だった。しかも解いた問題は全て正解。そして実技面ではあの深雪を抜いてトップだったのだ。もし筆記試験も真面目にすべて回答していたら、主席は彼だった可能性がある。

（達也君といい、今年は本当に面白い子たちが入学してくれたわ）
これからを楽しみにしながら、真由美は生徒会室に戻るのだった。

（あいつはあの時の…）
一方、人だかりの中心にいた達也も蓮司の存在を把握していた。だからと言ってこちらから会話を仕掛けたりはしなかったものの、今朝の出来事が頭から離れなかった。
「達也君、どうしたの？」
「お兄様？」
達也の様子がおかしいことに気づいた、友達となった千葉エリカと深雪が声をかける。達也の視線は誰もいないはずの廊下に向けられていたため、不思議に思ったのだ。
「いや、少し気になるやつがいてな」
「お兄様が、ですか？それは一体どんな女子だったのですか…？」
深雪が絶対零度の笑顔をまとい始めたため、達也はなだめ始める。
「待て深雪、女子生徒ではない、男子生徒だ。今朝深雪と別れた後に見かけたんだ。」
「でもそれだけじゃ、何もおかしなことはなかったのでは？」
達也の答えに、同じく友達となった柴田美月がさらに疑問を投げかける。
「確かにな、まあ雰囲気が独特だったというのか、なんとなく忘れられない印象だった。ぶつかってきた他生徒にドスの利いた声で話していたからな」
「うわ、それだけ聞いたら第一印象最悪じゃない」
「まあ、ここにいないやつについて話しても仕方がない。そろそろ帰ろう」
そう言って、今度こそ全員帰り支度を始めた。
（お前は一体何者なんだ…）
しかし達也の中からその存在が消えることはなかった。

1―3　交流

「おはよう、龍童君！」
「おう、明智」
「エイミィでいいのに」
「生憎そんな呼び方をする趣味はねぇ」
　入学式の翌日。今日より授業が始まるため、蓮司たちは教室へ向かう。待ち合わせ等をしていたわけではなかったが、校舎玄関でばったり会ったため、ともに向かうことにしたのだ。
「スバルも同じクラスだったらよかったのに、残念だなぁ」
「カリキュラム的にどっかで絡むこともあんだろ」
「そうだけどやっぱり一緒がいいよ。と、着いたね。それじゃねー」
　そうこうしているうちに教室へ入室し、それぞれの席へ向かう。五十音順なのか、蓮司の席は一番後ろかつ一番奥であった。
「こいつはありがたい」
　元々高校などに通うつもりはなかったが、あるやつの提案で所属することになった第一高校。しかしそれでもやる気があまり起きていない蓮司にとってこの席は非常にありがたかった。
「さて、日差しも気持ちいし…」
　うーん、と体を少し伸ばした後、
「寝るか…」
　蓮司は再び睡眠をとることに決めた。

　…い、おーい、そろそろ起きてくれないかな」
「…ん？」
　体を揺さぶられながら呼ばれる声を感じたため、意識が覚醒していく。そうして呼ばれた方を見ると、一人の男子生徒が苦笑しながら立っていた。顔つきは中性的であり、身長はあまり高くはなかった。

（なんか最近真逆のやつにあったような気がする…）
　同時に蓮司は入学式で出会った里美スバルのことを思い出し、内心苦笑した。自分はこういう奴に縁が出来始めたのかと、若干くだらないことを考えながら。
「悪い、起こしてたのか」
「なかなか起きてくれなかったけどね。もう皆移動しちゃったよ？」
「手間を取らせて悪かったな。それじゃ行くか。」
　見回すと教室には蓮司たち以外誰もいなかった。この男子生徒は自分を起こすために残っていたのかと考え、申し訳…
（世話好きで生真面目、メンド―そうかも）
　…なく思うことなく、若干失礼なことを考えていた。
「そうだね、行こう。僕は十三束鋼だよ、よろしくね」
「龍童蓮司だ」
　互いの自己紹介を済ませ、目の前の少年、十三束鋼とともに今度こそ教室を後にした。
　あれから十三束とともに移動し、英美と合流した。また寝てたのかと呆れられながら、英美を通じて数人のクラスメートと交流し、魔法実技の授業を見学していた。
　視線の先には入学式後に人だかりの中心にいた女生徒がいた小柄ながら凹凸のはっきりしたスタイルをしており、特徴的な長髪と相まった美少女だった。
（あの女…強いな。魔法師としての実力もそうだが、佇まいにも自信を感じる…）
　多くの生徒がその女生徒に釘付けになる中、蓮司はその生徒の実力が気になっていた。
「うわ～～、さすがだねぇ」
「うん。生徒会長、そして十師族〈七草〉の名は伊達じゃないね」
　同席していた英美、そして十三束はそう感想を漏らしていた。その中で出てきたある言葉に、蓮司はピクリと反応した。
「〈七草〉？あの女、数字付き（ナンバーズ）なのか？」
　その蓮司の感想に二人は唖然とした表情をしていた。そしてひど

く呆れられた。
「蓮司君それマジで言ってる？あの人のこと知らないの!?ていうか女って…」
「彼女は七草真由美先輩。十師族の一家である七草家の長女でこの学校の生徒会長かつ主席。九校戦にも出て優勝してる実力者だよ。日本の魔法師の中ではかなり有名人だね」
英美は信じられないと言わんばかりの表情を浮かべ、鋼は冷静に説明をした。そして同時に納得した。
（十師族…日本の魔法師界の頂点に立つ存在。その中でも抜きん出てるのが確か、四葉、七草、そして九島だったか…なるほど、それなら納得だ。）
蓮司は納得するとともに少し高揚もしていた。それほどの存在ならどれほど強いのか、と。
「いつか戦ってみたいもんだ…」
誰にも聞こえない声でそう独り言ち、少しして授業が終了したためその場を後にした。

それからしばらく知り合いたちと交流し、時刻は下校時間となっていた。昼食時には何やら人だかりができ、若干の騒ぎになっていたが特に興味もなかったため関わることもなかった。ただ一点を除いて。
（あの時、あの席にはあいつがいた。昨日俺を観察していたやつが…）
そう、その騒ぎにいたのが入学式にて蓮司を見ていた少年だった。しかし件の少年は騒ぎが起き始めて少しして席を離れたためその後は特に何も起きていなかった。
（恐らく何かしらの騒ぎを回避するためにすぐにそこを離れたんだろう。冷静で状況判断もうまい、と）
そう新たな情報を自身にインプットしながら、この二日間の出来事を思い出していた。同世代と交流し、ともに過ごす時間は、蓮司にとっては新鮮なものだった。
「人間を、友達を学んで来い、か…」
そうしてここに来る前のことを少し思い出しながら独り言を呟い

た。なるほど、確かにこれまでにしてこなかった経験だ。
（ここで何かを掴めるだろうか…）
そんなことを考えていると、不意に腹の虫が鳴る。昼はかなり食べたつもりだったが（同席していた英美や鋼たちはまたも唖然としていた）、考え事にエネルギーを持っていかれたのか、空腹感が押し寄せてきてきた。
「なんか食って帰るか…」
そう判断し、外靴に履き替え、玄関を出た後…

何者かに魔法攻撃によって急襲された。

1―4　急襲

「いい加減にしてください！　深雪さんはお兄さんと帰るって言ってるでしょう！　別にあなた達を邪魔者扱いしてるんじゃないんですから、一緒に帰りたかったらついてくれば良いんですよ！どうして二人を引き裂こうとするんですか！」

そう啖呵を切ったのは、達也たちの中で一番大人しい性格と誰もが思っていた美月だった。

ここに至るまでの経緯は、実に想像の付きやすい単純なものだ。深雪を待っていた達也たち二科生に対し、ついてきた一科生の面々が難癖をつけてきた、というものだ。ちなみにその一科生の矢面に立っているのは食堂でも真っ先に口を出してきた森崎駿という生徒であり、一科生の集団のリーダー格でもあった。

最初は思わぬ人物からの反撃にたじろぐ森崎だったが、落ち着きを取り戻したのか、あるいはますますヒートアップしたのか、これ見よがしに大きく溜息を吐いてから反論を始めた。

「良いかい、君達？　ここ第一高校は、完全なる実力主義だ。そして君達二科生は試験によって、僕ら一科生よりも実力が劣ると判断された。それはつまり、君達の存在自体が僕らより劣るということに他ならない。少しは身の程を弁えたらどうだい？」

「俺達は司波さんと、二科生には理解できないレベルの話がしたいんだ！」

「そうよ！　少し時間を貸していただくだけなんだから、二科生は大人しくすっこんでなさい！」

「ハン！　そういうのは自治活動の中でやれよ。ちゃんと時間がとってあるだろうが」

「相談だったら予め本人の許可を取ってからにしたら？高校生にもなってそんなこともできないの？」

猛反発をする森崎のクラスメイトと、それに正論でもって、挑発をするような発言を返す二科生たち。森崎も、一科と二科の差など気にせず主張を返す二科生たちに次第に苛立ちを深めながら輪の中心に

入っていく。一方深雪は…
「み、美月ったら引き裂くだなんて…い、一体何を勘違いしているんでしょうね!?」
「深雪…なぜおまえが焦っているんだ？」
「あ、焦ってなどおりませんことよ!?」
「なぜ疑問形？あと、語尾がおかしなことになっているぞ？」
一人でトリップしていた。
そして、言い争いの中で決定的な一言が放たれた。
「同じ新入生同士じゃないですか。あなたたちブルームが、今の時点で一体どれだけ優れているというんですかっ？」
「これはまずいな…」
「だったら教えてやる！」
消化しきれていなかった怒りを加え、森崎は自らの価値を確認するために愛用の特化型ＣＡＤを抜いた。
「二科生風情がぁ！」
そう吠えながらＣＡＤを操作し魔法を放とうとする。流石にこれはまずいと判断した達也がどう対処しようか決めかねていたその時、ガキンッ！と鈍い金属音が聞こえる。見ると、そこには警棒を振りぬいた姿勢をとっているエリカがいた。
「この距離なら直接動いたほうが速いのよねぇ、一科生さん？」
挑発的な笑みを浮かべながらそう告げた。彼女は今自己加速術式を用いて森崎の前に現れ、ＣＡＤのみを正確に弾き飛ばした。流石は千葉家の者だな、と達也が感心していると…
「ブルームがウィードに劣るわけあるかぁぁぁぁぁぁぁぁ!!」
「舐めるんじゃないわよ！」
と一科生が触発され、次々と自らのＣＡＤに手をかけていく。彼らにとって一科生であることは最大の誇りであり、二科生は自分たちの全てにおいて劣っている存在だ、という固定観念にとらわれてしまったが故の行動だった。その時、
「皆落ち着いて!!」
「ほのか、ダメ！」

一人の一科の女生徒が誰よりも早く魔法を発動しようとしていた。友達と思われる生徒が止めようとするも間に合わず、もうすぐ魔法が発動されようとしたその時、少女の手元の術式がバキンッ！とはじけた。
「きゃっ」
「ほのか！」
魔法を発動しようとした生徒が軽く吹き飛び、それを友達が支えていた。そして
「止めなさい！自衛目的以外の魔法の使用は校則違反の前に犯罪よ！」
「風紀委員の渡辺摩利だ！全員その場を動くな！」
そこには生徒会長の七草真由美、そして風紀委員長の渡辺摩利。第一高校の三巨頭と呼ばれる三人のうち、二人がそこにいた。
「君たちは1—Aと1—Eの生徒か。事情を聴く。そのまま付いてきなさい。」
そう言って全員を連れて行こうとした。しかしここで予期せぬことが起きる。
新入生とはいえ、一科生が優秀であることは事実。そしてその中には実技が得意な者や勉学の方が得意な者も当然存在する。しかしいかに優秀な生徒でも精神的に未熟な彼らは突発的な状況に即座に対応できるものばかりではない。
それ故に起きてしまった。
先ほど魔法を発動しようとした生徒の中で一人。
中途半端に攻撃魔法を完成させて。
それを狙いを定めず発動してしまった。
「や、やば！ってうわぁ！」
そうして放たれた魔法は誰も予期しない結果を迎える。
「な!?」
「おい、やめろ！」
制止の声も間に合わず。
その場の誰にも当たらず。そのまま校舎玄関まで向かっていき。

一人の男子生徒に直撃したのだ。
バン！と音を放ち、その生徒の腕に直撃した。煙がまっていたがすぐに晴れ、そこにいたのは…

右腕の制服は破れ、その下の皮膚から血を流している。長身痩躯の生徒だった。

「摩利！ここをお願い！」
「ああ！いいか！全員一歩たりとも動くな！身じろぎ一つでも拘束対象とする！」
真由美は慌てて玄関へ向かい、摩利はより視線を鋭くし生徒たちを見張っている。一方その場にいた一年生たちは全員が顔を青ざめさせており、特に魔法を放った生徒は今にも泣きそうであった。
「お兄様…」
「ああ、かなりまずいな…」
深雪がすぐ傍の達也に話しかけるも、達也も険しい表情を崩せない。それだけまずい状況なのだ。
（対人への魔法攻撃使用、加えて直撃しケガまでしている。これは放った生徒は退学、この場にいた俺たちは停学または退学の処分が妥当となってしまった。さっきまでの状況ならまだごまかしが効いたかもしれないが、これでは…）
そう、けが人が出てしまったことが最大の問題だった。その生徒の動き次第で自分たちの命運が変わってしまう。
（何があっても深雪…お前だけは守ってみせる）
人知れず、心の中で決意する達也であった。
一方の真由美は直撃した生徒のもとへたどり着いた。
「き、君！大丈夫!?悪いけどちょっと腕を見せて！」
そう言ってだらんと下ろしていた蓮司の腕を注意を払いながら確認する。
「骨は…折れてないみたいね。でも腕のけがの範囲が広いわ。早く医

務室に…」

「オイ」

そこで、それまで静かだった怪我人の少年が声を出した。あまりにもドスの効いた声に思わず真由美は黙ってしまう。

「こいつは一体何冗談だ…？魔法を安易に使ってはいけないことも知らないやつがこの学校に通ってやがるのか…？」

そう言い放ち、それまで俯いていた顔上げる。その瞬間、真由美は慄いた。その少年が放つあまりのプレッシャーに、臨戦態勢に入ったその姿に、そして圧倒的な殺意にまみれた獣の瞳に。

（なに…これ…こんな威圧を放つ人がいるの…？これは、獣だなんて表現すら生ぬるい…まるで怪物じゃない!?）

そう困惑している間に、蓮司は腕のケガもお構いなしに集団に向かって歩き始める。蓮司が離れた後、少しして我に返った真由美は慌てて追いかけた。

しばし歩いて蓮司は集団のもとへたどり着いた。そこにはＣＡＤを構えた上級生と思われる生徒と、この騒動の中心であろう生徒たちの集団があった。制服を見る限り、一科生と二科生が入り混じっており、おおよその状況判断はできた。

（一科生と二科生の対立、そのプライドのために魔法を発動し、この女どもに止められたが、それでも魔法が発動した、そんなところか…）

そこまで確認し、蓮司は言い放つ。

「それで…どいつだ？」

シニタイノハ？

1―5　強者

「それで…どいつだ？」
シニタイノハ？
　目の前に現れた人物がそう言い放った瞬間、その場に留まっていた生徒たちは圧倒的なプレッシャーに包み込まれた。ある者は涙目になり、またある者は立っていることすらままならない。達也もとっさに深雪をかばい前に出たが、その威圧感は計り知れないでいた。同時に達也は自身に起きた異変に気付く。
（心拍が上がっている。呼吸も浅く汗が止まらない…。まさか俺は…恐怖しているのか？）
　それは本来ありえないことであった。達也は過去に受けた魔法実験の影響で、ただ一つのものを残して「激情」を無くしている。故に多少「怖がる」ことはあっても「恐怖」に支配されることはない。その達也が本能で恐怖を感じている。それだけ目の前の少年の存在が圧倒的なのか、それとも別の要因があるのかは定かではないが…
（このままではまずい…）
　たとえ自分たちが魔法を放っていなくても、この場にいる以上同罪になりかねない。加えて先ほどの発言は冗談では済まされない雰囲気を醸し出していた。
　打開策が見つからないまま黙っていると、目の前にいる人物が一人の生徒を指さし、一言呟いた。
「なるほど…てめぇか」
　蓮司は自身に誤って攻撃した人物を正確に見抜いていた。一方、指定された人物は恐怖のあまりへたり込み、体を震わせながら涙を流している。そんなこともお構いなしに、蓮司はその生徒のもとへ一歩ずつ歩みを進めた。今の蓮司はまるで死神だった。そこへ
「待ってくれ、そこから先は認められない。」
　風紀委員長の摩利が立ちふさがった。彼女も冷や汗を流してはいるが直接プレッシャーを当てられていないこと、そして自身の力を把握していたからこそ、前へ踏み出した。

「どけ」
「いや、ダメだ。君が何をするつもりかは察しが付くからこそ認められない。それよりも君は怪我の治療が先だ」
「こんなもん、唾液でもつけとけばそのうち治る。それよりもそいつを八つ裂きにしないと俺の気が収まらん」
「どこの民間療法だ!?そんなに血だって出してそんなもので治るはずがないだろう!」
「こんなもんどうだっていい。俺はそこの魔法師気取りの糞野郎を排除しなきゃならん」
　二人の会話は一方通行で進展がない。それ以上に今の話で蓮司が何をするつもりか分かった分、なおさら恐怖が場を支配する。その言葉は誇張ではなく、本気だったからだ。
（どうする…）
　達也はこの瞬間も頭をフル回転させ、打開策を探した。そして…
（これが一番か…）
　達也はそのまま歩き出し、
「すまない」
「ん…？」
　苦肉の策を出した。
「彼らに魔法を見せてほしいと言ったのは俺なんだ」
「お兄様!?」

「…はぁ??」
　数秒の沈黙の後、蓮司の頭は無限に湧き出る疑問符に支配された。周囲の者も、摩利や駆け寄ってきた真由美も含めて困惑している。
「何言ってやがる、お前」
「森崎一門のクイックドローは有名でな。後学のためにぜひ見せてほしいと頼んだんだ。それも、真に迫る形で見たかったから実戦形式でな」

「そこの赤髪の女生徒が警棒を構えてんのもそれが原因だってのか」
「ああ。近接戦闘においては魔法の発動と魔法体術のどちらが勝るかも知りたくてな。エリカにはその相手役になってもらったんだ」
「じゃあその他にＣＡＤを構えてるやつらは？特にあそこのお下げの女生徒はあと数瞬で魔法を発動するところだったんだぞ」
　そう言い、その生徒の方を見る。女生徒はすでに涙を流しており、友達と見られる人物が慰めている。
「あまりにも真に迫りすぎたから焦ってしまったんだろう。目の前でクラスメートが傷つきかければ慌ててしまうだろうし。それに彼女が放とうとしたのはただの閃光魔法、目くらましだ。人体に害はまったくない」
「自分の言ってることが理解できているか？それは魔法の発動前の術式を見て、何の魔法を発動しようとしているか分かるということだぞ」
「分析は得意なんだ」
「へぇ…」
　そこまで話し、蓮司の表情が少し柔らかいものとなる。そこを見逃さず、深雪も蓮司の前に出る。
「本当にちょっとした行き違いだったんです。ですがそのせいであなたをはじめ、生徒会長や風紀委員長にまでご迷惑をお掛けしてしまいました。本当に申し訳ありません。この場にいる者を代表して謝罪いたします。」
　そう言い、深々と頭を下げる。そこへ更なる助け舟が出される。
「生徒同士で魔法を教えあうことが禁止されているわけではありませんが、魔法の行使には様々な制限があります。それまでは控えた方がいいでしょうね。あなたたちには騒動を起こした罰として、明日までに一万文字以上の反省文の提出を命じます。」
　生徒会長である真由美はそこまで言い、今度は蓮司の方を向く。
「あなたの言うことも最もであり、魔法は安易に使ってはいけません。しかしここはそれを学ぶ場でもあります。どうか私に免じて許してもらえませんか？」

そして風紀委員長の摩利も同様に蓮司の方を向く。
「私からもお願いする。学内の騒動の責任の所在は風紀委員にもある。今後取り締まりをより徹底することを約束する。ここは溜飲を下げてもらいたい」
上級生二人、1年生の学年主席、さらには弱い立場にある二科生が謝罪をした。その光景を見た蓮司は
(面白れぇな、こいつ…)
先ほどまでの怒りはなく、目の前の存在に興味が引かれていた。だからと言って全ての怒りが収まったわけでなかったが…
(後は俺次第か…)
そう、この場が収まるかは後は蓮司次第だ。先ほどの怒りをぶり返し、もう一度詰問する権利も蓮司にはあったが…
「はあぁぁぁ〜〜〜〜〜〜〜〜〜…」
盛大にため息をつき、左手でＣＡＤの操作を始める蓮司。周囲が何をするつもりかと僅かに警戒を始めたが…
その後の光景に全員が息をのむ。魔法が発動し、右腕が淡い緑光に包まれたかと思うと、数十秒ほど経った頃には完全に怪我が治っていた。通常、どんな回復魔法も連続してかけ続けなければ傷を治せず、しかもそれは数日を要する。それを目の前の人物はわずかな時間で治して見せたのだ。そして徐に右腕を見せて、
「怪我なんかしなかった。制服はさっき走ってたら引っかけて盛大に破けてな、新しいのを買わないとな。」
そう言ってのけた。そして
「だが騒動の原因はお前なんだろ?だったら明日飯でも奢れ。言っとくが俺は常人の5倍は食うぞ」
そう挑発的な笑みを浮かべながら達也に話しかける。それを受けて達也は、
「常識的な量にしてくれよ?小遣いがなくなったら困る」
「だったら猶更だ。財布の中身がなくなるまで食ってやるよ」
そんな会話をしている場はすでに先ほどまでの重苦しいものはなくなり、少しずつ和やかなものとなっていた。そして一科生のもとへ

振り向き、
「何見てやがる、俺が誰と会話しようがどうだっていいだろうが。さっさと失せろ。あと反省文がんばれ」
そう言い放ち、帰るよう促した。生徒たちは気まずい雰囲気のままだったが徐々に帰り、やがて騒動は落ち着いた。

「こんなもんでいいすか」
蓮司は真由美たちの方を振り向きそう呼びかける。真由美たちも安心した表情を浮かべていた。
「ええ、本当にごめんなさいね。本来ならあんなことをした生徒は退学なのだけれど…」
「君はそのまま抹殺しかねなかったからな…そちらを押さえるのに必死だったぞ」
そんな言葉を交わし、二人はそこで校舎へ戻っていった。そこでもう一度振り向き、
「そういえば君たちの名前を聞いていなかったな」
蓮司と達也へ、摩利は改めて尋ねた。
「1—E　司波達也です」
「1—B　龍童蓮司」
「ありがとう、そしてよく覚えておくよ」
そう言い残し、今度こそ戻っていった。

1―6　新たな交流

「すまない、迷惑をかけた上に話を合わせてくれて。本当にありがとう」
「そう思うなら財布の心配をするんだな、満足するまで食うから覚悟しておけ」
「それは本気だったのか…」
　他生徒や真由美たちが去ったあと、そんな言葉を達也と交わし始めた。いまこの場に恐怖や支配といったものは一切なく、むしろ学生らしい雰囲気が漂っていた。
「改めまして、司波深雪です。龍童君、本当にありがとうございました」
「あんたもそう思うなら、同級生の手綱はしっかり引いておくんだな。あんたの意思に関係なく、力のあるやつに群がろうとするのも人間だ。ああいう奴らをコントロールできなければ、また同じことを繰り返すことになる」
「…そうですね、よく肝に銘じておきます」
「ああ、ペットの扱いは慎重にな」
「それはあまりにも辛辣です」
　深雪も同様に蓮司と言葉を交わすことができていた。先ほどの気性の荒さはもはやなく、目の前には気だるげな少年がいた。その空気を感じ取り、各々が話し始める。
「あはは、話したら意外と楽しそうね。あたしは千葉エリカ。よろしくね龍童君」
「西城レオンハルトだ。レオでいいぜ」
「柴田美月です。ありがとうございました。ちょっと怖かったですけど…」
　それぞれの自己紹介を終えると今度は離れたところにいた２人の女生徒が話に加わってきた。
「光井ほのかです。先ほどは大変申し訳ありませんでした！」
「北山雫です。迷惑をかけてごめんなさい」

それぞれが自己紹介と謝罪を行ってきたため、蓮司も同様に応じる。
「龍童蓮司だ。その場を収めるためとはいえ、魔法を使用しようとしたのは悪手だったな。まあ結果としてこじつけの口実になったわけだが…」
そこまで言い、達也を振り返ると苦笑を返された。
「もうだりーし、眠いから帰ろうぜ…達也も彼女にはよく言い聞かせておけよ…」
そこまで蓮司が言い、今度は疑問が場を支配する。
「待て龍童、彼女とはどういうことだ？」
「は？いやいや、お前の隣にいる子以外誰がいるんだよ。そんな雰囲気だしな。苗字が同じってことは結婚してんのか」
蓮司は深雪を指差し、そう言い放った。瞬間、深雪の顔はこれ以上ないほどに赤くなり、エリカをはじめとした何人かは笑いをどうにか堪えていた。
「…龍童、誤解だ。深雪は妹だ。俺の彼女ではない」
「……あい??」
今度は気まずい雰囲気が漂い始めた。

「どうにか収まってくれたか…」
「そうね、あの怒り様を見たときはどうなることかと思ったけど…」
生徒会室で真由美と摩利はそんな話をしていた。あと少し自分たちが遅かったら最悪死者が出ていたかもしれない。あるいはもっと早くあの現場にたどり着けばこんな騒動にはならなかったかもしれない。いずれにせよ、すでに後の祭りだが。
「なんにせよ、彼の人となりを少しでも確認できたのはよかったわ…」
「そういえば真由美、お前…」
そこまで摩利が言いかけ、ドアにノックがかかる。どうぞ、と声をかけると一人の男子生徒が入室してきた。

十文字克人。十師族の一家である十文字家の次期当主にして第一高校の部活連会頭。第一高校の三巨頭の最後の一人である。
「あら、十文字君」
「七草、渡辺、話は聞いた。大事はなかったのだな？」
「ええ、うまく溜飲が下がって話を合わせてくれたからね。本当によかったわ」
「そうか」
そこまで話し、再びある話題に戻る。
「話を戻すが真由美、龍童蓮司のことは以前から気にしていたのか？」
「ああ、そのことね…。かなり特殊な成績の取り方をしていたから気になっていたのよ」
「特殊な成績？」
そして真由美は蓮司の入試成績について伝える。その話を聞いて、摩利も克人も驚がくに包まれた。
「筆記試験を半分近く解かずさぼって、解いた問題は正答率１００％だと!?」
「実技においては主席の司波深雪を超えていたのか…」
「ええ、こんなあべこべな成績は初めてよ。摩利には前に司波達也君の成績も教えたけど、それとはまた別方向で異常なのよ」
そこまで話し、真由美は席を立ち、窓際へ移動する。
「本当に今年は面白い子たちが入学してきたものね…」
波乱の予感を感じながら、真由美はそう呟くのだった。

時刻は夜。蓮司は自宅のアパートに帰宅していた。蓮司には同居する家族がおらず、一人暮らしである。夕食は先ほど買い食いをしたこともあり、空腹感を感じなかったため、今日はさぼることにした。そうして制服から部屋着に着替えた後、缶コーヒーを飲みながら、今日一日の出来事を思い出していた。
「疲れた…」

一日を総括し、一言呟いた。まあでも、面白いものも見れた。奇襲されるとは思わなかったが、その後のやり取りでそれなりの人脈をつかめたのはよかったのだろう。特に1年主席、生徒会長、風紀委員長と関われたのは、面倒ではあるがよかっただろう。

「その後が大変だったが…」

うっかり司波深雪と司波達也が夫婦だなんて勘違いをしてしまったため、その後はとても苦労した。深雪は終始落ち着かないし、エリカはそれを楽しみからかってくるし、美月は何やらものすごく期待した目をしていた。レオやほのかも苦笑いを浮かべ、雫に至っては

「普通間違える…？」

と、心底呆れた目で見られた。あんな視線を向けられたのは初めてだ。魔法師は早産が求められる。その先入観と自分の常識の無さのせいでいらない苦労をした。

「友達…か」

今日関わったメンバーとは気軽に名前で呼び合う仲になった。クラスメートともある程度親しくなったとは思う。後は、そこから何を学ぶかだ。

「メンド―だが…まあ悪くはないか」

そう思った矢先。突然連絡が届きテレビが付く。連絡してきたやつの名前を確認し、これでもかと表情を歪めざるをえなかった。そうして僅かな葛藤の後、連絡に応じた。

『やあやあ不幸面の蓮司君!!学生生活はｅｎｊｏｙしてるかい!?私は今日いい男を抱けてｆｅｖｅｒしたとこだよ!!』

「うるせえよ黙れよ帰れよ死ねよ」

突然のセクハラとそれに対する辛辣な言葉。このようなやり取りはこの二人の間では定番のものではあるが、さすがに疲れていた蓮司は今回ばかりは早く切り上げたかった。それだけ目の前の女は面倒だった。

女性の名は霊峰美琴（たまみね　みこと）。魔法生物やそれに起因する事象の研究を専攻する魔法師兼科学者であり、蓮司の未成年後見人、つまり保護者でもある。生活費などについては彼女が負担してい

るため、僅かばかりではあるが蓮司は美琴に頭が上がらなかった。
　あと性欲が異常に強い。この女自体は美人の類に属しており、出るところは出て引っ込むところは引っ込んでいる。ただし性欲が強いため、いい男を見つけると食べる悪い癖がある。それも見境なしに、だ。
『つれないねえ、そんなだから君はまだＤＴなのさ』
「てめえみてーな糞ビッチに食われるよりは守った方が遥かにましだ。」
　そんないつもの会話が続いたが、不意に美琴は微笑んだ。
『とりあえず良かったよ。一度君の怒りの感情が際限なく上がっていったからどうなることかと思ったよ。その後は機転の利く子がいて、それに君も乗ってれたみたいだから助かったけどね』
「…悪かった」
『謝る必要はないさ。普通の人間でもあれは怒って当然だ。むしろ最後はよく冷静に判断してくれた』
「……相変わらず、お前の情報収集能力はどうなってんだよ」
　しかいこういう慈愛のようなものがあるから、この女は嫌いになれない。
『で…どうだい、友達ができた気分は？』
　またしても優しさのある声色でそう尋ねてきた。
「…そうだな。まあ悪くはない、退屈もしない」
『…いつか君の口から「楽しかった」と聞いてみたいものだね』
　そうして微笑んだ後、次の要件に移った。
『そうそう、君に伝えなければならないことがいくつかあるんだ…』

　夜。司波家のリビング。そこには部屋着に着替えた達也と深雪がティータイムを楽しんでいた。しかし達也は終始黙っていることもあり、会話が弾んではいないようだった。
「…お兄様？どうかなさいましたか？」

流石の深雪もいつもとは明らかに違う兄の様子が心配になった。深雪は今日の出来事で達也に迷惑をかけたことを気にかけていたが、達也の思考は別のところにあった。
「いや、そうだな…アイツのことを考えていた。」
「それは龍童君のことですか？」
「まあね」
そう、達也の思考はそこに集中していた。特に意識がいったのは彼の持つ二面性。一つは荒々しく、獣という表現すら生ぬるく感じる激怒した姿。もう一つは気だるそうで常に眠そうであり、食い意地は張るものの時に冗談も交える姿。あまりにも極端ともいえるその姿は達也の中で強く印象に残っていた。だが達也が最も気にしていたのは…
「深雪、正直に言おう。蓮司が怒りを浮かべ俺たちのもとに訪れ、自身を攻撃した者を排除しようとしたとき…俺は心の底から恐怖を感じていた」
「ッ!!?お兄様、それはっ!?」
「ああ。『激情』を無くしたはずの俺が、お前以外のことで心の底から『恐怖』したんだ。その出来事が頭から離れない」
あの時に感じた『恐怖』。あれは心の底から湧き上がる感じだった。蓮司の何にそこまでのものを感じたのか。達也には答えが出せなかった。
「…それでも、龍童君の優しさは本物だと思います。怖い面もありましたが、同時に他者を気遣える優しさも嘘とは思えません」
「…そうだな、ありがとう深雪。」
そう言って達也は深雪の頭をなでる。蓮司は何者なのか。それはこれから少しずつ知っていけばいいと結論付け、家族との時間を楽しんだ。

1―7　生徒会室

騒動のあった翌日。登校すると昨日の二科生たちと司波兄妹に会った。
「あ、蓮司君じゃん！おはよー」
「蓮司、おはよう」
「おはようございます、龍童君」
「おう、おはようさん」
続いて達也へと視線を向ける。
「よう達也、財布は大丈夫だろうな」
「分かったからその話を繰り返すな。傍から聞いたらただのカツアゲだぞ…」
最後に深雪の方を向く。
「……」
「あ～、その、昨日は悪かったな」
「い、いえ！別にいいんですよそんなこと！そ、そ、それだけ私とお兄様が、ふ、夫婦のように仲が良く見えたってことですから…／／／」
最後の方は消え入りそうな声だったがしっかり聞こえており、周囲も苦笑いを浮かべる。
「ほら蓮司君、そーゆーのは蒸し返さなくていいの。それより行こ！」
エリカがそう声をかけ、全員がその場から移動しようとした時だった。
「達也く～～ん、蓮司く～～ん、おはよ～～！」
そう声を出しながら小走りで駆け寄ってくる真由美の姿があった。その姿は周囲からも目立っており、達也たちは何事かと固まり、蓮司に至ってはあからさまに面倒そうな態度を出していた。
「ちょっと蓮司君、その顔は何？まるでめんどーって顔してるわよ」
「流石先輩よくお分かりで。付け加えるなら糞めんどーそうだなって思ったんすよ…」
「出会い頭に失礼ねこの後輩!?」
まるで漫才のようなやり取りに空気が少し和んだところで、改めて

真由美が全員の方を見る。
「皆さんおはようございます。反省文の準備は大丈夫ですか？」
「おはようございます会長、そちらは問題ありませんよ。お一人なんですか？」
「そうね、朝は特に待ち合わせとかはしてないのよ」
　そこまで会話が進み、今度はしっかり深雪の方へ向く。
「深雪さん、今日のお昼はお時間ありますか？実は折り入ってお話したいことがあるんです。」
「それは生徒会の関係ですか？」
「その通りです。よかったら達也君が一緒でも大丈夫ですよ」
「それはそれで問題があるようにも感じますが…それに弁当の用意もありませんし」
「生徒会室にはダイニングサーバーもあるから大丈夫よ」
　これには達也たちも驚いた。入る前に言うのもあれだが、遅くまで仕事をすることもあるからしい。そしてここまで話して、蓮司にも話が振られる。
「蓮司君もどうですか？実は摩利が君に相談があるんですって」
「生憎と今日は達也におごってもらう予定だったんで。それに風紀委員長が直々に話とか嫌な予感しかしな…」
「ダイニングサーバーはお代わり自由で料金無料よ」
「大事な話ならしょうがないですね是非伺いましょう」
　なんとも現金な性格でちょろいものである。これが昨日底冷えするほどの威圧感を放っていたのと同一人物なのだから不思議なものである。
「そうだ、よかったら皆さんもどうですか？」
「せっかくですが遠慮しておきます」
　真由美はエリカたちも誘ったが当のエリカはずいぶん素気ない態度で拒否の返答をした。これには周囲も困惑していたが…
（こいつ、渡辺委員長の話になった辺りからずいぶん不機嫌になったな…何か個人的にあるのか？）
　その異変に気付いたのは蓮司のみであり、それ以上突っ込むものは

いなかった。
「そうですか…では深雪さん、達也君、蓮司君、またお昼に生徒会室で！」
そう締めくくり、今度こそ達也たちは校舎に入っていった。

「蓮司君、昨日何かあったの？なんか騒ぎになってたって聞いたんだけど」
「情報はえーな英美…」
教室で過ごしていると英美にそう声をかけられた。まああんな目立つところで騒動があったのだから誰かしらが見ていてもおかしくはないか、と蓮司は結論付け、あらましを伝えた。
「え～～、A組ってそんな感じなの？それは何かやだな～…」
「A組のみならず、この学校の一科生はそんな感じだろーが。たかが数項目でしか測れないテストの数値のみで優越感に浸ってるボンクラどもだ」
「それを私たちの前で言い切る君も大概だよね…」
そんな会話を弾ませていると気付けば授業の時間となり、時間はあっという間に過ぎていった。

昼休み。それは昼食の時間でもある。一世紀ほど前にはその時間まで待つことができず弁当を食べてしまう「早弁」なるものが横行した時代もあったほど、食事というものは大事なのである。
「ここまで長かったな…」
「そこまで長くもないだろう…」
そんなやり取りをしながら、深雪、達也、蓮司の三人は生徒会室前に到着した。深雪が代表してノックをすると
『どうぞ～』
と返事があったため三人は入室する。
生徒会室には四人の女生徒が既にいた。真由美、摩利の二人は昨日

の騒動ですでに知っており、あと二人は初めて見る顔だった。一人はストレートのロングヘアで手足も長く、きつめの印象だった。もう一人はかなり小柄であり、ともすれば中学生でも信じられないかもしれない。そんな感想を蓮司が抱いていると、

「失礼します」

深雪が一歩進んで姿勢を正し深々と頭を下げた。それはまるでどこぞの令嬢がパーティー等で行うもののようであり、これには真由美たちもその雰囲気に?まれてた。

(こいつ、一般家庭の出じゃねえのか…?どこでそんなもん身に着けんだよ…)

蓮司は若干いぶかしく見ていたがそんなものはこれから起きることと比べると些細なことだろう。何故なら、これから昼食が始まるからだ。

「それでは改めて生徒会のメンバーを紹介しますね」

少し食事が進んだのち、真由美が話を切り出した。ちなみに蓮司はお代わりをもうすぐ食べ終わる。

「私の隣が会計の市原鈴音。通称リンちゃん」

「私のことをそう呼ぶのは会長だけです」

鈴音は静かにそう切り返した。

「そしてその隣が、風紀委員長の渡辺摩利」

「改めて、よろしく」

摩利も短くそう返す。

「それから書記の中条あずさ、通称あーちゃん」

「会長…お願いですから後輩の前であーちゃんは止めてください!私にも立場があるんです!」

あずさはそう弱弱しく返した。これでは確かに「あーちゃん」である。

「そしてここにいませんが、副会長のはんぞーくんを加えたメンバーが現生徒会です」

そこまで話して蓮司の方へ向く。
「蓮司君、聞いてたかしら？」
「聞いてましたよ。卵は半熟の方が俺の好みです」
「聞いてないじゃない!?」
「冗談ですよ、よろしくです先輩方」
そう言いながら三杯目のメニューを終え、四杯目に入ろうとしていた。
「どんな胃袋をしているんだ君は…」
「す、すごいですね」
「それでいて食べ方もきれいです」
もはや全員の興味は蓮司の食欲に移っていた。これには達也と深雪も呆れるばかりだった。

食事がある程度終わったところで真由美が新たに話を切り出した。蓮司は5杯目の食事を食べ終え、ある程度満足したようだ。
「では深雪さん。あなたには生徒会に所属してもらいたいと考えてますがいかがでしょう？」
そう真由美に問われ、深雪は少し考えた後、返答をしだした。
「会長は、兄の成績をご存じでしょうか？」
「っ!?」
「？」
深雪の質問に達也は驚がくし、蓮司は純粋に疑問を感じていた。生徒会に二科生が所属した記録は確かなかったはず。成績上位者がなることが恒例だからだ。いくら身内とはいえ、二科生の兄の話を始めたことにただただ疑問を感じた。
「ええ、もちろん。入学試験7教科平均、100点満点中96点。特に魔法理論と魔法工学は圧巻で、両教科とも小論文を含めて文句なしの満点。前代未聞の高得点よ。こんな点数、私でも取れないわきっと」
「は？」
だが蓮司の疑問は真由美の回答によりすぐ解消されることとなる。自分も受けたから分かるが、あの問題はなかなか難易度が高いもの

だった。特に小論文など、どれだけ知識や文章能力があろうと文章を書く際の個人の癖があるため、満点などそうそう取れるものではない。それを隣にいるこの男は成し遂げたというのか。
(こいつは純粋に驚いた。頭がいいとは思ってたが、まさかそんなレベルの頭脳の持ち主だったとはな)
素直に蓮司が驚いている中で、深雪はさらに熱弁を続ける。
「私を末席に加えていただくのはとてもうれしいですが、兄は私より優秀です。ともに入れていただくことはできませんか!?」
「残念ながらそれはできません。」
しかしそこで鈴音が待ったをかけた。
「生徒会役員は一科生から選ばれるのです。これは不文律によるものではなく、規則です。」
そこまで聞き、蓮司もなるほどと納得した。デスクワークで見るなら二科生にだって可能性はあるはずだ。特にこの現生徒会長の真由美はそういった差別を助長するような人物ではないとは思っていたが、規則なら仕方ない。
(その規則を設けたやつもゴミのようだがな…)
そう感じていると、深雪は頭を下げた。
「…不躾な発言をお許しください、先輩方」
「いえ、デスクワークなので成績優秀者はもちろんほしいのですが、生徒会が規則を破るわけにもいかないので…」
どうやら本音でいえば鈴音も達也は最適な人材と考えているようだ。
「ええと、それでは改めて深雪さん、生徒会入りを引き受けてくださいますか?」
「未熟な身ですが、よろしくお願いいたします」
ここで話は完結した。
「それにしても達也、お前とんでもない成績だったんだな。流石は深雪の兄貴ってとこか」
「何言ってるのよ。成績でいえばあなたもとんでもないでしょう?筆記試験を半分さぼって、実技試験で主席だった龍童蓮司君?」

真由美が更なる爆弾をぶち込まなければ。

1―8　風紀委員

突然ぶち込まれた真由美の爆弾発言に、その成績を知る真由美と摩利以外は全員黙り込んだ。特に達也の驚がくは先程のものをはるかに超えていた。達也は深雪の成績をもちろん記憶している。故に深雪が、筆記試験2位、実技試験2位で、総合で主席であることはもちろん知っていた。深雪を超える魔法力を持つ存在に興味があったものの、まさかそれがすぐ隣にいる人物だったとは微塵も思わなかった。

「…あんた、いきなり何言ってんだ」

「事実でしょう?はっきり言わせもらうと、あなたの実技試験は歴代最高点よ。魔法発動速度、魔法式規模、情報書換強度。その全てにおいてあなたは圧倒的だった」

そこまで興奮気味に話した後、真由美は心底呆れた表情を浮かべた。

「その癖に筆記試験は中盤以降一切解かず、全て白紙で提出している。なのに回答した問題の正答率は100%。だからこそあなたは合格してここにいる。普通ないわよ、こんなあべこべな成績」

点数の内訳までばらされいよいよ周りは混乱し始める。こんなことは普通ありえないからだ。

「会長、それは本当なんですか?」

「事実よ。あの時、先生たちも非常に困った表情をしていたからよく覚えてるわ」

「…どういうつもりだ蓮司。前代未聞だぞ」

素直な疑問を蓮司にぶつける達也。すると蓮司は

「…まあ、あれだ…調子が悪かったんだよ…」

非常に答えにくそうに、苦々しくそう答えた。これには周囲も意外な反応を見せる。普段の蓮司や先ほどのマイペースな姿を見たならば、もっと飄々とした態度で答えることを想像したはずだ。しかしその予想に反し、今の蓮司は顔をしかめ、今すぐにでも忘れたいといった表情を浮かべた。すると蓮司は面倒そうに、いつものように気だる

げに次の話を促した。
「もういいだろこの話題は。話を進めてくれよ会長さん。なんでこのタイミングで俺に話を移した？俺を呼んだことと関係があるのか？」
「…そうね、次に移りましょう。もちろん、君を呼んだのにもちゃんとした理由があります」
「ここからは私が話そう」
　そう言って今度は摩利が話し出した。
「単刀直入に伝えよう蓮司君。君を風紀委員に入れたい」
「はい？」
「君の実技試験の結果はさっき真由美が話した通りだ。うちとしてもそんな実力者を放っておきたくなくてね。是非とも迎え入れたいんだ。」
　そう摩利はまとめ、蓮司を勧誘した。一方の蓮司は軽く困惑する。はっきり言って柄じゃない。
（この女何考えてやがる？他の先輩たちの様子を見るに話す内容は予め知っていたようだな。）
　生徒会の面々の様子を観察して、事前に打ち合わせ済みであることを確信する。あずさを見た瞬間ものすごい勢いで目を逸らされたことは一先ず置いておく。
（だがそれでも解せない。そもそも風紀委員は校内の治安維持がメインのはず。入学早々の校門前の一件であんな態度を先輩に取ったなら普通取り締まられ…まて、校門前の一件？）
　そこまで考え、昨日の出来事を思い出す。攻撃されたことで怒りが頂点に達し、真由美や摩利に対して失礼では済まされない態度を取った。いくらこの二人でもあんな状態の蓮司を見たなら、それを無視できるはずがない。だとするなら…
「なるほど…監視が目的か」
　そう呟くと真由美や摩利たちは一様に驚く。逆に事情の知らされていなかった達也や深雪は、なるほどと納得した。
「…君は洞察力もかなりあるようだな。そこまで分かっているならしっかり伝えるべきだな」

「ごめんなさいね蓮司君。だまそうとしてたわけではなかったのよ。あなたの実技試験の結果を頼りにしたことは本当なの」
「そんなもん素直に言うわけにいかないでしょう。「あなたは力があって、でも暴れやすい危険人物だから私たちが監視することに決めました」なんて」
　軽く冗談を交え、雰囲気を軽くする。そこで摩利と真由美は改めて説明をした。
「君の実技が抜きんでているのは、実技試験の結果はもちろん実際にこの目で確かめている。あんな回復魔法を何でもないことのように発動し、さらには瞬時に周りの状況に合わせたその観察眼、僅かな情報から状況を正確に判断できる洞察力は素晴らしい」
「けど同時にとても恐ろしい一面を見てしまったわ。はっきり言ってあそこまでの恐怖を感じたのは初めてよ。最初はどうしたら生き残れるかとか、どうすればこの状況を切り抜けられるかとかを考えるのに必死だったもの。」
「ここまで来たから言わせてもらうが、私は君を爆弾のようにも感じている。何かのきっかけでいつはじけてもおかしくない。だからこそ近くに置いておきたいんだ。いざというときに私たちがすぐ駆け付けられるように」
　そこまで話し、真由美は改めて蓮司をまっすぐ見つめる。
「改めてお願いします、蓮司君。風紀委員としてその実力を発揮してもらえませんか？何かあった時は、私たちも全力でフォローします」
「私からもお願いしたい。君の力を、正しく活かしたいんだ。」
　そして二人は改めて蓮司に話しかけ、要請を出す。ここまで素直に話してもらえたなら、蓮司の答えは決まっているようなものだった。
「すべて話してもらってありがとうございます。その話受けましょう。うまく使ってくださいね。」
　蓮司は承諾した。ここまで明確な目的があるなら納得する。むしろあの状態を見て完全放置ならそれもどうかと、蓮司自身も考えた。
　そして蓮司の返事に生徒会や摩利は安堵した。
「よかったわね、摩利！」

「一先ず落ち着いてよかったです」
「ああ、最初の問題は＜ｓｐａｎ　ｃｌａｓｓ＝”ＦＩＮＤ＿ＩＮ＿ＰＡＧＥ　ＦＩＮＤ＿ＩＮ＿ＰＡＧＥ＿ＳＥＬＥＣＴ”＞意外にもあっさり解決できたな」
「でもやっぱり怖いです…」
「あ…？」
「ひいいいいいっ！なんでもないですぅぅぅ…」
「龍童君！中条先輩を威嚇してはいけませんよ！」
「お前は一度怖がらせないと気が済まないのか蓮司…」
　気付けば生徒会室は和やかな雰囲気に包まれていた。

「さて、あとは…生徒会推薦枠の補充だな」
「急かさないでよ摩利…中々難しいのよねぇ…」
　先程、最初の問題と言っていたが、どうやらまだ人員の補充は完了していないようだった。時期が時期であるため、そろそろ決定しなければいけないらしいが、新しい人材は早々見つけられるものではない。蓮司が特殊なのだ。
「安心しろ真由美。実は解決案を先ほど思いついたんだ」
「え、本当!?」
「ああ」
　そこで摩利には考えがあるらしく、真由美に確認を取る。
「人員の選出に一科生の制限があるのは生徒会役員だけだったよな」
「そうね、それは規則だから今はどうしようもないけど…あ」
　そこまで言い、摩利が何を言いたいのか、真由美は理解したようだ。
　同時に、それまで特に関係のなかった達也は嫌な予感を覚える。
「ならば風紀委員の選出には…」
　そこで区切り、摩利は達也を見て笑みを浮かべる。
「二科生であっても問題はない、ということだな」
　そう言い放った。その瞬間達也は盛大に顔をしかめ、反対に深雪は期待に大きく胸を膨らませる。そして蓮司はなるほどと感心した。この二人の話を聞いたりそれぞれの様子を見て気付いたが、この二人

は第一高校を取り巻いている一科生と二科生の溝をどうにかしたいようだった。そのきっかけを探していたようだが、そこへ達也という人材が舞い込んだ、ということだ。
この提案に真由美は満面の笑みを浮かべ、しかしそこで達也が声を荒げる。
「待ってください！先ほどの話の通りなら、風紀委員の主な仕事は魔法の不適正使用などへの対処がメインのはずです！自分で言うのも情けないですが、俺は実技がダメだから二科生なんです！」
「それでもお前ならできんだろ、達也」
それに対して答えたのは蓮司だった。これには周りの面々、特に深雪はとても驚いていた。予想もしない方面からの援護なのだから仕方なかったかもしれない。
「どういうことだ蓮司、冷やかしなら…」
「風紀委員といっても組織である以上デスクワークだって存在する。さっきの深雪の言葉、そんでお前の筆記の成績を加味するなら十分お前にも活動可能だ。何より…」
そこで一旦区切り、今度は楽しそうな表情を浮かべる。
「起動式を見ただけでどんな魔法が使用されようとしたかが分かる。そのお前の頭脳と眼は十分治安維持に役立つはずだ。」
それを聞き、達也は非常に気まずい表情を浮かべる。何故ならそれを言ったのは他ならない、達也自身だった。自分からそう発言し、それで蓮司の怒りを無理やり抑えた以上、それが出任せの嘘だったなどという言い訳はあったとしても通用しなかった。
そこで予鈴がなった。あと僅かで授業が始まってしまうためそこで話は一旦終了となり、続きは放課後に行うことになった。ちなみに去り際、真由美や摩利、そして深雪は非常にご機嫌だった。

「達也、明日こそ５人前奢れよ」
「あくまで俺の財布を使うつもりか、蓮司…」

1―9　対峙

「それではこれより、服部副会長ＶＳ蓮司君の試合を執り行う！」
汎用型のＣＡＤを構え、いつでも動ける準備を行う生徒会副会長、服部刑部。
気怠そうに、しかし視線は鋭く、目の前の獲物を逃がすまいとする蓮司。
なぜこの二人が対峙しているのか。それは少し前に遡る。

昼休憩の後、クラスメートの英美や鋼に先ほどの一件を伝えたり、その後の授業で眠ったり（教師がいくら呼んでも起きなかったが、起きた直後に指名してもちゃんと答えたため、その授業中は不問となった）と、色々ありながらも放課後を迎えた。
睡眠学習のせいで教師に呼び出しをくらい注意されたものの、あまり細かいことは言われず、そこまで時間を浪費せずに済んだ。
そうして約束した生徒会室に向かい、ノック後に入室すると
「思い上がるなよ…補欠の分際で!!」
そんな怒号が突然聞こえた。その言葉を発したのはとある男子生徒。昼間におらず今ここにいるということは、恐らく生徒会副会長
「はんぞーくん」なのだろう。そして蓮司はその生徒に見覚えがあった。
（こいつ、入学式の日に会長の後ろにいたやつじゃねーか。糞真面目でめんどうーそうな雰囲気だった奴）
そんな感想を抱いていると、達也が僅かにほほ笑んだ
「何がおかしい！」
「魔法師は常に冷静であるべき、なのでしょう？」
「っ…！」
「別に風紀委員になりたいわけではないですが…妹の目が曇っていないことを証明するためならば、やむを得ません。」

「…いいだろう。身の程を弁えることを教えてやる。雑草」
そこまで聞いて、おおよその流れが理解できた。恐らく、あの副会長と思われる人物は一科生であることに強い誇りがあり、達也の風紀委員入りに強く反対したんだろう。そんなものを聞けば、当然お兄様大好きっ娘の深雪が黙っているわけがない。そこでさらに副会長と深雪が口論になったところを達也が止め、自分の実力を見せることで証明することにした。そんなところだろう。
(くだらねぇな…)
ここで蓮司は一気に冷めていた。彼にとってそんなプライドは塵ほどの価値もない。そんなものにこだわるから物事の本質が見えてこない。目の前の男はその典型例だった。
「ん?ああ蓮司君、来ていたのか」
そこで摩利がこちらに気づき、全員がこちらを見る。その中で、達也が真っ先に蓮司の雰囲気に異変を感じていた。
(なんだ?昼間と違って、ずいぶん不機嫌だな…)
そんなことを考えていると服部が摩利に話しかける。
「委員長、彼は?」
「ああ、彼は龍童蓮司君。新しい風紀委員だ」
「…確か例の問題を起こした生徒ではなかったですか?そんな生徒をなぜ…」
「渡辺風紀委員長」
そこまで服部が話したところで、蓮司が割り込んできた。そこでその場の全員が、蓮司の雰囲気に気づく。代表して、呼ばれた摩利が話しかけた。
「…どうしたんだ、蓮司君?」
「風紀委員会入りはなしでお願いします」
「な!?」
突然の拒否宣言に全員が驚く。
「ど、どうした!?いきなり何を…」
「こんな阿保な選民思想に取りつかれて虚構の優越感に浸ってる低能野郎の近くで働くなんて、死んでもごめんだ」

そこまで蓮司が言いきり、今度は沈黙が場を支配する。少しして服部が言われたことを理解し、怒気を込めて睨む。
「それは私のことを言っているのか、1年生？」
「自覚があるだけ褒めてやるよ、ゴミ野郎」
「貴様…」
二人の間の空気が急速に冷えていくのを感じる。あまりに突然の展開に周りはついていくことができない。その中で、蓮司は次に達也に話しかける。
「達也」
「…どうした、蓮司」
「この後、こいつと試合やんだろ？」
「ああ、その予定だ」
「それ、先によこせ」
もはや周りは状況を呑み込めない。だが摩利と真由美は気づき始める。彼は先程の服部のような発言は嫌っていたと。単に差別することが許せないのではなく。優越的な地位に自分が存在していると考えていることを嫌悪していることに。
「…なんのつもりだ、新入り」
「あんたの立場を分からせてやるって言ってんだよ。黙ってありがたがれ先輩」
「…いいだろう、先に貴様をしつけてやる」
そうして話は冒頭に戻る。

「審判は私がする。相手を死に至らしめる術式、回復不能な障害を与える術式、相手の肉体を直接損壊する術式の使用は禁止。ただし捻挫以上の傷害を与えない攻撃は許可する。また武器の使用は禁止するが、素手の直接攻撃はあり。けり技の場合は専用のシューズに履き替えること。勝敗は一方が負けを認めるか、審判が続行不可能と判断したときに決する。以上だ」

摩利がルールを説明し、双方が同意する。ギャラリーは先程生徒会室にいたメンバー、そして…
「ごめんなさいね、十文字君。忙しかったでしょう？」
「気にするな七草。奴の実力は一度見て起きたかった」
そう真由美と話すのは、部活連会頭の十文字克人だ。彼とはここに来る途中で会い、事情話すと試合を見ると言い出した。
（あいつが十文字克人。十文字ってのは確か現十師族だったか。…強いな）
蓮司の興味は、目の前の服部ではなく、途中参加の十文字に向いていた。それを見て、服部はさらにいら立ちを募らせる。
「貴様、これから試合なんだぞ。目の前の相手に集中したらどうだ。それとも集中力がそれほどしか持たないのか？」
「あんたの何に価値を感じて興味を持てばいいんだよミーハー野郎」
「へらず口をっ…！」
服部はさらに怒りを感じたが、これ以上は不毛だと断じ、改めて集中し直す。
「ふむ…あれはいかんな。先輩への態度はなっていない。俺が正そうか」
「空気を読んでね十文字君。今はそれどころじゃないでしょ」
ここに若干の天然を発揮する十文字と、それに突っ込む真由美という何ともあべこべなコンビが誕生していた。
「双方準備はいいか？」
摩利が改めて声をかける。服部も構え、蓮司は変わらず呑気に突っ立っている。そこで摩利が異変に気付く。
「ん？蓮司君、はやくＣＡＤを構えないか」
「いらねえよそんなもん。ハンデだハンデ」
これには周りも困惑を隠せない。現代魔法において、ＣＡＤの存在は非常に重要だ。これがないと魔法を発動することはかなり難しく、発動できてもあまりに遅すぎるからだ。しかし蓮司はあくまで姿勢を変えない。これ以上は待っても仕方がないと判断した摩利は、試合の合図を開始した

「それでは…始めっ！」
真っ先に動いたのは服部だった。ＣＡＤを僅かに操作し、敵を吹き飛ばすための魔法を発動する。第一高校でも実力者に数えられる服部のスピードはさすがの一言に尽き、この場の観戦者たちは素直に感心していた。
そうして放たれた魔法を。

対戦者の蓮司は。

蹴り上げて吹き飛ばし、無効化した。

「「「「「「……はあぁっっ!!??」」」」」」
蓮司以外のほぼ全員が信じられないと言った声を出した。唯一声をあげなかったのは十文字のみだったが、それでも驚嘆は隠せなかった。それもそうだろう。
一体どこの世界の、魔法を蹴って無効化するも者がいるというのか。しかし残念ながらそれは目の前にいる。そして忘れてはならない。まだ試合は続行中だということを。
「隙しかないぞ、ボケ」
そこで服部はハッとして声の方角を探すがもう遅い。蓮司は次の攻撃の構えに入っていた。拳を引き、素手の攻撃の構えをしていた。服部は何とかしようとしたが慌てすぎていたため何もできない。そうして放たれる蓮司の攻撃。
その拳は、直接服部に触れなかった。しかしそこに込められた何かを食らった瞬間、服部は強烈な痛みと突然の呼吸困難に陥り、倒れこむ。そして、それ以上試合の続行は不可能と判断された。
「し、勝者！龍童蓮司！」

それを聞き、自分は負けたのだと理解する。そして服部は蓮司を見上げた。そしてその瞳に唖然とした。
それはまさしくゴミを見る目だった。目の前の存在を底辺と確定させ、圧倒的な差があることを表している目。そして蓮司は屈み、服部にはっきり聞こえるように呟く。
—どうだよ、負け犬の気分は。てめえが見下し続けたゴミどもと同じ穴にはまった気分はよ—
「っっっ!!!」
服部は悔しさが急速にこみ上げたが、言葉を発せない。それは蓮司の攻撃を受けたからだが、同時に返す言葉が見当たらなかったからだ。
蓮司の言葉はその通りで、正真正銘、自分は負け犬となった。変化する状況に対応することができず慌てた挙句、何もできなかった。目の前の存在との圧倒的な差を理解し、超えられないと感じてしまった。それは正しく、第一高校の二科生の大半が一科生に感じていることと全く同じだった。
第一高校の一科生としても、魔法師としても、今の服部は敗者だった。
「ま、悔しいと感じるならまだいいんじゃねえの」
「…?」
「あんたのいう雑草どもは、その悔しさすら捨ててるやつが多いからな。そこは俺もいら立ちを感じる」
そこまで話して立ち上がり、背中を向ける。
「その気があるならまた受けてやるよ。何度だって叩き潰してやる」
そうして蓮司はそこを離れる。十文字が服部に肩を貸す中で、服部はわずかに笑った。
「…なるほど、俺の負けだな」
ぞういう服部の顔は、僅かだが晴れやかであった。

1―10　蓮司ＶＳ達也（前編）

「蓮司君、魔法師に魔法の詮索するのがマナー違反なのは十分承知している。その上で聞かせてもらいたい。一体何をしたんだ？」
「敢えてタブーを破るその姿勢、嫌いじゃないっすよ先輩」
　摩利の質問に対し、そう返す蓮司。魔法師は簡単に手の内を明かすわけにはいかないとは思うが、これは別に教えてもいいだろうと蓮司は判断した。話すつもりの蓮司の姿を、全員が注視した。
「つってもただ話すんじゃ面白くない」
　そう言って蓮司は達也を指名する。
「つーわけで敢えて聞こうか達也。お前には俺が何をしたように見えた？」
「…正直根拠はない。どうやったかも分からない。それでも答えていいというなら…」
　一度目をつむり、間を開け、そして満を持して答えた。
「俺にはお前が手足にサイオンを集めているように見えた。集めたサイオンを鎧のようにまとい相手の魔法を防御し、直接敵に触れることなく相手の体内にサイオンの塊をぶつけ、戦闘不能にした」
「正解だ。流石にいい眼を持ってるな。」
　その回答に満足そうにする蓮司。そして周囲は信じられないといった表情をする。
　想子。それは認識や思考結果を記録する情報素子である。人間の体内には想子が保有されており、それを消費し魔法師は魔法を使用する。これは俗に「魔法力」とも呼ばれ、これが多いほど大規模な魔法を使用することも可能である（実際には魔法演算領域など、その他の要因も関係しているため、イコールの関係ではないが）。
　つまりサイオンは魔法を使うためのエネルギーのようなものだ。にもかかわらず、目の前のこの男はサイオンを消費して魔法を使うのではなく、サイオンそのものを活用して戦闘手段とした。しかもＣＡＤを介さず、直接だ。
　皆が驚がくする中、改めて蓮司は想子を拳に集中させる。それは青

白く光りながらも、一切の淀みを見せない。
「俺はサイオンコントロールが得意でな。この程度なら、ＣＡＤを使わなくてもできる。そんでこれを応用すれば…」
そう言って手のひらをあずさの方へ向けた。すると…
サイオンの塊が手の形を形成しそのまま伸びて、あずさの頭をなでた。
「ひぃいいいやあああぁぁぁ!?な、な、ええ!?」
「こんな風に直接触れることもできる」
そんな蓮司はいたずらが成功したようで少し楽しそうだった。そしてこの場の全員が蓮司の実力を再確認した。実技試験１位。それはまぐれではなく、正しく評価されたものだった。これほどのサイオン量を誇り、ここまで微細なコントロールをＣＡＤを用いず行える。ならば実技試験は彼にとって容易いものだったのだろう。
（評価を改めなくてはな、蓮司。お前は本当にすごい奴だった）
達也は純粋に尊敬の念を抱いていた。自分にできるかどうかはともかく、自分には思いつかなかった新たな戦法を目にすることができた。未知との遭遇。それは研究者気質の達也には強い興味の対象なのだ。
「驚いたわ、そんな戦い方があるなんて…」
「ああ、特にＣＡＤが使えない緊急時には最適な手法だ。正直、彼ほどできる気はしないが…」
「加えてあの体術。戦闘訓練を怠っていない証拠だ。自らの強みを活かす方法をよく理解している。」
三巨頭がそれぞれ蓮司を褒めるそんな中で摩利は少し不安そうに尋ねた。
「ところで蓮司君、先ほど生徒会室で話していたことは…」
「すんません、頭に血が上りすぎてました。あれは取り消します。お騒がせしてすみません。」
蓮司は先程の「風紀委員は断る」発言を撤回し、謝罪した。元々この模擬戦は達也の実力を見るためのものだったが、それを蓮司が横取りした形だ。流石に非があると感じた蓮司は素直に謝罪することに

した。
「それならいい。まったく君ときたら…」
「ていうか結局達也君の模擬戦はどうするの？はんぞーくん」
「…すみません、今は戦える状態ではありません」
　服部は申し訳なさそうにそう答えた。正直、蓮司の一撃を食らってから今まで自力で立ててはいない。十文字に肩を借りている状態だ。そんな状態では、とてもではないが達也の相手はできないと判断した。
「なら…」
　そこで蓮司は達也を指差し、
「一戦やらねえか、達也？はんぞー先輩に代わって俺が見てやるよ」
　戦いを申し込んだ。周りが僅かに固まる中、達也はそれに答える。
「冗談はよしてくれ。あんな戦いを見せたやつに俺が勝てるわけないだろう」
「別に勝つ必要なんてねえだろ。要は先輩たちに実力を見せればいいわけだ」
「だが…」
「それとも深雪の目の曇り具合は正しかったのか？あいつは身内贔屓に現を抜かすような間抜けだったと？」
　そこで蓮司は達也を挑発した。はっきり言って、発言の中身は分かりやすすぎる挑発だ。だがあえてそれをすることで達也を揺さぶる。深雪を愚か者状態にして放置するのかと、あえて言いきった。当然そんなことを言われれば…
「…お前は本当に人の発言に対して嫌なところをついてくるな。目ざといにも程がある」
「誉め言葉にしといてやるよ。…で？返答は？」
「いいだろう。お前の口車に乗ってやる」
　達也が黙っているわけがない。ここに、未知の戦いが始まろうとしていた。
「ルールは先程と同じだ。続行不可能となった時点で試合終了とす

る。」
　それぞれが配置につき、構える。ギャラリーは先程よりも盛り上がっている様子だった。
「ねえ、どっちが勝つと思う、リンちゃん？」
「単純に考えるならやはり龍童君かと。あのサイオンの鎧の前では大抵の魔法は意味をなさない可能性があります。達也君が突破できる可能性は低いのでは？」
「なるほどねえ。深雪さんはどう思う？」
「お兄様です。お兄様は負けません、絶対に。私は信じています」
「聞くまでもなかったわね…」
　それぞれが勝敗の予想をする中、蓮司と達也はそれぞれのことを考えていた。
（蓮司の先ほどの戦い、身のこなし…荒くはあったが鍛え上げたものだ。奴に対して俺がどこまで予想を裏切れるか…勝敗はそこにかかっている。）
（特化型ＣＡＤをいくつも身に着けてる。状況に応じて使う魔法を変えるなら汎用型を使うのが普通だが、恐らくそれじゃ遅く俺に対応できない。…だが狙いが読めねえな）
　そうして考えている間に準備が整ったと判断し、摩利が合図をする。
「双方とも準備はいいな？それでは…」
　摩利が手を挙げる。同時に両者の目が鋭さを増す。
「はじめ!!」
　今、戦いの火ぶたは切って落とされた。
　蓮司は瞬時にサイオンを拳に集中させ、そこから拳を伸ばして達也に殴りかかった。
（さあ、まずはどう出る達）
　そこまで考え、同時に驚がくした。拳を放ったその先には…達也の姿は既になかった。
（…は!?いないだと!?）
　ここで蓮司は初めて動揺した。一切の油断はしていない。むしろ

今の攻撃手段は蓮司の持つ手段の中で最も使い慣れており、それなりにスピードのあるものだった。しかし達也はそれを遥かに上回る速度で目の前から消えたのだ。
（糞！どこだ！）
そして焦る思考は次への判断を鈍らせる。その間にも達也の魔法は完成していた。
気付けば達也は蓮司の後ろに回り込んでいた。そして達也は右手に構えたＣＡＤより魔法を放つ。放たれた魔法は蓮司の意識を揺さぶった。
「が!?」
突然の予想だにしない攻撃は確実に蓮司に隙を与え、達也にチャンスをもたらした。次の攻撃に移ろうとする達也。しかしここで今度は達也が驚かされることになる。
「がぁぁぁぁぁぁ!!!」
蓮司が雄たけびを上げると同時に、蓮司の全身からサイオンの嵐が吹き荒れた。それに押され強制的に距離を取らされる達也。蓮司は先程拳にサイオンを集めたように、全身にサイオンをまとい、それを衝撃波のように解き放った。敵がどこにいるかを判断できないならば、周囲全てに攻撃すればいいという、なんとも荒業である。
（あいつのスピードは何だ？まさか一瞬で背後を取られるとはな…だがさっきの魔法、明確な隙があったにも関わらず、俺の意識を刈り取るまでにはいかなかった。恐らく、魔法は直接的な脅威ではない）
（距離を離されたか。なんて出鱈目なサイオンの嵐だ。あんな回避技を持っているとはな…だがそんなものが蓮司の本気とは思えない。）
互いに次の手を考える。そして先に動いたのはまたしても蓮司だった。蓮司は先程まで吹き荒れていたサイオンを、今度は自身の手足のみに集中させた。達也はそれを見て、すぐさまもう一度先ほどと同じように魔法を放つ。
しかし蓮司はそれよりもはるかに早く動き、今度は達也の背後を取った。
（背中を取るのはお前の専売特許じゃねえ！）

そうして拳を放とうとする蓮司。対する達也はこちらを見てすらいない。今度こそ一撃を食らわせようとする蓮司。
それに対し達也は。
先程魔法を放ったままの右手のＣＡＤは動かさず。
左手に持ったＣＡＤを蓮司の姿を見ずに向け、魔法を放った。

瞬間、蓮司の拳に集まっていたサイオンははじけ飛んだ。
「は!?」
またしても驚がくに包まれる。そして達也は蓮司の服の袖をつかみ、背負い投げの要領で地面にたたきつける。
「がっ……!」
苦悶の声を上げる蓮司だが、ここで足に集めたサイオンの脚力を活かし、もう一度距離を取る。そして蓮司はさらに思考を加速させる。
(複数デバイスの同時操作だと!?そんなもん普通魔法が相互作用を起こして発動できなくなるのがオチだろうが!)
だが蓮司にとって驚くべきところはそれだけではない。
(さっきの魔法。俺の記憶違いじゃなけりゃ…術式解体か。圧縮したサイオンの塊をぶつけ対象の術式を弾き飛ばす対抗魔法)
そこまで思考が進み、はじかれた自分の手を改めて確認する。
(サイオンの塊だから、直接の術式でなくても弾き飛ばせたってっことか。たく、俺もまだまだだな。こいつ、技巧派かと思ったらとんでもないパワーファイターじゃねえか)
一方、達也も同様に思考を加速させた。
(今のでも仕留めきれなかったか。地面に当てる瞬間、背中からサイオンの鎧が出ていた。そんな緊急回避技もできるとはな…予想に反して、器用な奴だ)
戦いは、まだ終わらない。

1―11　蓮司ＶＳ達也（後編）

ギャラリーは静まり返っていた。それもそのはず。最初から最後まで予想に反することが起き続けていた。何よりの予想外は、蓮司が達也に押され続けていることだった。

「す、すごい…」

「複数デバイスの操作なんて普通かなり難しいわよ…それを何でもないことのように」

「しかも先ほど龍童君の拳のサイオンを吹き飛ばした魔法。あれは一体…」

「恐らく術式解体だろう。圧縮したサイオンの塊を砲弾のように対象物へ直接ぶつけて爆発させ、そこにある起動式や魔法式といったサイオン情報体を吹き飛ばす強力な対抗魔法の一つだ。だが、消費するサイオン量が多いことや、射程が短いことからあまり実戦向きではないとも言われるものだ。」

「達也君もまた、規格外の側だったのか…」

上級生たちは一様に達也の実力を褒めたたえている。一科生の蓮司を二科生の達也が追い詰めるなど、誰も予想だにしなかった。

一方の深雪は、不安に駆られていた。

（体術、複数デバイス操作、術式解体…ここまで手の内を曝したにも関わらず、いずれも有効的な攻撃には至っていない。同じ手を曝し続けてしまうのはまずい…驚くべきは龍童君の対応力ですね）

そう、ここまで手段を曝したにもかかわらず、まだ決着がついていない。

（本来ならお兄様にもまだまだ手段がある。ですがそれは相手を抹殺してしまうもの。こんな模擬戦で使うわけにはいかない…。それでも…それでもお兄様なら）

深雪はそれでも達也を信じた。それは純粋に兄の力を知っており、信じているからこそ。なにより…

（お兄様…気づいておられますか？戦いが続く中でお兄様は…笑っているんですよ？）

そう、達也は確かに笑みを浮かべていた。次に何が起こるか、どんな手で対抗しようか。それを考えることが楽しいようだった。
こんな兄の姿は見たことがない。いつもどこか達観としている兄が、こんな楽し気な姿を見せたことは、今まで一度もなかった。
(龍童君、こんなことを考えるのはおかしいのかもしれませんが…ありがとうございます。この学校に来てくれて。そして…お兄様のお友達になってくれて)
半ば自分の我儘で同じ高校に通うことになったにも関わらず、そんな自分のせいで差別を受ける兄の心を、目の前の対戦相手は引き出してくれている。深雪はこの巡り合わせに感謝していた。
(お兄様…)
そして同時に、深雪はこの世で最も敬愛する兄の勝利を信じ、祈り続けるのだった。

だが、この場にいる全員が忘れていることがある。それも致命的なことだ。

「…く、ふふ、くはははははははっ!!!」
笑っていた。蓮司がとても楽しいと言わんばかりに大笑いをしていた。周りが再度静まる中、ひとしきり笑った蓮司は改めて達也を見る。
「な~にが『俺が勝てるわけがない』だ、このペテン師め。単純にこの学校の魔法評価項目が合ってないだけで、お前も一流じゃねえか」
「別に評価項目は間違っていない。それに俺じゃ、魔法師としてはC級ライセンス程度が限度さ」
「なら国の評価が間違ってるな。まあ、今はそれはいい。」
そこまで話を続け、改めて蓮司は構える。だが、先ほどのよう肉弾戦の構えではない。そして一度呼吸を整えた後、達也の姿を視界に収める。その眼差しはとても鋭く、しかし以前のような威圧感や冷徹さはない。目の前の存在を正しく敵と認め、己に強い誇りを持つ強者の眼だった。

「…いいだろう達也。俺はここに来て、まだお前のことを甘く見ていたようだ。だからこそ、こんな醜態をさらしている」
そう話しながら、蓮司は左手で右腕にあるものを僅かにいじる。
「ここからは第2ラウンドと行こうか。だがこの先は温くはいかない。だから…」
その瞬間、蓮司の後ろに一瞬で20個の魔法弾の射出口たる魔法陣が完成し、完成とほぼ同時に魔法が放たれた。
「死ぬ気で耐えて見せろ」
全員が忘れていた致命的なこと。それは…
蓮司はまだ魔法を使ってはいないという事実。

「なっ…」
今度は達也が驚愕に包まれた。僅かな動作で体勢を整えるのと同時に攻撃を放ってきた圧倒的なスピード。もう術式解体で全てを弾き飛ばすことは不可能であった。何より達也は、自身の失敗を猛省していた。
(あのサイオンコントロールに気を取られすぎた。あれはただサイオンを集めただけで、厳密には魔法ではない！蓮司はこの戦いが始まってから、魔法は一切使っていなかったんだ！)
今更ながら、油断していたであろう自分を責めるも戦いは続く。先ほどの魔法陣から放たれた攻撃魔法は、ただ達也に向かって放つのではなく、達也が回避するであろう方向にもいくつか放たれていた。
(俺の動きは予測済みか！質の悪い！)
しかし、それでも試合であるため、ある程度コントロールされていたのだろう。放たれた魔法攻撃は地面をはじく程度の威力であり、なんとか対応することができた。目の前のいくつかの魔法を術式解体でギリギリはじき、僅かにできた攻撃の穴に突っ込むことでギリギリ回避できたのだ。

「お兄様!!」
深雪が悲鳴を上げる。それでも回避を成し遂げた達也が前を見た瞬間、
「休んでる暇があるのか？」
既に蓮司は３０個の魔法陣を完成されており、うち２０個は達也を囲うように配置され、残りはいつでも逃げた先へ放てるよう準備されていた。
（これは…躱せない）
瞬時に状況を理解する達也。これが実践なら達也にはまだまだ手段はあった。だが試合、それも他に自分たちを見ている者たちがいる状態では手段がない。
「…どっちがペテン師だ。お前の方が質が悪いだろう」
「簡単に手の内を明かさないのが魔法師だ。魔法は本来秘匿されるべきもの。情報をいかに隠せるか、それが戦況を左右する…それで？返答は？」
まるで模擬戦が始まる前のようなやり取りだった。そして
「…ああ、俺の負けだ」
決着がついた。

「…し、勝者、龍童蓮司…」
弱弱しく、摩利はそう呟いた。他の者たちも、言葉を発することができない。それほど圧倒的な光景だったのだ。
前半の戦いを見て、ギャラリーは達也が勝つ可能性が高くなったと考えていた。二科生という立場にありながらその戦い方は洗練されており、終始蓮司を圧倒していた。深雪は最初から信じていたが、他の生徒たちは徐々に達也が勝つのではと考え始めた。
だがその考えは一瞬で覆された。蓮司が右腕に着けた腕輪型のＣＡＤを僅かに操作したかと思うと、一瞬で魔法陣が数多に形成され、達也を襲い始めた。僅かな隙間を作り出し何とか達也が回避しても、

それまでの間に次の攻撃手段を整え、反撃の隙を一切与えない蓮司。その姿は圧倒的だった。
そして紡がれた達也の敗北宣言。それによって決着がついた。
「お兄様！」
誰よりも早く深雪が駆け寄る。最愛の兄が模擬戦とはいえ危険な目にあったのだ。その最中で駆け寄ることができなかったのは、とても心苦しかったことだろう。
達也のもとへたどり着き、達也の状態を確認する。
「け、怪我は!?お怪我はありませんか!?」
「大丈夫だ深雪、ありがとう」
「い、いえ、そんな…／／／」
そんな深雪に、慈愛を持って応える。頭をなでる達也に対し、顔を朱色に染めながらほほ笑む深雪。いまやこの場の主体はこの二人であり、魔法が発動していないのに甘ったるい空間が出来始める。
「…勝ったの俺だよな、なんか敗北者な気分だが…。お前らやっぱ夫婦だろう」
そう呟くと深雪がわたわたとし始める。
「い、い、いやですね龍童君いくら私たちの仲が良く見えてもそれは言いすぎですよそもそも私たち兄妹なのであって世の中にはたくさんの兄妹のありようがあってわた、私たちはその中の一部なのでだからつまりその／／／」
「分かったから喋るなこの残念娘…周りも呆れてんぞ」
そう答えると深雪ははっとして周りを見る。皆が苦笑いで（唯一十文字は無表情だった）深雪を見ており、それに気づきさらに顔を赤くする。そうこうしているうちに達也が立ち上がった。
「改めて、すごかったな蓮司。実技試験主席の名は伊達ではなかったか」
「そういうお前は評価の方向性を間違われすぎだろう。誰だよこいつを劣等生とか言いやがったやつ…」
二人は自然と会話をしていた。先ほどまでの雰囲気が嘘のようだった。

「そんで先輩方。達也の風紀委員会入りは？」
蓮司がそう問うと、皆が口を開き始める
「そんなの、言うまでもないわね」
「ああ。君の実力、この目でしっかり確かめさせてもらった」
「これなら、校内で荒事があっても十分対応できます」
「私には何がなんだか…」
「実力は申し分ない。状況判断力も高いものだ。今後も期待できる」
皆がそれぞれの感想と評価を述べる。そして最後に服部が締めくくった。
「…司波達也。先ほどの暴言を謝罪する。目が曇っていたのは私の方だ」
「いえ、自分も生意気を言いました。そもそもこの騒動の原因は俺です」
服部も達也の実力を認めた。よって満場一致で達也は風紀委員となったのだ。

1―12　新入生勧誘活動期間

「蓮司」
「なんだ」
「掃除だ」
「あいよ」
　風紀委員会本部に来た達也と蓮司はそれ以上何も言わずに掃除を始めた。散乱していたＣＡＤ、ばらばらの資料。達也はこれを見て黙っていることは出来なかった。
「いや、すまない…片付けようとはいつも思うんだ…」
「それは片付けられない人の典型的なセリフです。委員長がそれでいいんですか、渡辺先輩?」
「意外に君も辛らつだね、達也君…」
「悲しんでる暇があったら動いた方がいいっすよ、委員長」
「蓮司君…君もか…」
　そんなやり取りをしながらも、1年生を主導に片付けが進んでいった。
　そしてある程度目途が立った頃、部室に入室するものがいた。
「姐さん、お疲れーっす…って本部が片付いてる!?」
「委員長、ただいま戻りました…って本部が片付いてる!?」
「姐さんいうな!というか全く同じ感想を抱くな!?」
　そんなやり取りをして二人の生徒が入室した。ここに来たということは風紀委員だろう。
「まったく…」
「ところでそっちの二人は?それに一人は紋なしですかい」
「先輩、その言い方は不適切化と思われます。この場合、二科生というべきかと」
　新たに来た二人がそう言うが、
「ああ、新しい風紀委員の司波達也君に龍童蓮司君だ。先に言っとくが嘗めてかかるなよ?蓮司君はさっき服部と試合をして瞬殺したし、隣の達也君はその蓮司君と互角以上に渡り合ったんだ」

「な、マジですかい！」
「入学以来負けなしだった服部を!?それは有望株ですね委員長！」
　摩利が紹介した瞬間、二人の風紀委員はテンションが一気に高くなった。これには蓮司と達也も驚かされた。
「意外か？」
「まあ、多少は」
「この学校はブルームだのウィードだの、そこに固執するものが多くてな。正直うんざりだったんだよ。だから真由美も十文字も、それぞれの組織からそういった意識の少ないやつを選んで風紀委員に推薦してくれているんだ。」
　そこまで話し、風紀委員の二人は挨拶をした。
「３―Ｃの辰巳鋼太郎だ。よろしくな司波、龍童！」
「２―Ｄの沢木碧だ。君たちを歓迎するよ。司波君、龍童君」
　そう言ってそれぞれが挨拶を交わす。すると沢木は達也と握手を行い、
「くれぐれも下の名前で呼ばないでくれ給えよ」
　思い切り握りしめた。対して達也は驚きもせず、
「心得ました」
　その拘束からするりと抜けた。
「へえ…やるじゃねえか、沢木の握力は１００キロ近いのに…」
　鋼太郎がそう呟く。すると次は蓮司にも同様に握手を求めた。
「君もくれぐれも気を付けてくれよ、龍童君」
　それに対し蓮司は握手に応じ、同様に強く握られたが…
「あんたも気を付けてくれよ？下手にかかってこられたら手加減できねえかもだし」
　そう言いさらに強い力で握り返した。
「ッ!?」
「おいおい真っ向勝負かよ!?やるなあ新人！」
「止めろ蓮司。失礼だ」
「本当に君は面白いね、蓮司君」

それから、数日後。第一高校は大いに盛り上がっていた。一般の学校同様に、ここ魔法科高校にも部活動というものが存在する。唯一の違いは、魔法を用いた魔法系クラブと、魔法を使わない非魔法系クラブに二分されている点くらいである。そして今、魔法科高校は新入生を積極的に勧誘できる期間、通称、新入生勧誘活動期間に入っていた。

「なぜおまえがここにいる！」

「開口一番それか」

達也が若干呆れ気味に答える。目の前にいる少年は森崎駿。校門前の一件で言い争いになっていた際の一科生側のリーダー格であった生徒だ。事実、彼の成績は総合４位と優秀であり、今年度の教員推薦枠で風紀委員として活動することになっていた。

だがそのプライドの高さゆえに二科生を見下す発言が目立ってもいる。そして森崎は深雪に対して極端な尊敬の念を抱いているため、その兄であり二科生の達也が非常に気にくわなかった。

だが、ここにいるのは達也だけではない。

「質問に答えろ！なぜおまえのような…」

「うるせえよ紐野郎」

そう言いながら会話に入ったのは蓮司だった。

「な!?お、お前はあの時の!?何でここに!?」

「この度風紀委員長から直々に推薦を受けて入会したもんでね。それよりお前、よくここに入れたな。逆に尊敬するぞ」

「どういう意味だ!?」

「委員長は選民意識のあるやつを嫌う。お前のようなバカは入れるような人じゃないんだよ。分かったか、ガクブルビビり君？」

「お前、言わせておけば…」

そこでさらに騒ぎそうになったところに摩利が本部へ入ってきた。そして開口一番に怒鳴り声が響く。

「やかましいぞ新入り！ここにいるのは全員風紀委員だ、それ以上く

だらないことで騒ぐな馬鹿もん！」
　摩利にそう怒鳴られ、委縮する森崎。一瞬だけ蓮司を睨んだが、それ上の殺気で睨み返され、さらに委縮して席に座った。達也と蓮司も同様に席に着き、ようやく会議が始まった。
「諸君、今年もあのバカ騒ぎの一週間がやってきた！」
　そう摩利が言い始めたのをきっかけに、風紀委員会本部の空気はピリッとしまったものになった。
「風紀委員にとっては新年度最初の山場になる。魔法の不適正使用や騒ぎを見逃さないよう、またくれぐれも風紀委員が率先して騒ぎを起こすことのないように！」
　はいっ！と全員が返事をした。この統率力はさすがと言えるだろう。
「さて、皆にはもう一つ連絡事項だ。見ての通り、風紀委員にも新人が入った。新人は起立してくれ」
　そう言われ、達也、蓮司、森崎の三人は立ち上がった。
「1―Aの森崎駿、1―Bの龍童蓮司、そして1―Eの司波達也、以上3名だ」
「…使えるんですか？」
　すると一人の風紀委員が達也を指差しそう尋ねた。それに対し摩利は非常に楽しそうだった。
「安心しろ。森崎は教員推薦枠で入会。蓮司君は私が直々にスカウトし、実力を示した。達也君はそんな蓮司君と渡り合った者だ。疑うなら試合でもしてみるといい。」
　その風紀委員が言っていたのは達也のことだったが、摩利は敢えて全員の経緯を紹介した。そこまで話を聞き、その風紀委員はそれ以上発言することはなかった。
「他に何かある者は？…では出撃！風紀委員の実力を見せてやれ！」
　そう締めくくり、解散となった。
「…いい気になるなよ、龍童。渡辺委員長に推薦されたからって…」
「つまりお前は先輩の目が節穴だと主張したいわけか。ずいぶんな自

信だな」
「な、そんなことは言ってない！…まあいい、雑草風情と仲良くしているお前に僕が負けるわけがない、それを証明してやる！」
「二人で勝負してろ。そしたら勝者も敗者もお前だけだ。よかったな」
　それ以上の会話は不毛と判断し、森崎の発言を全てスルーし、達也とともに外へ向かった。

「んじゃ達也、俺はこっちの見回りだ。また後でな」
「ああ、くれぐれも問題を起こすなよ、蓮司」
「そっちも二科生だからって絡まれすぎないようにな。氷の女王を君臨させるなよ」
　そんな軽口を言い合い、それぞれ見回りのために分かれた。
「さて、と…」
　途中で蓮司は立ち止まり、両足にサイオンを集め始める。そしてある程度溜まったところでしゃがみ、そのまま盛大に跳躍した。そして屋上にたどり着き自分の担当区域を見始める。更に魔法を使い視力を上げ、全体をより細かく見れるようにした。
「偵察するなら高いところからってな」
　正直半分おふざけもあった。この見回りにそこまで力を入れるつもりはなく、何かあれば駆けつけて、威嚇してビビらせればそれで十分と判断していた。それに蓮司は事前に摩利に頼み、部活動の一覧表ももらっていた。故にどんな部活動が暴れやすいか、ということも念頭に置きながら観察をしていた
　そうして始めた観察もとい見回り。しかし、しばらくして不思議な光景を見る。
「あいつら…光井ほのかと北山雫、だよな」
　そう、入学二日目の校門前の騒動の後、達也たちとともに挨拶を交わし、ともに帰ったメンバーの二人だった。その時聞いた話では二人は幼馴染であるらしかった。だからともに行動していることは何もおかしいことじゃない。問題は…

「…なんでスケボーに乗った女どもに担がれて、しかも委員長に追われてんだ？」
言葉にするだけでも、妙な景色だった。

「止めて止めて下ろしてぇ！無理無理無理無理無理もう無理ぃ！」
ほのかは必死に叫ぶが止まってくれない。一体全体なぜこんなことになったのだろうか。
ほのかと雫は幼馴染であり、二人でよく行動している。だからこの新歓も二人で回ることにしていたが、ここで二人に誤算があった。
それは上級生たちの間では、暗黙の了解で新入生たちの成績が出回っていることだ。そしてそれはこの先の部活動、そして後に控える九校戦の実績のために教員たちも黙認している。そうなれば…入試成績総合2位と3位のこの二人が狙われるのは必然だった。
回り始めて早々に囲まれ動けなくなる二人。しかしここでもさらに予想外のことが起きる。
なんとこの新歓に卒業生が紛れていたのだ。その卒業生は二人を抱えると、颯爽とスケートボードに乗って去っていった。魔法を使用しているためかなり早く、人間の足では到底追いつけない。
そしてそれを見つけた摩利は、鬼の形相でそれを追いかけていた。卒業生に好き勝手されては風紀委員の名が廃ると、容赦なかった。
最早二人にはどうしようもなく、先輩たちのカーチェイスに身を任せるしかなった。しかもお互いに魔法を発動しているため揺れ方も半端じゃなく、もうほのかは限界で、雫も多少余裕があるものの流石に疲労が出ていた。
もう誰でもいい。これを止めてくれないだろうか。そう思ったときだった。
「摩利ってばずいぶん頭に血が上ってるねえ」
「魔法でケガするのは私たちだけじゃないのに。こうなったらもう一

度魔法を…」

「悪いな、あおり運転で逮捕だ。なんてな」

そんな声が聞こえた瞬間、卒業生二人は突然何かに絡まれ、強制的に停止させられた。

「は!?」

「な、ちょっ!?」

突然の急停止に驚く卒業生。そして急停止したせいで空中に投げ出される雫とほのか。

「「きゃあああぁぁぁっ!」」

「おっと、わりい」

そう呟くと、両手にサイオンを瞬時に集め、そのまま伸ばして二人をうまくキャッチする。二人はつむっていた目を開くと、そこには見知った顔があった。

「「蓮司さん!」」

「よう、変わらず仲が良さそうだな」

そう言って笑う蓮司。その姿を見て、二人はようやく落ち着きを取りもどした。同時に、自分の現状に気づき、驚く。

「え、ていうか私たち今空中に…な、なにこれ!?」

「これ、サイオン?それが私たちを掴んで…こんな魔法、見たことない」

厳密には魔法じゃないがな、と蓮司は考えながら驚いている二人をゆっくり下ろす。地面に二人の足がついたところで、今度はあきれ顔を見せる蓮司だった。

「お前ら、新歓初日に攫われるとか…なんかこの間といい、ついてねえな」

「あはは…でも本当にありがとう、蓮司さん」

「蓮司さんはここで何を…え、それ風紀委員の腕章?」

「柄じゃねえがな。腕っぷしだけ買われて風紀委員入りだ」

「ちゃんと人柄だって評価しただろう。嘘はつかないでくれよ、蓮司

君」
　そう言ったのは卒業生二人の拘束を終えた摩利だった。卒業生も突然の急停止で目を回しており、捕らえるのは比較的簡単だった。
「それにしてもよく進行方向が分かったな。よく先回りして罠を張ってくれた」
「屋上から観察してたらそいつらが見えたもんで。スケボー乗ってたんで多分バイアスロン部に向かう気がして先回りできたんすよ。そこまで行けば、後は罠を張るだけっす」
「流石の洞察力だが、屋上からだと？相変わらずめちゃくちゃというか…」
　苦笑しながら摩利は感想を述べた。
「とにかく助かった。私はこいつらを連れて行くから、引き続き見回りを頼むよ」
「あいよっす」
　そこで摩利とは別れた。残されたのは一年生たちのみ。
「…私たち、どうしよう？」
「うん…」
「興味があるならこの先にＳＳボードバイアスロン部の練習場がある。行ってみるといいんじゃねえの」
　そこで蓮司が提案し、二人はそれに乗ることにした。正直、あの会場には戻りたくなかったので非常に助かる提案でもあった。
「わかった、じゃあ行ってみるね。蓮司さん」
「おう」
　そう短く返し、蓮司は会場の方に戻っていく。
「蓮司さん！」
　去ろうとする蓮司に声をかけたのは、ほのかだった。まだ何かあっただろうかと不思議に思い蓮司が振り返ると、
「助けてくれてありがとう、蓮司さん！また今度、一緒に帰ろうね！」
　そう笑顔で呼びかけた。わざわざそんなことを大声言うのかと若干呆れながらも、蓮司も笑って返事をした。
「ああ、またな」

一方その頃。別会場、第二小体育館、通称闘技場にて。二科生の風紀委員の司波達也が上級生の桐原武明を魔法の不適切使用により拘束し、それに逆上した剣術部員が達也を襲ったが、誰一人傷つけることなく無力化するという事件があった。

「なあなあ達也君聞かせてくれよ。別れる前に俺になんて言ったっけ？『くれぐれも問題を起こすなよ、蓮司』だっけ？そう言った君が何で初日からそんな風に話題になってるの？実は君も問題起こすの好きなんじゃないの？是非とも君の所見を聞きたいもんだね達也君？」

「分かったから静かにしろ蓮司…俺だって好きで乱闘騒ぎにいたんじゃない…」

1―13　恐怖の帝王

「大活躍だったんだってね、蓮司君！」
「噂が本当なら違反者なんてこれから出ないんじゃない？」
「俺は平和的に解決してやっただけだぞ、英美、鋼…ふぁ…働いたから眠い…」
　新入生勧誘活動期間が終了した後の食堂にて。蓮司、英美、鋼の3人は談笑をしていた。話題は当然、それぞれの部活動やこれまでのことである。ちなみに英美は狩猟部、鋼はマーシャル・マジック・アーツ部に入部していた。とは言っても、話題は当然蓮司のこととなる。なぜなら…
「あ！〝恐怖の帝王〟の蓮司君！」
「よう蓮司！活躍したんだってな」
「こんにちは龍童君。色々大変だったみたいですね…」
　そこへ達也のクラスメートである、エリカ、レオ、美月の3人も合流する形になった。この3人とは達也を通じて交流が続いており、3人も蓮司を通じて、英美、鋼との交流が出来ていた。
「ヤッホー、エリカ、美月、レオ君！」
「やあ3人とも」
　ここに、一科生と二科生の交流が出来ている。他の連中はなぜこんな簡単なこともできないのかと、少し今の話題とずれたことを考え始めた蓮司だった。
「ようお前ら、しばらくだな。レオは変わらずからかわれてるか、それともしごかれてるか？恐妻家は大変だなぁ、ほどほどにしてやれよエリカ。美月って姑が倒れちまうぞ」
「開口一番それか!?」
「誰がこんな奴の！」
「龍童君には私たちがそう見えてるんですか…」
　そんな冗談も交えながら話が弾む中で、エリカの言ったある言葉で話題は新歓に戻った。
　この新歓の間で話題になったことは大きく2つある。

1つは二科生で初の風紀委員である達也のことだ。初日に剣術部の桐原を取り押さえた後、襲い掛かる剣術部員を誰一人傷つけることなく制圧したことを知らないものはいない。

だがその内容は一科生にとっては面白くない。能力で勝る一科生が、劣等生たる二科生に取り締まられるなど屈辱だ、ありえない、ということだ。

結果、新歓の間に達也は何度も騒動に巻き込まれては、その間に魔法攻撃を受ける、ということが頻繁になった。部活動同士で達也の近くで敢えて問題を起こし、その隙に背後から達也を狙う、という何とも幼稚なものだ。だが達也は…

「今や達也も有名人なんだろ？魔法を使わず、並み居る魔法競技者を連覇した謎の1年生ってな」

「一説によると、魔法否定派に送り込まれた刺客ってのもあるみたいよね」

「何はともあれ、初日以降怪我人が出なくてよかったです」

「へえ、司波君すごいね！流石司波深雪さんのお兄さん！」

そう、初日こそ桐原をケガさせてしまった達也だったが、以降の騒動で怪我人は一切出していない。内容を鑑みれば誰かが怪我をしてもおかしくないが、それを0人で抑えたのは流石と言える。しかも魔法を使用せずに行ったというのだから驚きである。

だがここでもう1つの大きな話題に移る。それは蓮司のことだった。

「まあでも話題の大きさでいったら、うちの蓮司君も負けてないよ！」

「〝うちの〟ってなんだ…それに違反者0人だったんだから別にいいだろうに…」

「そのやり方が奇抜すぎるから話題になったのよ、〝恐怖の帝王〟さん？」

エリカがニヤつきながら蓮司に答える。

初日、ほのかと雫と別れてから、さすがにもう一度屋上に戻るのは面倒だったため、会場で直接見回ることとした。そうなれば当然、トラブルに遭遇するものである。

1人の1年生が上級生たちに囲まれ、その上級生たちで喧嘩を始めたのだ。
ここで二つほど質問を載せる。
①普通の風紀委員ならどうするか？
答えとしては、自分が風紀委員であることを告げ、両者を取り押さえにかかる。魔法の不適切使用者は当然逮捕となる。
ならばここで2つ目の質問を出そう。
②蓮司ならどうするか？
答えはこちらも単純なものだった。
喧嘩を始めた上級生たちのもとへ向かった蓮司。まず最初にしたことは…
「おい」
濃密な殺気を放って周囲を静かにさせた。そして当事者が固まったところで…
「勧誘はもっと安全に行え。そんで仲良く話し合え」
―タイガクニナリタイノカ？―
そう告げられ、上級生たちは…
「す、すまなかった…熱くなりすぎたようだ…」
「いやいやこちらこそ…そちらの話も聞かずに申し訳ない…」
「はははははは…」
そう言って、顔を青ざめさせながら握手を交わし、喧嘩を止めた。
『……』
周囲も唖然である。こんな止め方は見たことがない。
「よし、鎮圧完了。平和的に片付いたから怪我人および違反者もなし。当然退学者もなし」
そんな呑気なことを言って踵を返す蓮司。すると振り向きざまに
「そうだあんたら…」
―コレカラモナカヨクナー
もう一度殺気を放ち、念押しをした。
『は、はい!!!もちろんです!!!』
「よし、そんじゃーな」

こうして初日は、これ以降蓮司の担当区域では問題は起きなかった。
先程の②の答えはこうだ。
殺気で黙らせ、仲良くさせる。

その後も似たようなことがある度に殺気で黙らせ、その場を鎮圧するということを繰り返していった。当然、怪我人、違反者、逮捕者は0人。直接的には何もせずその場を制圧していく。その堂々たる姿はまさに王。圧倒的な強者の雰囲気、そしてその成果から異名を付けられた。
〝恐怖の帝王〟、〝静かなる暴君〟と…

数日後、蓮司は一人帰路に着いていた。本日は非番であり、残っても特にすることがなかったためだ。
放課後まで来ると、蓮司の胃袋はどうしても空腹となってしまう。昼にどれだけ食べても、この時間まで過ごすと腹が減るのだ。誰が何と言おうと、呆れられようと、空腹には勝てない。
よって帰りに何か買い食いでもしようかと考えていると、気になるものが視界に入った
「あの3人…英美に雫、ほのか?あいつら、何やってんだ?」
そう、校門近くに英美、雫、ほのかがいた。それもただいるのではなく、身を潜め、まるで尾行しているかのような体勢だった。何かあるのかと思い、その視線の先を確認すると、一人の男子生徒の存在を確認できた。どうやらそいつを尾行しようとしているようだった。はっきり言って、嫌な予感しかしない。
そして男子生徒が移動したのと同時に、3人も行動を始めた。やはり付けようとしているみたいだった。
「…たく、めんどくせーことになりそうだな…」

ほのか達3人は、目の前の男子生徒、司甲を尾行していた。なぜそんなことをしているのか。それは新歓でのある出来事があったからだ。

帰り道、途中で合流した英美とともに帰ろうとしたときのことだった。上級生たちが新入生の入部について揉めたとき、風紀委員の達也がそれを止めるという出来事があった。

しかしその最中。なんと達也に向けて攻撃魔法が放たれた。幸い達也は後ろ向きであったにも関わらず回避したものの、今度は目の前の生徒たちに邪魔されて身動きが取れず、襲撃犯を逃してしまった。

あれは明らかに達也をわざと狙ったものだった。しかも、恐らくだが騒動に関わった生徒の全員がグルだった可能性が高い。

こんなことが続けば、達也がいずれ怪我をしてしまうかもしれない。何より、そうなったときの深雪が怖すぎた。果たして彼女の怒りで何人の犠牲者が出てしまうのか…と。

そこで3人は襲撃の現場を押さえることで、その被害を無くそうとした。

後日、何とか襲撃犯が逃走する場面を写真に収めることに成功したため、それを添付して公益通報窓口へ提出した。しかし予想に反して特に何もなかった。

雫曰く、魔法を使用している場面ではなく、犯人が逃走する場面で、しかも背後の写真だったため、証拠不十分で処理されたのではとのことだった。

自分たちのやったことは無駄だったのかもしれない。そうほのかが落ち込んでいる時だった。目の前に1人の男子生徒が現れた。

生徒の名前は確か司甲。達也を襲撃した人物で、自分たちが写真に収めた剣道部の主将だ。これは証拠を掴むチャンスかもしれない。そう判断し、尾行することにしたのだ。

ある程度尾行した頃。路地裏に入り込んだ司は誰かと連絡を取っ

ていた。
「はい…ええ、誘い込みました。あとはお願いします。」
何やら不穏なことを呟いたかと思うと、突然走り出した。尾行がばれたのかと追いかけようとすると、
ブオオォォォンッ!!というエンジン音が鳴り、突然3台のバイクに囲まれた。全員がヘルメットを着けており、顔は認識できない。
「お前たち、こんなところで何をしている」
冷たくそう言い放った。目の前の不審者たちの雰囲気は、明らかに自分たちをただで帰そうとはしていない。このままでは危ないと判断したほのか達は、魔法を駆使して脱出することを判断した。3人がそれぞれ魔法を発動し、もう少しで脱出できると思った瞬間、
キイイイイイイイィィィンッ!!と突然甲高い音が鳴り、倒れこんでしまった。頭が割れるような痛みが走り、その場から動くことができない。
「よく効くだろう?司様からさずかったアンティナイトによるキャスト・ジャミングがある限り、お前たちは魔法を使えない。思い知ったか、魔法師」
こんなことは完全に予想外だった。
キャスト・ジャミング。それは魔法式が対象物のエイドスに働きかけるのを妨害する無系統魔法の1種で、無意味なサイオン波を大量に散布することで、魔法式がエイドスに働きかけるプロセスを阻害するものである。
アンティナイトというとても希少な鉱石を用いることで発動できるが、アンティナイトは高価すぎて市場に出回ることはない。彼らがなぜそんなものを持っているのか。そんな疑問があったが、今はそんなことはどうでもいい。
非魔法師といえど、目の前の人物はキャスト・ジャミングを使い、自分たちは何もできない。それが現実だった。
「始末するか?」
「ああ、手筈通りだ」
そう話し、その襲撃者たちはサバイバルナイフを持ち出す。

「この世界に魔法師は必要ない!!」
そう言い放ち、一番襲撃者の近くにいたほのかへ、大きくナイフを振りかぶる。
何もできないほのかは、徐々に間近に迫る死を感じていた。
―もう駄目なのかな、こんなところで死んじゃうのかなー
―お願い、誰か…―
―…誰か助けて!!―
届くはずのない願いを、ほのかは強く思い、目をつむった。

その時だった。

ゴウ!!と激しい音が鳴ると同時に、
「…へ、な?あ、ぎゃあああああああああ!!」
そんな叫び声が聞こえた。同時に頭に与える激しい痛みが消えた。
助かったのか、と感じ、誰かが助けてくれたのか、と思い、ゆっくり目を開けた。

そこにはよく知る人物がいた。

初めて会ったときはとても怖かった。殺されるかも、と思った。でもその後に話す機会があり、実際にはとてもいい人だと知った。少し抜けているような感じも親しみを覚えた。
一度助けてもらった。あの時も今ほどではないが、誰かに助けてほしいと思い、そしてその人は助けてくれた。ちょっと呆れた表情を浮かべながらも笑って応えてくれた。

その人が今、目の前にいる。

「悪いなおっさんよ。こいつら、うちの学校の生徒で、俺の知り合いなんだよ。手出し無用で頼む」
背が高く、気だるげな雰囲気でいることの多い彼が。

とても食いしん坊で、食べ物のことになると目がない彼が。
自分たちの知らない魔法を何でもないことのように使い、現在第一高校で〝恐怖の帝王〟と呼ばれる彼が。そこには確かにいた。その瞬間、視界が潤んだ。

「ようお前ら。この間ぶりだな、相変わらず仲がいいようだな」
「蓮司さんっ・・・ !!」

前に助けてくれた時と同じようなことを言い放ち、背中越しに呆れ顔を見せる龍童蓮司がいた。

1―14　心のままに

校門前でほのか達3人をみかけた蓮司は、その行動の怪しさからその3人の後を追うことにした。そうしてしばらく経った頃、3人が追っていた男子生徒が急に走り出したかと思うと、バイクに乗った集団に取り囲まれていた。しかもその者たちはキャスト・ジャミングを使い始めた。

（なるほど、あいつらがそうなのか…）

その時、蓮司は襲撃者たちに魔法を使用する準備をしながら、入学二日目の校門前で騒動があった日の夜のことを思い出した。

『そうそう、君に伝えなければならないことがいくつかあるんだ』

「…なんだよ」

『君の学校、浸食されてるんだよね』

「…どこにだ」

蓮司は視線を鋭くした。こういう話の切り出し方をするときは、大抵〝裏〟の話の時だった。蓮司は意識を切り替えた。

『組織名は〈ブランシュ〉。反魔法政治結社で、社会的差別の撤廃、真の平等を謳いながら、その実態は立派なテロ組織さ』

「反魔法だあ？そんなもんになんで魔法科高校の生徒が賛同する？寝ぼけてんのか？」

蓮司は本気で意味不明だった。魔法を学ぶ身でありながら、魔法を否定する。何がしたいのか本気で理解できなかった。

『言っただろ？奴らが提唱しているのは〝真の平等〟さ。そんな夢のような話があれば、君の学校にいる二科生という弱者たちは食いつかずにはいられない。所詮は弱い人間なのさ』

「……」

蓮司は黙っていたが、静かに怒っていた。彼は〝平等〟という言葉が心底嫌いだった。

『で、そのブランシュなんだけど、最近になって急速に君の学校の生徒を急速に取り込んでいる。その速度を考えるに、近々何かを仕掛けるかもしれない』
「……」
『加えて奴らは対魔法師用に、アンティナイトも仕入れているようでね。キャスト・ジャミングには気を付けるんだよ。意味ないかもだけどね』
そこまで話し、今度は蓮司へ忠告を入れる。
『くれぐれも勝手に始末しないでくれよ。君が嫌いなタイプの〝人間〟どもに違いはないけれど、下手に手を出せばこちらも動きにくくなる。我慢は大事でちゅよ、蓮司きゅん？』
「最後の最後におちょくるんじゃねえよ中古女！」

そこまで思い出しながら、近くにあるごみ箱を蹴り飛ばした。その直前に、硬化魔法をゴミ箱にかけ、さらに加速魔法を蹴ると同時にかけた。結果、鉄にも匹敵する強度を誇るゴミ箱が音速に近い速度で吹っ飛んでいった。そんなものが当たればどうなるか…答えは目の前の現象だった。
ナイフを振りかぶった襲撃者の腕に当たり、その襲撃者の腕を吹き飛ばした。一瞬何が起きたか理解できなかったようだが、遅れてやってきた痛みと視界に自身の腕がないことから状況を理解し、叫び声をあげた。
「…へ、な？あ、ぎゃあああああああああ!!!」
「悪いなおっさんよ。こいつら、うちの学校の生徒で、俺の知り合いなんだよ。手出し無用で頼む」
襲撃者の一人が叫び声をあげたところで、その者を回し蹴りの要領で蹴り飛ばし、壁に激突させ気絶させる。着地したところで後ろを確認し、声をかけた。
「ようお前ら。この間ぶりだな、相変わらず仲がいいようだな」
「蓮司さん!!!」

ほのかがそう叫んだ。遅れて、雫と英美も蓮司を確認する。
「れ、蓮司さん…？」
「蓮司君、何でここに…？」
「お前らの挙動が怪しかったからな。結果的に正解だった…まあ、あれだな。巡り合わせってやつだ」
そんな呑気なことを言いながら襲撃者の方へ振り向く。
「な、なんだこいつ!?」
「糞！早くキャスト・ジャミングの出力を上げろ！」
襲撃者たちはそう言い放ち、さらに強力なキャスト・ジャミングをかけた。当然近くにいたほのか達は強烈な痛みを覚え、倒れこむが…
「…で？他にやることねえのか？」
「な、効いていないだと!?ばかな、一体なぜ!?」
「たかが〝人間〟が放った妨害擬きが俺に聞くわけねえだろ」
そう言いながら、両手にサイオンを集め、目の前の人物に正拳突きを食らわせる。内臓破裂を起こすほどの強い衝撃に、吐血しながら倒れこむ。
「ひっ!?」
「後はてめえだ」
そう言いながら、最後の襲撃者の背後に瞬時に回り込み、両腕を掴む。そして…
「ま、待て、待ってくれ！」
「なんだ、腕が大事なのか？」
そこで襲撃者は蓮司の姿を視界に収め、愕然とした。
蓮司は嗤っていた。これ以上ないほどに。それを見た瞬間、自分の命運を悟った。
「まあ、命までは取らねえよ…腕はもらうがな、文字通り」
そう言って、肩関節をありえない方向に思い切りひねり回し、腕をもいだ。
「っっっっ!!??」
ありえないほどの痛みに白目を？いて気絶した。そしてそいつを蹴り飛ばした。

こうして僅かな時間で鎮圧は完了した。その後、蓮司は美琴に連絡を入れた後、3人を担ぎその場を離れた。

「…ん」
「…ここ、は…」
「ん～～～、まだ頭痛い気が…」
「よう、起きたかよ」
キャスト・ジャミングの影響で気絶していた3人を少し離れたところに移動させた後、3人は目を少しして目を覚ました。代表して雫が話しかける。
「…どうなったの？」
「敵の鎮圧は完了した。すでに通報済みだ、後は大人に任せるさ」
「そっか…」
そこまで話し、雫と英美がそろって頭を下げた。
「ありがとう蓮司さん。おかげで助かった」
「まさかあんな目に合うとはね～～、ホントにありがと」
「おう、まあ予想外なこともあったとはいえ、無闇な尾行は避けた方がいいな」
そこまで話し、ほのかの方を見た。その顔は少し青ざめており、今になって恐怖が蘇ってきたようだ。
「あ、その…蓮司さん、わ、わたし…」
どうも感情が整理できていないようだった。英美と雫もどう声を掛けたらよいか迷っているようだった。
「……」
蓮司はただ黙って次のほのかの言葉を待ったが、いつまで経っても次の言葉が出てこない。それも当然と言えた。魔法師とはいえほぼ一般人に近いほのかは、対人戦闘など経験がないはずだ。しかも先ほど、3人の中で真っ先に命を狙われたのだ。怖かったに決まっている。
（あ～～～、どうするか…）

蓮司はこういうときどう声をかけた良いか、そんな知識は持ち合わせてはいなかった。なんとか記憶を遡っていくと、不意に美琴の言葉を思い出した。
『君は自分には〝心〟がないと本気で思っているのかい？そんなことはないさ、君にだって〝心〟がちゃんとある。』
『つらい時にはつらいと言えばいいし、泣きたくなったら泣けばいいじゃないか。時には〝心〟に従ってみるのもいいものだよ』
〝心〟に従い感情を表す。かつてはバカにしていたことだが、今はそれが必要かもしれない。ほのかはきっと、心を整理できていないのだ。
そう判断した蓮司は、ほのかに目線を合わせ…そっと頭をなでた。
「……」
突然の蓮司の行動に驚くほのか。今までの彼の言動を思えば皮肉や静かな叱責があるものと思っていただけに、うまく反応が出来なかった。
「れ、蓮司さん…？」
「…怖かっただろ」
「……っ！」
「怖かったならそう言えばいい。苦しかったならそう言えばいい。それを感じることは何も悪いことじゃねえ」
「……」
「だから思ったことを言ってみろ。1つ1つ、ゆっくりと」
「……」
そう、まっすぐな瞳で言われ、心の中が1つ1つ整理されていく。
そうして少しずつ言葉が紡がれる
「…怖かった…」
「ああ」
「すごく頭が痛かった」
「ああ」
「…ナイフで刺されるかと思った」
「ああ」

「…本当に…本当に…死ぬかと思った!!」
「そうだな」
「怖かった！死にたくなかった！」
「…ああ」
「ごめんなさい、ご、ごめんなさい!!」
「…それはもういい」
「で、でも…嬉しかった…助かって、助けてくれて、蓮司さんが助けてくれて！」
「…そうか」
「ありがとう…ありがとうございます…！」
「おう、どういたしまして」
そこまで口にし、次第に涙が溢れ、感情のままに流れ始めた
「う…うぅ、ひぐ、うえええん！うあああぁぁあああ!!」
ついには大声をあげて泣き出すほのか。蓮司は雫に視線を送り、その意図を察した雫はほのかの傍に寄り、そっと抱きしめる。
「…なんだ、そんな男前なこともできるんだ、蓮司君」
「…うるせえよ」
それからしばらくの間、ほのかの泣き声が続いていた。

「ごめんなさい…」
「…まあ、思ったことを言えって言ったのは俺だしな、気にするな」
泣き止んだほのかは、今度は顔を真っ赤にしてすごく恥ずかしそうだった。同年代の男子に慰められたのだ。年頃の女子たるもの、男子と至近距離でいたこと、その男子の目の前で恥も外聞もなく号泣したとなれば、恥ずかしさが込み上げてもおかしくはなかった。
「それに、危険な目にあったとはいえ、おかげで1人黒判定の奴もいたからな…」
「え？」
「いや、なんでもねえよ」
独り言は誤魔化し、蓮司は3人に改めて話しかけた。

「それよりお前らも今日は早く帰れ。キャスト・ジャミングなんて真正面から食らったんだ、疲れがまだあんだろ」
「うん、ぶっちゃけまだちょっとダルい感じはあるなぁ」
「ゆっくり休め、そんでまた明日な」
　蓮司はそう言って3人を駅まで送った。あのまま放置することは危険と判断した蓮司は、駅まで送ることにしたのだ。
「それじゃあね、蓮司君！」
「またね、蓮司さん」
「蓮司さん…本当にありがとうございました！」
「おう、じゃあな」
　そう締めくくり、蓮司は3人と別れた。

　蓮司が帰宅した直後、連絡が届く。本当なら出たくはないが、今はそんなことを言っている場合ではない。蓮司は連絡に素直に応じた。
『やあやあ蓮司君。ヒーローになった気分はどうだい？しかもちゃっかり女体を堪能するなんて、君もなかなか隅に置けないねえ』
「うるせえ毎回毎回うぜえ入り方するんじゃねえよ」
　連絡主はいつもの如く霊峰美琴。襲撃者を撃退した後に連絡を入れ、頼んだ奴らの回収と情報収集を頼んだ。そのためにわざわざ殺さなかったのだ。
　偉かったなと、蓮司は少しだけ自画自賛していた。
『まあ君が特に意味のない優越感に浸っているのを見るのも飽きたし、すぐに話に入ろうか』
　そう言って話を再開する。
『まず彼女たちがつけていた生徒に関連してだけど、司甲には義理の兄の司一がいるんだけどさ、これがブランシュ日本支部の表裏のリーダーみたいだね』
「身内にんなもん抱えるとかまじかよ…」
『司はその兄に洗脳されているみたいだね。魔法科高校に入学したのもその兄の指示さ。そして徐々に浸食していった』
「数年越しの計画だったわけか…で？」

『近々具体的に行動を起こすらしい。狙いは魔法理論の情報さ。それを売ろうとしているんだよ』
「…思った以上に下らねえな。そのブランシュも、それに汚染されたやつらも…。俺がこの世で最も嫌いなタイプの人間だ」
蓮司に殺気が現れ始める。それを美琴は制止した。
『だから殺気を押さえ給えよ君…。そんなものより性欲に貢いだ方が遥かに生産的だ』
彼女からまたいつものようなセクハラ発言が出るが、今はそれがほんの僅かにありがたかった。
『とにかく気を付けたまえよ。それとあまり血をまき散らさないでくれ、掃除が面倒だ。それじゃあね』
そう最後に締めくくり、通信が終わった。
蓮司はその場から離れ、窓から空を眺めた。
「〝平等〟、〝差別の撤廃〟…いつだって阿保がいるもんだ…」

1―15　有志同盟

『全校生徒の皆さん!!』
「わひゃあ！何々!?」
「うるせえな誰だよ騒いでんの喉元噛みちぎるぞこの野郎」
「こんな時でも物騒だね、君は…」
　突然校内放送で大音量の声が響いた。

『…失礼しました。改めて、全校生徒の皆さん、僕たちは学内の差別撤廃を目指す有志同盟です』

「…ああ?」
　突然校内放送で流れてきた内容。要約すると、「自分達二科生は魔法力が低く、実技試験の結果が悪いというだけで不当な差別を受けているから、学校はこれを解消すべき」というものだ。しかしその内容は、蓮司がこの世でも特に嫌っている内容だった。
『僕たちは生徒会と部活連に対し、対等な立場における交渉を要求します！僕たちは魔法師を目指して学ぶものです。しかし同時に僕たちは高校生です。魔法だけが僕たちの全てではありません！この要求が受け入れられるまで…』
　それ以上蓮司は聞くつもりはなかった。それと同時に風紀委員に召集がかかったため、移動することにした。
　その時の蓮司は、酷く冷めた瞳をしていた。

「多少強引でも、短時間の解決を図るべきだ」
「しかし、彼らを暴発させないように慎重に対応すべきです」
「どうするつもり、十文字君?」
「俺は彼らの交渉に応じてもいいと考えている」
「では、この場はこのまま待機すべきと?」

「それについては判断しかねる。不法行為を放置すべきではないが、学内の施設を破壊してまで性急な解決を要するほど犯罪性があるとは思えない」
　達也たちが駆けつけたとき、上級生たちは対策を話し合っていた。どうやら短期の決着と慎重な対応のどちらをすべきか、という点で話が進んでいないようだった。
　ここで、達也には1つ手段があった。それは有志同盟にいるであろう2年生の壬生紗耶香という生徒に連絡を取ることであった。
　壬生紗耶香は二科生の2年生であり、剣道部に所属している。何度か会話をしたことがあり、彼女もまた学内の差別撤廃を目指していることは彼女自身の口から確認していた。差別撤廃に協力してほしいと言われたことがあったが、達也はそもそもそんなものに興味がなかったため断っていた。
　その時に気が変わったら連絡が欲しいと、彼女のプライベートナンバーを聞いていた。なので彼女と連絡を取ることで事態の進展を図った方がいいだろうと考えていた。
　そうして連絡しようとしたとき、この場に一番遅れてやってくるものがいた。その者に真っ先に気づいた摩利だった。彼女は事態が進まないことに苛立ちを感じ始めており、その者を呼ぶときには少し刺々しくなった。
「遅いぞ！呼んだらすぐ来ないか！一体何を…」
　そこまで言って口を噤んだ。遅れてその者に気づいた生徒たちがそちらを見た瞬間、全員が残らず委縮した。表情を変えなかったのは、既にそれを経験しある程度の耐性があった達也と、もとよりそういった感情を表には出さない十文字だ。
　遅れてやってきたのは蓮司だ。それも、強い怒気をまとって現れた。表情は無に等しく、しかしそこからあふれる怒気がその存在感を大きくしていた。
　皆がすぐに動けない中、比較的影響の少ない達也が代表して話しかけた。
「…蓮司、遅かったな。それと…何かあったのか？」

「…別に何かあったわけじゃねえ。…連中の主張が俺を必要以上に刺激しているだけだ…」
そう言いながら全員の前で止まる蓮司。
「で?あんたらここで何やってんだよ。早く鎮圧すればいいだろう」
蓮司がそう疑問を投げかけたため、鈴音と十文字が代表して現在の状況を説明した。しかし…
「阿保か、あんたら」
蓮司はそれを一蹴した。とても先輩に対して取る態度ではなかったが、それでも蓮司は発言を続けた。
「連中の主張と、連中が今やっていることの整合性はない。主張があるなら直接生徒会室や部活連に行けばいい。なのに何ちんたらしてんだよ」
「で、ですが、それで彼らを刺激して更なる暴走を引き起こしてはなんの意味もありません。ここは…」
「要はこの扉を突破して連中を静かにさせりゃいいんだろ。どけ」
そう言って先輩を押しのけ、扉の前に立つ蓮司。達也は嫌な予感しかしなかった。
すると、正拳突きの構えを取る蓮司。同時に引いた右手にサイオンを集めた。
「ち、ちょっと蓮司君!?待ち」
真由美がとっさに声をかけるがもう遅い。蓮司は拳を当て扉を破壊した。そして中に静かに入っていった。
放送室の中には数名の生徒がいた。紋はなく、全員が二科生である。その中には壬生の姿もあった。
「な、ど、どうやって」
「黙れ」
静かに蓮司は言い放った。そのあまりの殺意に、有志同盟の者たちは動けなくなる。
「てめえらの下らねえ話は生徒会長と部活連会頭が聞いてやるとよ。

さっき言質も取った。」
　静かにそう告げた。その内容は彼らにとって喜ばしいものだったはずだ。学内の組織のトップが交渉に応じると言っているのだ。十分な成果となる。
　にもかかわらず、彼らは生きた心地がしなかった。それは、その交渉の前に、目の前の存在があまりにも殺意を持っていたからだ。
「だが、てめえらの話を聞くことと、てめえらの行動を容認することは違う」
「死にたくなかったらそこから動くな。指1本、瞬きも許さねえ」
　またしても静かにそう告げた。ここで1人の生徒は逃げ出そうとした。自分たちの崇高な理念よりも、目の前の存在からどうしても離れたかったが故の、反射的なものだった。
　当然、忠告したのにも関わらず動いたものには…
「動くなって言っただろ」
　制裁が下る。蓮司は瞬時にその生徒の背後に移動し、後頭部を掴むと、そのまま顔面を地面にたたきつけた。轟音がなったのち、その生徒の顔が上げられた。
「ひっ!?」
　それは誰の叫びだったのか、定かではない。だがそんな声を上げざるを得なかっただろう。叩きつけられた生徒の顔面は見るも無残なものだった。鼻は折れ、前歯はほとんど抜けかけている。目元の形状もおかしくなっており、恐らく顔面を骨折していた。もはやその生徒はうめき声を上げることしかできない。だが…
「喋んなってのも分かんねえのか」
　そのうめき声ですら蓮司の前では許されなかった。それを聞いた瞬間、蓮司はもう一度顔面を叩きつけようとした。
「そこまでだ、蓮司」
　それを達也が止めた。かなりの力が入っていたらしく、達也も手加減は出来なかったが、先ほどの事態を繰り返すことはなんとか避けることができた。
「…達也」

「蓮司。俺は今、お前が何に苛立ちを感じているかはわからない。会ってからまだ1か月も経っていないんだから当然だろうな。だから、何がお前の心を揺さぶったのかは検討もつかない」
「…」
「だがそれ以上は全てを台無しにする。さっきお前が言ったように、会長も会頭も交渉には応じるんだ。ここでお前が無闇に暴れれば、先輩たちの思いも全て無駄になる」
努めて冷静に、そして諭すように話しかける達也。
「手を放せ、蓮司。今の彼らに抵抗の意思はない。暴れたいなら俺が相手をする」
「…」
徐々に、しかし確実に力を抜いていく蓮司。達也も、蓮司を信じて手を離した。そして蓮司はＣＡＤを操作し、怪我を負わせた男子生徒に治癒魔法をかける。数十秒後には怪我をする前の顔に戻っていた。
「…これで満足か」
「…ああ、十分だ」
蓮司と達也は、言葉少なく、やり取りを終えた。
その後、放送室を占拠した生徒たちは一度取り押さえられた。そして、生徒会と部活連との対話の場を設け、翌日に有志同盟と生徒会で討論会を開くこととなった。
なお、この一件により、蓮司の危険性を知った教員たちから、彼を停学または退学させるべきという話が出たが、真由美、摩利、十文字の三巨頭たちが交渉したことにより、討論会の警備をしっかり行わせることを条件に、蓮司の処罰は反省文の提出と討論会後に1週間の奉仕活動を行うこととした。

その日の夜。達也と深雪は師匠である九重八雲の寺を訪れていた。目的はブランシュに関する情報を取得するためである。
「…とまあ、大体こんなところかな」
「ありがとうございます、師匠」

「いいのいいの。僕が好きでやってるんだから」
粗方必要な情報を手に入れ、ブランシュの話題は終了した。と、ここで八雲が新しい話題を振る。
「そうそう達也君。君、中々ユニークなお友達ができたみたいだね」
「…」
達也は敢えて黙っていたが、八雲は構わず話を続けた。
「龍童蓮司君、だったかな。彼、僕から見てもかなり面白いね」
「…先生は、龍童君のことをご存じなんですか？」
黙っている達也に代わり、深雪が質問した。すると八雲は、蓮司について話し始める。だがその内容は予想の斜め上を行くものだった。
「龍童蓮司君、年齢１５歳。生まれてすぐに両親とは死別している。…そして今年、魔法科高校に入学した。以上」
「え…？」
「なんですって…？」
今語ったのは蓮司のパーソナルデータだ。しかし分かったことはたったそれだけだったということが、ありえない話だった。情報収集のエキスパートたる九重八雲をもってしてそれだけしか分からない。それはつまり…
「ないんだよ、彼のパーソナルデータが。生まれてから最近になるまでの個人情報は全て抹消されている。まるで、国が彼の存在を消しているような雰囲気だ。偽のパーソナルデータすら用意しないのだから、その徹底ぶりは恐ろしさすら感じてしまうよ。」
こんなことがあり得るのだろうか。蓮司は一体何者なのか、どういう存在なのか…全くの謎であった。
ここで達也は１つの予測を立てる。
「師匠。蓮司は調整体だという可能性はありませんか？」
調整体魔法師。それは遺伝子操作により生み出された魔法師のことを指す。所謂、魔法実験体とも言える存在だった。
「可能性としてなくはないけど、可能性の域を出ないね。本当に一般人で、１５年間監禁されてた、なんてこともあり得る世の中だからね。でも裏があるのは間違いないだろうね。もしかしたら、本当に極悪人

かもしれない」
　結局は結論が出なかった。八雲の言葉により、ますます蓮司という存在が分からなくなってしまった。しかし…
「…師匠。蓮司は俺の友達です。それは間違いありません。確かに沸点が低く、何をきっかけに怒るか分からないやつですが、それでも俺の友です。俺は、あいつが悪人ではないと信じます。」
　達也は真っすぐにそう言い切った。これには八雲も少し驚く。達也から〝友達〟などという言葉が出てくるとは思わなかったのだ。
「はい、龍童君はそんな人ではありません」
　そしてここにもう1つ、凛とした声が響き渡った。それは深雪のものだった。
「彼は確かに謎が多いかもしれません。今までに見たことのない戦闘手段や卓越した魔法技術、激怒した際のあの殺意・・・ 少なくとも普通の高校生ではないのでしょう。ですが…」
　そこで一度深雪は区切り、そしてもう一度強い口調で言い放った。
「それでも、ここまで龍童君のことを見てきました。気だるげで、どこか抜けていて、食いしん坊で、マイペースで、…でも確かな信念があり、己の存在に誇りを持っている。そんな彼を見てきました。それはお兄様も同じです」
　深雪にとって、蓮司は達也の初めての理解者という認識があった。同時に自身にとっては超えるべき壁でもあった。だからこそ、事実がどうあれ、信じることにしたのだ。
「…君たちがそこまで言うとはね。個人的にかなり彼に興味がわいてきたよ。ただこれだけは言わせてほしいな」
　まいった、と言わんばかりに八雲は苦笑しながら告げた。これ以上は余計なことは言うつもりはなかった。だが、1つだけ伝えておきたいことがあった。
「彼は良くも悪くも〝魔法師〟だ」
「？どういう意味ですか？」
「そのままさ。言ってしまえば彼の思考は魔法師主義のようなものさ。〝人間〟と〝魔法師〟は異なる存在だ、という意識が強いようだ

ね」
「…」
「それだけは気を付けなさい」
そこで、八雲との会話は終了となった。

1―16　襲撃

有志同盟所属の生徒たちが放送室を占拠するという騒動のあった翌日。全校生徒の半数が講堂に集まっていた。それは本日行われる、生徒会と有志同盟の討論会に参加するためだ。思った以上に暇人が多かったことに呆れる蓮司だった。

「出来レースにも程があんだろ。無駄以外の何でもないじゃねえか…」

「だが開催したことにも意義がある。それに、真由美は本気だ。本気でこの差別の問題を解決しようと真剣になっている」

「上の立場の人間はご苦労なこった。ところで…」

そこまで言って蓮司は周囲を見る。蓮司のすぐ傍には、会話の相手だった摩利をはじめ、達也、深雪、服部、鈴音、あずさ、十文字と、実力者が集まっていた。

「何で俺を取り囲むようにいるんすか。暑苦しい」

「昨日の暴走を覚えていてそんなことを言っているのか君は!?確かに風紀委員に勧誘したときにフォローをするとは言った!だが昨日のようなことを早々起こさせるわけにもいかんだろう!」

「あれは奴らの主張が気にくわなかっただけですよ…つーか、だったらそもそもここに俺を呼ばなきゃいいだろうに…」

そこまで話すと、今度は十文字が話し始める。

「いや、ここに生徒が集中する以上、何かあった時にすぐ動けるようにしておきたい。指示系統を確立するためにも、お前には今はここにいてもらう」

「まるで何が起きるか分かってるみたいっすねえ…」

そうぼやくと、十文字はそれ以上は喋らず、摩利は気まずそうに目を逸らした。

(ブランシュのことなら知ってんだけどな。…あと、奴らの目的を考えたら、ここにいるべきじゃねえし)

だがそれ以上は野暮と考え、何も言わなかった。そうしている間に討論会はスタートした。

だが結果は初めから分かっていた。有志同盟の主張は過程を無視して生徒会を一方的に悪者のとするもの。それに対して真由美が代表の生徒会の説明は現状を正しく述べたものである。討論会という名の完全な真由美の独壇場だった。

「帰っていいすか」

「駄目だ」

蓮司がため息をついていると、真由美が最後の締めに入った。それは、一科生と二科生の双方に潜在する差別意識の撤廃を目標としていること。そのためにまず、生徒会役員の選出についての制限の撤廃を公約とすることを挙げた。真由美が話を締め終わると、今度は大きな拍手が講堂に響き渡った。こうして討論会は終了となった。

(そろそろか…)

すると突然、行動に轟音が鳴り響き、武装集団が侵入してきた。しかしそこは予測していた蓮司だ。轟音の瞬間に魔法を発動させ、侵入してきた襲撃者に何もさせずに撃退していた。

もちろん、さんざん真由美や摩利にこれまで注意をされてきていたのでちゃんと手加減し、骨折程度に押さえている。とはいえ、あらぬ方向に折れ曲がっているため、見た目はかなりグロテスクだったが。

「手加減して、流血沙汰も起こさなかった。十分優しいだろ」

『…』

蓮司の周囲にいた全員が何とも言えない表情でいる中、蓮司は平然とそう言い放った。

そして、それぞれが事態の鎮圧化を図るため、行動を開始した。その途中で達也たちは、カウンセラーの小野遥から情報を聞き、図書館へ向かった。蓮司は直接襲撃されている広場へ向かった。

時刻は襲撃の少し前に遡る。達也のクラスメートである、レオ、エリカ、そして美月は3人で集まっており、もうすぐ帰ろうとしたところだった。

「しかしよう、討論会ってなんか意味あんのか?差別の撤廃ってい

けど、こういうのって大概ろくなことにならねえんだが」
「まああの生徒会長なら何とかするでしょ。ていうか、どう考えてもあの生徒会長が負けるとは思えないし」
「確かに、会長さんならどうにかできそうですよね」
３人はそれぞれ思い思いのことを話していた。しかしその時、美月はまた別のことを考えていた。
それは数日前に、剣道部の司甲という生徒にとあるサークルに誘われたことであった。内容としては、自身も抱える『眼』について悩む者たちが集まる者であり、そのサークルの活動で随分改善されたから一緒にどうか、というものだった。
ここで言う『眼』とは、正式名称『霊子放射光過敏症』と呼ばれる症状を持つ者の眼のことである。
『霊子放射光過敏症』。それは意識して霊子放射光を見えないようにすることができない知覚制御不完全症であり、「見え過ぎ病」とも俗称される。要するに、サイオンやプシオンといった情報体が見えすぎるのだ。今の時代で美月のように眼鏡をかける場合は、お洒落のための伊達眼鏡を除き、多くがこの症状を抑えるためのものである。
特に美月はその症状が際立って強く、眼鏡もその分強固なものになっている。その力ゆえに、美月は幼いころから苦労をしてきた記憶がある。
そんな中でそのようなサークルに誘われた。途中で達也が来て勧誘は中断されたが、もしあのまま誰も現れなかったらどうなっていただろうと何度も思う。意志の弱い自分は、きっと流されるままにそんな怪しげなサークルに入っていたかもしれない。
（そういう時、皆ならどうするだろう…）
美月の仲のいい友達は、気が強いものばかりだ。唯一気弱に思えるのはＡ組のほのかのみで、他の友達たちはそんなもの撥ね退けてしまうだろう。
（あの人ならどうするかな？）
ここで美月は、蓮司ならどうするだろうと考えた。
龍童蓮司。美月の友達の中でも、一際目立つ存在。初対面の時の印

象はとても強いが、その後の抜けた感じや、食欲旺盛な姿を思い出すと、少し笑いが込み上げてきた。まるで大きな子供だからだ。
蓮司ならきっと他の皆と同様に、そんな勧誘を撥ね退けるだろう。いや、もしかしたら、勧誘してきた相手を捻り潰すかもしれない。「邪魔だ」と一言呟き、相手をきっと撃退するだろう。
（…うん、なんか考えるだけ無駄かも…）
そう美月は結論付けた。結果的に自分はそれを断ってここにいる。何より、長年苦しんだこの『眼』のことを、そんな簡単に解決されても困った。
「美月――！どうしたの？早く行こー」
考えに耽っていると、不意にエリカに呼ばれた。どうやら考え事をしながら立ち止まっていたらしい。エリカとレオは少し先を歩いていた。
「うん、今行くね」
そう言って二人のもとへ進もうとしたとき。
突然講堂の方から轟音が鳴り響いた。
「きゃああっ！」
「な、なに!?」
「おい、見ろ！校門の方！」
爆発音が鳴り響いたと同時に、校門から突然武装集団が侵入してきた。
「侵入者!?」
「くそ、何なんだよ!?」
「落ち着きなさい！あんたは美月の傍にいてあげなさい！あたしはあんたの分も含めてＣＡＤ持ってくるから！」
周りが混乱する中、エリカは真っ先に行動を開始していた。いくら自分に武術の心得があるからとはいえ、ＣＡＤもないこの状況ではあまりに危険である。
少しすると、風紀委員の応戦も始まった。恐らく、最初から警戒していたのであろう。慌てふためく様子は見受けられなかった。
エリカが戻るまでの間、レオは美月を守ることに専念していた。

しかしそこへ、武装集団の1人が突撃してきた。レオが下手に動けば美月が危険にさらされる。しかし何もしなければ2人とも危ない。
どうする、とレオが少し考えた時だった。
「へえ、そんな男らしいこともできんだな、お前。ただのいびられ役じゃなかったってか」
そんな呑気な声が聞こえたかと思うと、目の前の襲撃者が吹き飛ばされていた。声のした方へ顔を向け、思わずレオは笑みが込み上げる。美月も同様に安心の笑顔を浮かべた。
「おせーぞ、帝王さんよ！」
「龍童君！」
「誰1人殺すなってうちの委員長に言われてたからな。文句があるならそっちに頼む」
相変わらず呑気な様子の蓮司だったが、その視線はしっかり敵を捕らえていた。
そして
「おい、生徒ども！今すぐこっちに後退しろ！巻き添え食って死んでも知らねーぞ！」
そう大声を上げると、その場の風紀委員も含めて、全員が蓮司の方へ向かってきた。突然の命令だったが、あの〝恐怖の帝王〟が発したものだ。しかも今は緊急事態。下手に逆らえば碌な目に合わないことは、多くの生徒が新歓の際に知っていた。
全員の避難は完了していない。それでも、後退してくれさえすればそれで十分だった。
蓮司が自身のＣＡＤを操作すると、一瞬で魔法陣が数多に形成され、侵入者たちに向かって行った。そしてもうすぐ侵入者たちに届こうとしたところで。
放たれた魔法弾が爆発し、その衝撃が侵入者たちを弾き飛ばした。爆発する方向は操作されていたようで、後方の避難中の生徒達には風が凪いだ程度で被害はなかった。
侵入者たちは地面に強く叩きつけられ気絶するか、壁に激突して戦闘不能となっていた。たった1つの魔法で敵は完全に鎮圧された。

その光景に、ほとんどの生徒は唖然とする。
「俺は他の現場に行く。お前らはそこの風紀委員の指示に従って避難しとけ。まあ、やる気満々のやつは遊撃に参加するといい」
そう言い残し、その場から消えた。少ししてエリカが戻り、様子を聞いた際は悔しそうにしていた。そしてレオとエリカは遊撃に参加し、美月は避難指示に従って移動することとした。

その後、レオとエリカは達也と深雪と合流。敵の目的が図書館の魔法資料だと知りすぐさま行動を開始し、侵入していた賊を制圧した。
エリカはその場にいた壬生紗耶香と交戦し、見事撃退した。
一方、襲撃者の侵入を手引きした司甲は、風紀委員の辰巳鋼太郎と沢木碧に取り押さえられ、ブランシュによる襲撃はここに完全に終わりを告げることとなった。

(すごかったな…)
美月は風紀委員の指示に従い避難する中で、先ほどの光景を思い出していた。異名を付けられるほどに有名な人物の魔法を、美月は初めてその『眼』で視たのだ。
(あんなに淀みのないサイオンの流れは初めて。あんなに…綺麗な光は初めて見た…)
美月が見惚れたのは魔法そのものではなく、魔法を使う際の蓮司のサイオンの光だった。どんなにサイオンをうまく扱う人でも、淀みが普通は出てしまう。だが彼にはそれがなかった。何よりも…
(人が魔法を放つときとかに、本当にたまにだったけど、私にはそれがイメージみたいに視えるときがあった。)
(龍童君が魔法を使ったとき…まるで…)
(まるで…龍のようなオーラだった…)
(あれは…何だったんだろう?)
美月の『眼』に映った不思議なイメージ。あれは何だったのか。その答えが出るのは、まだ先の話である。

1―17 〝人間〟と〝魔法師〟

襲撃事件後、保健室にて壬生紗耶香の聴取が行われていた。
その場には一校の三巨頭をはじめ、壬生を直接確保に向かった達也と深雪、そして達也と行動を共にしたレオとエリカ、最後に制圧の中心にいた蓮司が集まっていた。
壬生の動機を要約すると次のようなものだ。
昨年の新歓において、壬生は摩利に対して指導の手ほどきを依頼したことがあった。ちょうどこの頃、剣術部が思い上がりによって騒動を起こしたことで、それを摩利が直接対処した。摩利のその魔法剣技に魅せられた壬生は、摩利に指導を申し込んだ。摩利のその姿は、壬生にとって理想的なものだったこともあるだろう。
しかし摩利はそれをすげなくあしらった。「お前とは、戦うまでもない」と冷たくあしらわれた壬生のショックは大きかった。二科生だから、魔法の才能がないから…と壬生は悲観にくれた。
そんなときに話しかけたのが司甲だった。その頃の剣道部は既に司によってブランシュの思想に犯されていた。そしてそれ以外にも、非魔法系サークルにもその魔の手が伸びており、1年以上の時間をかけて今回の襲撃は計画されたのだ。
この内容に三巨頭、特に摩利はひどく狼狽した。何故なら彼女にはそんなことを言った記憶が全くなかったからだ。摩利もその剣術部の騒動は覚えており、その日の出来事として、壬生に指導を申し込まれたことも当然覚えていたし、なにより摩利は壬生のことを入学する前からよく知っていた。
剣道の中学生大会で全国準優勝を果たした美少女剣道家の壬生紗耶香。〝剣道小町〟と言われたその剣の腕は、摩利をしてかなわないと言わせるほどだった。魔法剣技ならともかく、純粋な剣の腕では敵わないことは一目瞭然だった。だからこそ指導を断ったのだ。
改めて摩利と話をして冷静になった壬生は、徐々に記憶を思い出し、顔を青ざめていた。自分の動機がただの勘違いなど、なんと愚かなものだったのだろうかと、心を絶望が支配し始める。

「…バカみたい…勘違いで勝手に傷ついて…逆恨みして…そんなことで1年も無駄にして…っ！」
ついには涙を流し始める壬生。他の者たちも、どう声をかけるか判断に迷っている様子だった。そんな中、達也は今までの話を統合していた。
強い思い込み、1年も冷めなかった激情、そしてそれに増長した他の生徒たち。敵は洗脳の類を使っている可能性が高い。恐らく、壬生の記憶もそれによって操作されたものだと判断した。
このままでは壬生は絶望で押しつぶされてしまう。そう考え、達也は壬生に声をかけようとした。しかしここで想定外のことが起こった。

「くだらねえ」

そうはっきりと告げる声が聞こえた。全員がそちらに顔を向けた。そこには腕を組んで壁に背中を預けている蓮司の姿があった。
「敵の情報を得られると思ってわざわざここにいたが…聞かされたのがそんな阿保みたいなもんとはな。時間の無駄にもほどがある」
蓮司は視線を合わせず、淡々とそう告げた。その横顔は無表情だった。しかし、腕を組んでいるその手は強く握り占められており、相当力が入っているようだった。
「あんたの今の話、要約してやるよ。強い魔法師に憧れた弱い奴が、相手にされなかったことで癇癪を起して、その後に犯罪者に誘惑されて自分も共犯者となった。ただそれだけ、何の面白みもない、ただの無駄話だ」
「龍童君！」
「蓮司君！やめないか！」
蓮司の話も極端なものだ。そんな話を聞かされては、本人でなくとも気分がいいものではない。事実、深雪と摩利は強い口調で制止にかかった。
「…あなたに何が分かるのよ…」

すると壬生は俯いたまま、しかし強く手を握りしめ、その感情を蓮司にぶつけた。
「あなたみたいな人に何が分かるのよ!?魔法の才能に恵まれて！ありえないような力を簡単に扱えて！上級生だけでなく、たくさんの人の信頼を勝ち得ているあなたに！私の何を理解できるって言うのよ！」
それは壬生の心からの叫びだった。例え摩利とのやり取りが誤解だったとしても、他の一科生から受けた屈辱は確かなものだ。事実、一科生はその驕りから、時に二科生の存在すら否定する言葉をかける者も多かった。
「あなたみたいな強い人に！弱い私たちの心なんて分からないわよ！」
はぁ、はぁ、と息を切らしながら、壬生は全てを出し切った。その剣幕に、他の者達も口を挟むことが出来なかった。
対して思いをぶつけられた蓮司は、それでもどこ吹く風といった様子だった。そして静かに話し始める。
「…先輩。あんたさ、この学校やめなよ」
あくまで静かに、しかしはっきりとそう告げた。
「いや、そんなんじゃ足りねえな。…あんたさ、魔法師やめなよ。向いてないよ、あんたには」
その時の蓮司の瞳に全員何も言えなくなった。
そこにあったのは確かな〝悲しみ〟の感情だった。そんなものは、蓮司を知る者たちにとって、あまりにも蓮司からかけ離れたものだった。
「なあ先輩、1つ聞かせてくれよ…何で魔法師になろうと思ったんだ？」
「え…」
「エリカから先に聞いてたし、委員長もさっき話してた。あんたは剣道の達人で、しかもその容姿も相まって全国でも人気が高かった。加えて勉学の成績も優秀、人柄もとてもいい。人としてこれ以上ないものを兼ね備えている」
壬生は話の流れが読めなくなっていた。突然魔法師をやめろと

言ったかと思えば、今度はこれまでの壬生の経歴を称賛し始めた。
「そんなあんたが、なんでわざわざ魔法師の道を選んだ？そのまま剣道の強豪校にでも進めば、よりいい生活があったはずだろ」
「…」
そう言われ、壬生は思わずそんな未来を思い浮かべてしまった。剣道に打ち込み、仲間と切磋琢磨し、勉学に勤しみ、もしかしたらあったかもしれない恋…。そんなものを考えた。そして同時に思う。なぜ自分はその道を選ばなかったのか、と…。

「当ててやろうか」
そんな壬生に構わず、蓮司は話を続ける。
「…憧れたんだろ？魔法の神秘性に。心を奪われたんだろ？魔法の放つ〝光〟に」
そう言われ、壬生は改めて考える。なぜ自分は魔法師になったのか、と。そして蓮司の発言はまさにその通りだった。
「…うん、私、魔法師になりたいと思った。たまたま見た魔法がとても綺麗だったから。それで…自分にも魔法を使える可能性があることを知って…憧れの存在になれると思った。魔法師になれるかもしれないことが嬉しかった…だから…」
「壬生…」
摩利もその言葉を聞き、壬生がどれだけ魔法師というものに憧れていたかを理解した。壬生も、自分の心を整理してようやくその答えが出た。
しかし話はここで終わらない。
「魔法の〝光〟にばかり目が行って！魔法の〝闇〟に目を向けないからそうなるんだろうがぁ!!!」
ここからが本題なのだ。
全員があまりの展開について行けなかった。話の中心にいた壬生

でさえだ。
　これまで蓮司が怒ったことは何度もあった。だがその怒り方はとても静かなもので、威圧的なものだった。
　だが今の蓮司の怒りは、感情をむき出しにした、まるで幼い子供のようなものだった。事実、蓮司の表情はこれ以上ないほどに歪んでおり、今にも泣きそうなものだった。
「綺麗ごとばっか言ってんじゃねえよ！魔法が綺麗だった？憧れた？ふざけんじゃねえよ！そんなもんばかり見て、〝魔法師の現実〟を知ろうともしないから、どうでもいいような苦しみでつぶれるんだろうが！」
　〝魔法師の現実〟。その言葉が何を指すのか、達也たちは朧気ながらも理解していた。対して壬生は、何のことを言っているのか、理解が出来なかった。
「年間で世界の魔法師は数十万人以上が戦闘や実験で死んでる。裏組織の実験も含めれば年間数百万人単位で一般人を含め死んでる。生きてる魔法師だって、一部の魔法師が圧倒的な年収を稼いでるだけで、多くが低収入で碌な生活が出来ていない。中には実験で一生を終えるやつだっているし、途中で不要と判断されて破棄される奴だっている」
　それは現代の魔法社会が抱える〝闇〟だった。
「何でこんなことが起こるか分かるか？あんたみたいなのが居るからだよ！中途半端な力で魔法師になろうとして！そんな奴らが溢れ始めて！力の無さに絶望して！それでも魔法の力を手放さないから、下らねえもんに手を出し始める！」
　蓮司は周りに構わず感情を爆発させる。その姿は、まさに幼い子供そのものだった。
「てめえらみたいな奴らがそもそもの前提を間違えるから！本物の魔法師は苦しめられることになる！」
「…そもそもの前提だと？」
　ここでようやく達也が口を挟んだ。蓮司の様子もそうだが、彼の語る内容は、まさに魔法師の闇そのものだからだ。だがここで出た〝そ

もそもの前提〃の内容は検討もつかなかった。それは他の者も同じだった。
「…魔法師は、なろうとしてなるもんじゃねえ。なるべくしてなるもんなんだよ。魔法師として生きるかどうかは、生まれた瞬間から決まってんだよ！〃人間〃と〃魔法師〃は何もかもが違う！生まれも！存在も！〃種族〃がそもそも違うんだよ!!」
『っ！』
それが蓮司の根幹を形成する思考だった。その内容に、全員が息を呑む。〃人間〃と〃魔法師〃は種族が違う。そんなことは考えたことがなかった。
同時に、達也と深雪は以前八雲に言われたことを思い出した。
『彼は良くも悪くも〃魔法師〃だ』
『言ってしまえば彼の思考は魔法師主義のようなものさ。〃人間〃と〃魔法師〃は異なる存在だ、という意識が強いようだね。それだけは気を付けなさい。』
〃人間〃と〃魔法師〃は異なる存在。だからこそ、分かり合えるわけがない。
それが蓮司の思いの全てだった。
「だから〃人間〃は決して〃魔法師〃になんかなれねえ。存在が違うんだ。憧れたからってなろうなんてそもそもが間違ってる！それに…！」
そこで一度話を止めた。蓮司の瞳には一層の悲しみが宿ったようにも感じた。
「〃魔法師〃は…〃人間〃になることだってできやしない…！」
今にも泣きだしそうな蓮司の姿に全員が戸惑いを覚える。そこまで話し、蓮司は壬生のもとへ歩き始めた。そして傍まで来ると、その胸倉を強く掴んだ。
「おい!?」
摩利が止めようとしたが、傍にいた十文字がそれを止めた。十文字は、今の蓮司が壬生に危害を加えることはないと判断したようだ。
そして、蓮司は俯きながら話し始める。

「…あんたに限らず、この学校のほとんどの連中は〝魔法師擬き〟だ。中途半端にしか魔法を使えないくせに、多少できるからって一科生どもは虚構の優越感に浸り、二科生どもも阿保みたいな劣等感を抱える」
「…龍童君…」
「魔法師はそんな簡単な存在じゃねえんだよ…己に降りかかる不幸も、屈辱も、絶望も…あらゆる闇を全部呑み込んで己の力に変えられる奴じゃなきゃ…魔法師ではいちゃいけないんだよ…」
そこまで話し、蓮司は手を離した。そして踵を返して扉へ向かい始める。
「〝人間〟のあんたは〝魔法師〟にはなれない」
蓮司は努めて平静を保って話す。
「たかがそんな出来事で癇癪を起してこんな騒ぎを起こすなら…あんたは魔法師でいちゃいけない…そんなんじゃ…近い将来に〝魔法師の現実〟に押しつぶされる。だから転校することを勧める」
蓮司は一度も振り返らずにそう告げる。どんな表情をしているかはわからない。
「それでも魔法師に〝なろう〟と足掻くなら…覚悟を決めろ」
蓮司は扉を開けながら、それでも変わらず語り続ける。
「理不尽を呑み込んで…時には友すら蹴落として…それでも生き残る覚悟を」
その言葉を最後に、蓮司は保健室から出ていった。

「…やっちまった…」
蓮司は保健室を出た後、自己嫌悪に陥りながら歩いていた。蓮司にとって壬生が話した内容は許しがたいものだった。「魔法師は生まれながらに魔法師」という考え方を持つ彼にとって、中途半端な動機で魔法師を目指す者は最も憎い存在だった。
〝人間〟と〝魔法師〟は分かり合えない。それは蓮司が築き上げ

た価値観だった。
（俺は…間違ってるだろうか…。だが間違ってるなら…俺は…）
そこまで考えていると、不意に連絡が入った。
こんなタイミングで連絡を入れる奴など、あの女しかいない。嫌々ながら、連絡に応じた。
『どうちまちた蓮司君？駄々をこねてはいけまちぇんよ～？帰ったらお姉ちゃんのおっぱいでも吸いまちゅか～？』
「…吸うっつったらどうすんだよ」
『君はそんなことで冷静になれるわけでもないし、できないからこそDTじゃないか』
そして一拍おいて、今度は慈しみを持って話し始める。
『…君の苦悩は知っている。だが溜め込んではいけないよ。その憎しみは本当に世界を滅ぼしかねないし、そうなったら絶望するのは君自身だ』
「…ああ、わかってる」
『前にも言ったけどね。学校では〝人間〟を学ぶんだよ。そして知りなさい。〝魔法師〟だって〝人間〟にはなれるんだ』
「……」
それは蓮司の根幹を否定するものだったが、蓮司は反論しなかった。今はそれについて語る時ではない。
『それじゃ、奴らの場所を送るよ。後は頼むね。あと、かち合うかもしれないから特に回収は必要ないよ。好きに判断して暴れるといい』
そこまで話すと通話は切れて、地図データが送られた。
ここから先は、蹂躙しかない。

1―18　決意

蓮司が思いを吐露し、保健室を出た後。その場に残ったメンバーは今後のことを話していた。

その時、達也が真っ先にブランシュの殲滅を提言した。真由美や摩利は反対したが、このまま大人たちに任せていれば、紗耶香が家裁送りにされることになる。何より達也にとっては、このまま放置するということはありえない選択だった。

達也にとって最も大切なものは、言うまでもなく深雪である。そして〝深雪と達也の日常〟を害するものは、何であろうと排除しなければならない。これは達也にとって最優先事項であり、故にブランシュの殲滅は決定事項であった。

その後、保健室の外に控えていたカウンセラーの小野遥より位置情報をもらい、話し合いの末、達也、深雪、エリカ、レオ、十文字、そして保健室の外にいた桐原武明が参加を申し出たため、計6名がブランシュ殲滅作戦に参加することとなった。

そしてブランシュのアジトである、近隣の廃工場まで移動した後、達也が真っ先に異変に気が付いた。確かにそこは廃工場のため活気あふれるものではなかったが、それにしても人の気配がなさすぎる。そこで達也は、全員で行動し侵入することに決めた。

しかしいくら進めども、テロリストはおろか誰にも遭遇しない。ここで参加メンバー全員が流石に違和感を覚え始めた。

「…ねえ、なんかおかしくない？いくら身を潜めてるからって、こうも何の気配もないことなんてある？」

「確かにな…」

エリカが真っ先に発言し、達也が同意する。

やはり誰もいないのか。情報が誤っていたのか、それともすでに撤退したか。

前者については、自分たちに襲撃犯の目的について伝達した九重八雲の弟子である小野遥からの情報であるため、考えにくかった。

ならば後者かと考えるが、それも考えにくい。1年以上にわたって

計画を立てたブランシュが、簡単に第一高校から手を引くとは考えにくかった。
疑問は持ちながらも、それでも進んでいく一行。そして進んだ先に一つの扉を発見した。
中の気配を探るが、やはり人の気配はない。施錠されていなかったため、達也がそっと扉を開けた。そしてその中を確認し…絶句した。
そこには大量の死体が転がっていた。床には大量の血が水たまりを作り上げるほど流れており、死体のほとんどが手や足といった体の一部分を無くしていた。戦闘があったのか、
床や壁を確認するとえぐられたような跡があった。
「な…」
「な、なにこれ!?」
「おい、まじかよ!?」
「…」
桐原、エリカ、レオは一様に驚き、十文字は比較的冷静だったが、それでも絶句している。それだけの光景が目の前に広がっていた。
「お兄様…」
「ああ…」
深雪、そして達也も言葉が出ない。
目の前の光景は戦闘の後ではない。もはや一方的な蹂躙の後だった。
(どの死体にも銃痕がない。ならば襲撃犯は拳銃の類は使っていない。そして壁や床は削られているが、これは剣によるものではない。やはり…魔法師の仕業なのか?)
そこまで考え、達也はある人物を思い浮かべる。それは達也体よりも先に保健室を出ていた、第一高校の〝恐怖の帝王〟の姿だった。
(…いや、早計だ。なんの物証もないんだ)
そこまで考え、まず達也は現状を把握することを優先した。
「行きましょう。他の部屋を確認します」
その言葉に、唖然としていたメンバーも集中し直し、先に進んだ。
しかしどの部屋も似たようなものだった。人の姿はなく、あるのは

欠損した死体の数々だった。そうしてかなり進んだ広い部屋に、
「…ぐ、ひ…ひぃぃ…」
うめき声が聞こえた。やっと生存者を発見し、死体ばかり見ていたことから僅かに安堵したが、目の前の生存者を確認して、再び唖然とした。
生存者は白衣を纏った青年だった。ただし、身に着けている白衣は既に血に染まっており、白衣とは呼びにくいものだった。
そして青年の状態もひどいものだった。両腕と片足は既になく、残っている方の足もあらぬ方向に曲がっている。上半身は斜めに割かれた跡があり、そこからも血が飛び散っていた。青年の顔も涙や鼻水、そして血でぐちゃぐちゃになっており、見るに堪えないものだった。
そんな青年に対して、達也が代表して話しかける。
「お前がブランシュのリーダー、司一か？」
質問すると、青年は力なくコクリとうなずく。
まさか敵の首領とこんな形で対面するとは…と一校メンバーは絶句した。
「…てめえか！てめえが…てめえが！壬生を！」
そんな中で、桐原が怒号をあげた。そして同時に手にした刀を抜いた。それを十文字が制止する。
「よせ桐原。敵は既にこの様だ」
「会頭…」
「お前の心は分かるが…押さえろ。すでに罰をその身で受けている。それにこれなら、まだ死んだ方がましだっただろう」
そこまで十文字が伝え、桐原は完全に納得はしなかったものの下がった。
落ち着いたことを確認し、達也が改めて質問を続ける。
「ここで何があった？銃痕がほとんど確認できなかったから、同士討ちではないはずだ」
達也がそう聞くと、司一は出来事を思い出したのか、再び涙を流しながら話し始めた。

「…わ、わから…なひぃ…」
「何？」
「ひ、光…光が…現れ、て…目、の前を…過ぎたら…みん、みん…な、死んでた…」
「光だと？」
「光の、化け物が…殺した。キャスト…ジャミングも…効かな、か…た」
「……」
　内容ははっきり言って意味不明なものだった。全員が訝しく思ったが、司はそれでも話し続けた。
「あれ、ば…化け物、だ…本物の、怪物だ…！…いやだあぁぁぁぁ…こわ、いいいぃ…！じにだくなあぁぁあっぁいいいいいい!!」
　そこで、重症に関わらず錯乱して叫び始めたため、十文字が気絶させた。その後、各部屋を確認したが生存者は他にいなかったため、十文字が外部へ連絡を取り、死体の処理と司一の回収をした。
　こうしてブランシュによる襲撃事件は、なんとも言えない結末を迎えた。
　そして今回判明した〝光の怪物〟については、結局何も分からないままだった。

　ブランシュによる第一高校の襲撃事件の後。
　蓮司は1週間の奉仕活動（教員の手伝いや校内の清掃）に勤しんでいた。そしてそれを目撃した生徒からは親しみを覚えられていた。〝恐怖の帝王〟と呼ばれる蓮司だったが、その姿を実際に目撃した者は騒動を起こした生徒であり、生徒のほとんどはその姿を具体的に目撃したわけではなかった。だからこそ、奉仕活動に勤しみ、気だるげにしながらも決してさぼることをしなかった蓮司の姿は、多くの生徒の目につくこととなった。
　これが、真由美たちの狙いでもあった。ともに過ごす中で、蓮司は約束を破らない、律儀な性格であることも理解していた。だからこ

そ、面倒そうにしてもしっかりやってくれると信じていた。
　こうして蓮司は、自分の意図しないところで評価が上がっていくこととなった。
　それから少し後、暦は5月に入っていた。達也に呼ばれて、蓮司はとある病院に来ていた。詳細については知らされていない。ちなみに傍にはほのかと雫がいた。
「逃げやしねえっつの…」
「あはは…」
「万が一を考えてだと思う」
　なお、同行を依頼したのは達也だった。詳細を伝えていない以上訝しく思われてしまうことから、なんとか来てもらおうとしたためであった。
　そうして僅かに会話を弾ませながら、蓮司たちは呼ばれた病院に入り、奥を確認した。
「…ああ？」
　そしてそこにいる者たちの姿を確認して、訝し気な声を出す。
　視線の先には、壬生紗耶香がいた。花束を受け取っている様子から、どうやら彼女は今日まで入院していたようだ。そして同時に、達也が詳細を伝えなかった理由を察した。
（あの野郎、やりやがったな…今更何の話をさせるつもりだよ…）
　蓮司は非常に気まずかった。保健室において壬生に放った言葉は蓮司の本心だ。だが途中からは、もはや八つ当たりであったため、蓮司は反省していたし、美琴からも注意されてしまった。あんな人格破綻性欲中古女に注意されるなど不愉快極まりなかったが、今回ばかりは甘んじて受け入れていた。
「蓮司さん、行こ？」
　立ち止まっていた蓮司をほのかが促し、蓮司たちは進んだ。するとそこで達也たちも蓮司に気づいた。なお、そこには達也や壬生のほかに、深雪、エリカ、そして桐原がいた。なお、蓮司は桐原と直接対面したことがなかったため、なんか知らないのがいるな、程度の認識だった。

「龍童君…」
「…」
二人の間に微妙な空気が流れる。ほのかが隣でハラハラし始めた。
「…なんのつもりだ達也。呼ばれたから来てやったが、どういうことだよ」
蓮司は自分を呼びつけた達也をジト目で見た。それに対して、達也は苦笑で返した。
「それはだな…」
「待って司波君。私から話すわ。…龍童君、あなたを呼んだのは私なの」
「ああ？」
なんと実際に用があったのは壬生の方だったようだ。あれだけのことがあったにも関わらず、今更なんの話をするつもりか、と蓮司は少し身構えた。
「龍童君、あのね…私、魔法科高校に残るよ。やっぱり私は魔法師になりたい」
「…！」
その宣言に、今度こそ蓮司は顔をしかめた。あの言葉を聞いて、それでもまだ魔法師でいようとする。蓮司はその心が理解できなかった。
「…なんだよ、あれだけ言われてまだ分からないほど低能なのか？」
蓮司は敢えてそう返した。突然の罵倒に、ほのかと雫は驚き、桐原は怒りの表情を浮かべたが、達也に制止されていた。
蓮司はなおも言葉を続ける。
「もう一度言ってやるよ。魔法師はなるべくしてなるもの、目指してなるもんじゃない。生まれたその瞬間から魔法師は人間とは違う存在なんだ。あんたがどれだけ魔法の光に魅せられようと…あんたがなれるのは所詮〝魔法師擬き〟止まりだ」
蓮司は敢えてもう一度現実を突きつける。蓮司の価値観からして、そこは何があっても揺らぐことはなかった。
「どこまで行こうとあんたは〝劣等生〟だ。それでも…」

「それでも、目指すよ。だってもうそう決めたから。私の心が、そう決めたから」
「…！」
「私ね…みんなに言われて気づいた。誰よりも私を貶めてたのは自分自身だったって。剣道で実績を残して、魔法が使えることが分かって家族に期待されて…でも魔法科高校で現実にぶち当たって。ああ、私は〝劣等生〟だ、頑張ったって無駄だって諦めてた。」
「…」
「でもね、君に言われて、周りに励まされて、もう一度調べて知ったの。君の言う〝魔法師の闇〟は確かに存在する。能力のない人は生き残れない。でも、どんな能力も使い方次第で、たくさんの生き方がある。私の力でも、必ず生き残れる道があることを知ったの」
そこまで話し、改めて壬生は蓮司を見た。その瞳には強い意志があった。
「だから私は魔法師で居続けるよ。私の選んだ道に、後悔をしないために。何より…」
そこで壬生は、今度は後方の桐原を見た。
「好きな人と、そう簡単に別れるのも嫌だからね」
微笑みながら、そう告げた。その言葉に、桐原は頬を赤くして視線を逸らし、エリカはにやにやと嫌な笑みを浮かべた。達也と深雪は微笑ましそうに笑い、雫は無表情ながら驚いていたようで、ほのかは顔を赤くしてとてもうれしそうだった。
一方の蓮司は…
「…はい？」
軽く混乱していた。まさかそんな理由で残るとは思ってもみなかった。だが先ほどの瞳を見るに、もう心は折れそうにはなかった。
「…はあっ、随分と甘いこったな」
そう言って踵を返す。蓮司は帰ろうとし、ほのかと雫は慌てながら先輩たちに一礼し、蓮司を追いかけた。そして最後に…
「その甘い考えがどこまで続くか見といてやるよ。第一高校の風紀委員としてな」

蓮司はそう返し、その場を離れた。
見届ける。これからも見ている。見放されなかったと感じた壬生の口から、自然と言葉が出た。
「…ありがとう」

「蓮司さん…よかったの？」
「見た感じ、前に言い争いしたみたいだったけど」
ほのかと雫はそう蓮司に話しかけた。２人は蓮司と壬生の間に何があったのか、どんな話をしたのかを知らない。だが先ほどの会話から察するに、壬生の進退に関するものだったと感じていた。
先の会話は、どちらかというと壬生の報告、そして決意表明だった。まさかそのタイミングで恋人紹介が行われるとは思わなかったが。
すると蓮司は静かに返した。
「いいんだよ」
２人が不思議そうに蓮司の真横に進み、その顔を見た。
そして固まった。見惚れた、と言った方がいいかもしれない。
蓮司は笑っていた。それも、これまで見てきたような挑発的なものや、狂気に満ちたものではない。それは、優しさにあふれた微笑みだった。
「あの人は…大丈夫だろうよ」
そう蓮司は返した。

1―19　エピローグ

「それじゃ、かんぱーい！」
『かんぱーい！』
　エリカの音頭を皮切りに、全員が乾杯し、宴会が始まった。ここにいるのは、達也、深雪、エリカ、レオ、美月、ほのか、雫、そして蓮司という、今となってはお馴染みのメンバーだった。
　時は壬生紗耶香の退院の少し前に遡る。達也たちは、彼らの行きつけの喫茶店、「アイネブリーゼ」に集まっていた。そこにはたくさんの料理が並び、それぞれの手にはコップが握られていた。
「よーしぃ！今日は飲むわよー！」
　エリカがテンション高めに盛り上がっていた。ちなみに蓮司はただひたすらに黙々と料理を堪能していた。
「エリカちゃんテンション高いね…」
「酔ってんじゃねーだろーなコイツ…」
　美月とレオが苦笑しながらそう呟いた。まあこのテンションも仕方がないのかもしれない。入学して早々にあんな騒動に巻き込まれたのだ。いくら普段から鍛えていようが、そこは高校生。やはり遊びたいときには遊び、食べたいときには食べ、はっちゃける時には全力ではっちゃけるのだ。
「私たちも来てよかったのかな…」
「もちろん！ぜひ来てほしかったわ」
　ほのかが自身なさげに言うが、深雪は笑顔でそう返答する。なのでほのかと雫は楽しむこととした。
「賑やかだねえ。今日は何の集まりだい？」
　そう言いながら、奥から喫茶店のマスターが新たな料理を運んできた。なお、蓮司はすかさずその料理にも手を付け始めていた。
「お疲れ様会のような…」
　達也がそう返答するが、ここでエリカが爆弾を投下した。
「達也君のお誕生日会だよ！」
『えっ!!』

美月、レオ、ほのか、雫が驚きの声を上げる。なお、深雪は当然声を上げることはせず、蓮司も話は聞こえていたが目の前の料理に集中していた。
「エリカちゃん、なんで言ってくれなかったの!?」
美月が代表して真っ先にエリカを問い詰めた。本当に誕生日会なら、色々用意する必要があるからだ。しかしエリカはまたもあっけらかんと告げた。
「いやー、正確な日付は知らないよ？」
「え？」
「どうせ４月中でしょ？誤差の範囲かなって昨日深雪に…」
そう、確かにエリカは達也が何日生まれかは知らなかった。知っているのは、達也が４月生まれで、深雪が３月生まれだということだけだった。
なので、お疲れ様会を兼ねて誕生会にした、というのは本当だ。
「そう、よく知ってたのねって、ビックリしたわ」
ここで深雪が更なる爆弾を投下しなければ、ただ周りを驚かせただけだった。だが深雪の発言によって、エリカの頭に疑問符が発生し、少しして答えにたどり着いた。
「…まさか、本当に今日？」
「ああ、驚いたよ、ありがとう」
エリカが最終確認し、達也が答えたため判明したこと。それは本当に今日この日が達也の誕生日だったということだ。これにはエリカも恨み節を吐かざるを得ない。
「深雪～～～…謀ったわね…」
「あら、否定はしていないはずよ」
対して深雪はどこ吹く風、といった様子である。そこには普段の優等生な姿からは思いつかない、いたずらが成功して楽しいといった様子の、高校生らしいものだった。
しかし、こうなると更なる問題が発生することとなった。
「しまった…プレゼント…」
「うん…」

「お二人とも、気にする必要ないですよ！って私が言っていいのか分からないですけど…」
「俺らも全く知らなかったからな。同じクラスなのに…」
そう、当然だが誰も誕生日プレゼントを用意していないのだ。この事実にほのかと雫は背景に〝ズーン〟というエフェクトが出そうなほど落ち込んでしまい、美月とレオがなんとか慰めようとしたが、自分たちも何も用意していないことから積極的に発言できないでいた。
「まあまあ。君たちに気を使わせたくなかったんだろう」
そう言いながら、マスターが奥から追加の料理を持ってきた。それはとても美味しそうなケーキだった。
「このザッハトルテを僕と君たちからの誕生日プレゼントとして手を打たないかい？」
『さすがマスター!!』
マスターの提案に全員が乗り、さらに盛り上がった。するとそこへ
「マスター、このスペシャルローストビーフと、パーティーオードブル追加で」
そんな注文があった。声の主は蓮司だ。全員がそちらに視線を向けると
「誕生日のと…あれだ、迷惑料だ」
食べながら蓮司はそう告げた。これには周りも苦笑を浮かべた。蓮司は蓮司なりに、迷惑をかけた自覚があったということで、その認識がなんだかおかしかった。
「…ああ、ありがとう、蓮司」
「おう、これで今後もなんかあれば奢ればいいということで、既成事実成立だ」
「それについては却下だ。奢れば迷惑をかけていいだなんて考えるな」
「ちっ…」
「お前は本当に素直じゃないな…」
もはや漫才のようなやり取りに、ついに周囲も笑いだす。
「あっははは！おっかしー！」

「エリカちゃん、わっ笑いすぎ…ふふっ」
『ははは！』
そんな笑いが巻き起こったところで、マスターが追加の料理を持ってきた。こうして急遽とり行われた達也の誕生日会は盛大に盛り上がった。

「それじゃあ、またねー！」
盛り上がったパーティーも終わり、店前で解散となった。会計も済ませ、その場に残ったのは、達也、深雪、そして蓮司の3人だけとなった。
「じゃあ、俺も帰るわ。じゃあな…ふぁ…」
ここで蓮司もその場を離れようとしていた。その蓮司を達也は呼び止めた。
「そうだ蓮司、一つ聞きたいことがあったんだ」
「あん…？」
そう、色々タイミングを逃していたが、達也は蓮司にどうしても確認したいことがあったのだ。
「あの日…襲撃事件の日。保健室を出た後、どこに行ってたんだ？連絡もつかなかったから心配だったんだ」
そう、達也が聞きたかったことはこれだ。保健室で壬生に思いを語った後、蓮司は保健室を出てそのまま連絡が取れなくなった。ブランシュ殲滅メンバーの選出の際、戦力になるからと十文字より蓮司を呼び戻そうとしたが、連絡が取れなくなっていた。悠長に待っていることもできなかったため、その場のメンバーだけで出撃したのだ。
そうして向かった廃工場は既に殲滅が完了していた。物証はない。状況証拠すらない。それでも考えてしまった。あの廃工場を襲撃したのは…
「むしゃくしゃしたからそのまま帰った。連絡に出なかったのは知り合いと長電話しちまったからかもな。それがどうした？」
あっけらかんと、蓮司はそう答えた。

「…いや、何でもない。襲撃のあった後だったからな。少し心配だったんだ」
　達也はそう返した。もとより、何かの確証があったわけでもない。達也は深くは聞かず、納得することとした。
「そうか、じゃあな」
「ああ、またな」
「それでは龍童君。また明日」
　結局、それ以上話すことはなく、３人はそこで別れた。

　その日の夜、場所は達也と深雪の家。二人はティータイムを楽しんでいた。そんな中で、深雪はずっと気になっていたことを達也に尋ねた。
「お兄様、１つよろしいですか？」
「なんだい、深雪」
　正直、これを聞くことは少し躊躇いもあったが、それでも確認したかった。
「お兄様は…龍童君がブランシュを壊滅させたとお考えですか？」
「……」
　そう深雪に聞かれた達也は、しばしの間黙っていたが、やがて静かに答えた。
「…ああ、正直、なんの証拠もないけどね。タイミング的にも、どうしても考えてしまうんだ」
「お兄様…龍童君は…」
「何度も言うが、確証は何もないんだ。ただ、そんな気がしたというだけさ」
　そう答えながら達也は深雪の頭をなでた。深雪は一瞬驚いたものの、達也に身を任せ甘えることとした。
「心配かけたね、深雪。…それに、確かに蓮司のことを考えていたが、襲撃そのものを考えていたわけではないんだ」
「では…？」

では達也は何を考えていたのか、まだ深雪には分かりかねた。
「保健室で蓮司が言っていたことが気にかかってな…」
「！…それは」
「ああ」
そこで達也は蓮司が言っていたことを復唱した。
「魔法師は、なろうとしてなるものではなく、なるべくしてなるもの。魔法師として生きるかどうかは、生まれた瞬間から決まっている。〝人間〟と〝魔法師〟は何もかもが違う。生まれ、存在、〝種族〟がそもそも違う」
そう、達也が引っかかっていたのはこの言葉だった。事前に八雲から話を聞いていたとはいえ、こうもはっきり本人の口から聞けば、蓮司が魔法師主義であることは明白だった。
「…ですが、その考えは横暴とも取れませんか？世の中には…」
「もちろんそうさ。普通の出自から魔法師になって成功した人だっている。蓮司の考えは極端なものとも言えるさ」
だが…とここで達也は話の方向を少し変えた。
「だが蓮司が言っていたことも真実の1つだ。中途半端な力ではこの弱肉強食の魔法師世界は生きられない。そして、魔法や魔法師界の危険性を知らないまま、あるいは知らされないまま安易に魔法師になろうとする者が多くいる。政府や国は敢えてそれを知らせず、魔法師を量産しようとする。それはとても危険なことでもある」
「お兄様…」
「そして、その危険性は、俺たちのように魔法に深くかかわっている者ほど理解している。俺たちは、このことをよく考えなければいけない」
達也は、そう深雪を諭した。確かに蓮司の考えは極端なもので、それだけが真実とはならない。しかし蓮司の思考は1つの真実を語ってもいた。だからこそ、安易に違うと否定してはいけない。そこで思考を止めてはいけないと、達也は考えた。
「それにな、深雪…俺にはあの時の蓮司が…泣いているように見えた」
「泣いて…ですか？」

達也の言葉の真意を測りかねた深雪は、ただ疑問を浮かべることしかできない。
「人間は魔法師にはなれないし、魔法師は人間にはなれない。一見、差別的な発言に聞こえる。だがあの時の蓮司の姿から、俺には蓮司がこう言っているように聞こえたんだ…」

―〝魔法師〟としてではなく、〝人間〟として生きたかった。〝魔法師〟になんてなりたくなかった、と―

―かつて全てに絶望した少年がいた―
―人間に。魔法師に。世界に。そして自分自身に―
―全てに絶望し、己の境遇、そして運命を呪った―
―だがそれでも、彼は生きることを選んだ―
―それは答えを得るため。己の存在、その意味、その先の答えを得るため―
―これは、そんな〝魔法師〟の物語―

2．九校戦編

2―1　選考

国立魔法大学付属魔法科高校は全国で9つ存在する。教員となる魔法師の絶対数が圧倒的に不足しているため、現状これ以上増やすことが出来なかった。故に、在学中の魔法科高校生たちを可能な限り鍛え上げ、能力を底上げすることで将来的な人材不足を解消しようとしている。

その対策の1つとして、魔法科高校九校を学校単位で競争させ、生徒の競争心を煽ることだった。そのための最大の舞台が、もうすぐ訪れようとしていた。

それこそが、全国魔法科高校親善魔法競技大会。通称〝九校戦〟。

そこには毎年、全国から選りすぐりの魔法科高校生たちが集い、その若きプライドをかけて、栄光と挫折の物語を繰り広げる。

政府および魔法関係者、一般企業、海外からの観光客、そして研究者たちも注目を集める、魔法科高校生たちの晴れ舞台だ。

今年も、もうすぐ、その幕が上がる。

「辞退で！」

「させるわけないでしょうこの暴れん坊後輩!?」

その前に。魔法科第一高校生徒会室にて。

1年生にして、その冷徹ぶりから〝恐怖の帝王〟、〝静かなる暴君〟と呼ばれる龍童蓮司。

3年生にして第一高校の生徒会長、さらには十師族の一員である七草真由美。

この二人による、見方によってはしょうもない言い争いが勃発していた。

なぜこのようなことが起きたのか、それには少し時を遡る必要があ

る。

7月上旬。第一高校の食堂にて。
「しばらくぶりに大所帯だねー」
「ここ最近中々忙しかったからね」
エイミィと鋼が言ったように、1つのテーブルに数人の生徒が集っていた。
A組からは、ほのかと雫の2人。B組からは、蓮司、エイミィ、鋼の3人。そしてE組より、エリカ、レオ、美月の3人。合計8人が集まっていた。なお、達也と深雪の2人は生徒会室にて昼食をとっているため、この場にはいなかった。
「入学早々あんなことに巻き込まれちゃあねえ…」
エリカがしみじみと呟いた。
〝あんなこと〟とは、ブランシュによる襲撃事件のことだ。入学して1か月も経たずに襲撃などを受ければ、しばらくの間落ち着かなかったのは当然だろう。
「最近で言えば、定期試験もありましたしね」
ほのかがそう答えると、ほとんどの者が大きく頷いた。そう、魔法科高校ではつい先日、1学期の定期試験が行われた。試験はある種の戦争であり、今ここに全員が元気に揃っているのは、その戦争を生き延びたからだ。
なお、蓮司は食べることに集中していた。ちなみにメニューは、最近できた〝暴君定食〟だ。とにかく量を追求したメニューである。なお、蓮司がこのメニューを残したことは一度もない。完食されるたびに量をさらに多くしているが、まだギブアップしたことはなかった。
その蓮司が、ほのかの発言を受け、答えた。
「あんなもん、ちょちょいとやりゃなんとかなんだろ。別に失敗したからって死ぬわけじゃあるまいし…」

「流石、主席は言うことが違うな！」
蓮司の回答に対し、レオが若干興奮気味に話した。
定期試験も入学試験と同様に実技試験と筆記試験が行われ、それらが合算され総合成績となる。試験結果の内訳は次の通りだ。
実技試験
1位　龍童蓮司　2位　司波深雪　3位　北山雫
筆記試験
1位　司波達也　2位　司波深雪　3位　龍童蓮司
総合成績
1位　龍童蓮司　2位　司波深雪　3位　光井ほのか
そう、今回の定期試験においても、蓮司は実技において主席の座を譲らなかった。筆記試験においては他の者に一歩劣ったものの、それでも3位。実技試験の方が比率の高いこの試験においては些細な差とも言え、結果、蓮司は総合でも主席となった。
ちなみに試験結果発表後、蓮司が深雪と会った際には
「次は負けませんからね」
と、深雪より静かな宣戦布告を受けた。彼女も一切の油断はなく、ベストを尽くした結果だった。以前真由美より蓮司の入試結果を聞いた時から密かな対抗心を燃やしていたが。定期試験の結果により、深雪の中で蓮司は完全なライバルとなった。なお達也は、そんな深雪の様子を温かく見守っていた。
「蓮司さんすごかったですね！」
「そうですね、勉強もできたのはビックリしました！」
「お前は俺を何だと思ってんだ美月…」
ほのかも美月も尊敬の眼差しを送っていたが、天然な美月は若干失礼なことを言っていた。蓮司がジト目で指摘すると速攻で目を逸らし、周りは苦笑していた。
「でもこうなると、今年の九校戦はかなり期待できるよ」
そんな中で、鋼がそう言い始めた。
そう、今回の定期試験はただ学内の成績を競うものではない。夏に控える九校戦の選考会も兼ねている。九校戦はいわば、魔法科高校生

たちにとっての晴れ舞台であり、出場するだけでも将来の可能性が大きく広がるのだ。何よりも、他行の生徒と直接競う機会などそうそうないため、そういう意味でも己の力を試したくて仕方がない者たちにとっては、より気合の入る場なのだ。
「確かに1年生だけでもかなり期待できるよ」
「でも油断はできない。今年は三校に一条の御曹司が入ったらしいから」
「一条って十師族のか？確かにそりゃすげーな」
「でも一校だって三巨頭がいますし、優勝候補ですよね」
「いやいや～、バトル・ボードじゃ七校も油断できないよ！なんせ〝海の七校〟って異名が付くくらいだからね！」
「それなら…」
「やっぱり…」
そういった感じで、蓮司の目の前では九校戦の話で大盛り上がりだった。一方、食事を終えた蓮司はお茶を飲みながら、特に興味もなさそうに話を流していた。
だからこそ、不意に言葉が出たのだろう。
「あちー中でメンド―なのに出る奴らも大変だなあ…まあ遠くから頭の片隅くらいで思い出しとくよ…」
蓮司がそう告げた瞬間、全員が蓮司を見た。全員が疑問符を浮かべたような表情だった。当然、そんな視線を受ければ、蓮司とて困惑する。
「…なんだよ、出る奴らがんばれって言っただけじゃねーか。別に悪口でもなんでもねーだろ」
「いや、そうじゃなくてさ…」
蓮司の返答にエイミィが若干呆れながら答えた。
「君も出場するに決まってんじゃん、蓮司君？」
「……は、な？」
蓮司は本気で困惑していた。
「…待て、ちょっと待とうか皆の衆。なぜ我がかような催しに出なけ

ればならんのじゃ」
「君こそ落ち着こうよ蓮司君」
　蓮司の語尾がおかしい疑問に対して、鋼が冷静にツッコんだ。そしてその疑問に、ほのかと雫が答えた。
「九校戦の出場者は毎年1学期の定期試験の成績優秀者から選考されるんです」
「特に魔法競技の大会だから、実技試験の結果は最重要視される。実技でも総合でもトップの蓮司さんが選出されるのはもはや決定事項だよ」
　追い打ちをかけるように二科生組が答える。
「それに蓮司さんは風紀委員の実績もありますし」
「ああ、実技が得意で魔法戦闘もこなせるしな」
「三巨頭からも実力を信頼されてるしね。2種目出場はも決定事項じゃないかな」
　全員の返答に対し、蓮司はただ黙ったままだった。
　そう、先に説明した通り、定期試験は九校戦の選考会も兼ねていた。深雪を超える結果を見せた蓮司が出場するのは明白な事実なのだ。
　そんなことになっているとは全く知らなかった蓮司はただ唖然とするしかなかった。そしてそのまま昼休みは終了となった。午後の授業になっても蓮司はとてもおとなしく、周囲をかえって怖がらせていた。
　そして放課後。蓮司は授業が終了すると同時に真っ先に生徒会室に向かった。ノックをし中に入ると、服部、深雪を除く生徒会メンバーと風紀委員長の摩利がいた。
「あら蓮司君。君がここに来るなんて珍しいわね。どうしたの？」
「会長。質問があります」
　珍しく真面目な姿を見せる蓮司に全員が怪訝な表情になる。
「ええ、何かしら？」
　そんな中で真由美は冷静に答えていた。確かに蓮司の今の姿に驚きはしたものの、そこは十師族、七草家の令嬢。多少の修羅場は幾度も潜り抜けており、その持ち前の対応力は流石のものだ。

「九校戦の出場選手はもう決まってんですか？」
「粗方はね。細かいところはまだ調整中だけど、もうほぼ決定したわ」
「その中には俺も含まれてんですか？」
「勿論！実技試験の成績もさることながら、まさか総合でもトップになるとは思ってもみなかったわ！」
「…」
「今年の選手層は本当に厚いわ～。こんなに選考が楽しいこともきっとそうそうないでしょうね」
「…ちなみに出場種目はもう決まって？」
「具体的にはまだ決まっていないわ。それぞれの得意な魔法などを教えてもらってこれから煮詰めていくわ」
「……俺は、２種目なんで？」
「上位者は基本２種目出場になるわね。君の場合は本当に悩むわ～。どの種目に出してもいい成績残せると思うもの」
「……」
「唯一難しそうなのはモノリス・コードかしら。あれはチームワークが求められるからねぇ」
そこまで話し、真由美は改めて蓮司を見た。
蓮司はにっこりと笑っていた。今までそんな笑顔は見たことがなかったため、生徒会室に集まった面々は驚き、固まった。
しかしここで、真由美は同時に嫌な予感を覚えた。
真由美はこれまでの蓮司を思い出していた。粗暴で、眠そうで、食欲旺盛で、怒りの沸点が低いものの己の信念をしっかり持っている。そして何より…面倒くさがりな面が目立っていたことを。
「ねえ蓮司君？今お姉さんと～～～～っても嫌な予感がしているの。だから単刀直入に聞くわ…ここへ来た用件は何？」
真由美も同様に笑顔を浮かべ、しかしどう頑張っても引き攣ったものになってしまう。それだけ、この嫌な予感が当たりそうなのだ。
対して疑問を投げかけられた蓮司もまた笑顔で返し…高らかに宣言した。

「辞退で！」
「させるわけないでしょうこの暴れん坊後輩!?」
話は冒頭に戻る。

2―2　理由

授業が終わった後、達也は深雪と合流し生徒会室に向かっていた。というのも…

「まさか俺がエンジニアをすることになるとはな…」

そう、達也は今日の昼休みに九校戦におけるエンジニア、つまり技術スタッフに選考された。昼食時にエンジニアに悩んでいる姿を見せていた真由美たち上級生の前で、あずさが達也をエンジニアにしてはどうかと提案したのだ。それからはあっという間に話が進んでしまったのだ。最初は二科生であることや選手側との信頼関係を切り出し、達也は辞退しようとしていた。しかしここで思わぬ援護があったのだ。しかも敵側への。

「私は九校戦でも、お兄様にＣＡＤを調整していただきたいのですが…だめ、でしょうか」

なんと深雪も達也をエンジニアに推薦したのだ。こうなってしまってはもう遅い。

「そうよね！やっぱりいつも調整を任せている、信頼できるエンジニアがいると、選手として心強いわよね、深雪さん！」

「はい！兄がエンジニアとなれば、私だけじゃなく、北山さんや光井さんも安心して試合に臨むことができると思います！」

「よーし！それじゃ決定！今日の放課後の準備会議で正式に協議しようと思うので、今日は一旦生徒会室にきてね、達也君！」

こうして、達也のエンジニア入りの可能性がぐっと高くなった。

そんなこともあり、現在達也と深雪は生徒会室に向かっていた。達也は若干自嘲気味だが、深雪はとてもご機嫌だ。何せ、九校戦でもＣＡＤを見てもらえるかもしれない上に、上級生たちが達也を高く評価しているのだ。お兄様大好きな深雪がこれを喜ばないわけがない。

こうしてそれぞれの思いを抱きながら生徒会室に入ると…

「辞退で！」

「させるわけないでしょうこの暴れん坊後輩!?」

突然、言い争いの場面に遭遇してしまった。当事者は同級生の蓮司と先輩の真由美だった。あまりにも珍しい組み合わせだったため、達也と深雪は訳が分からずその場で固まってしまった。

そうしている間にも言い争いが進んでいく。

「なんでっすか！出るかどうかなんてそれぞれの意思でしょうよ！」

「理由も聞かずに認めるわけないでしょこのあんぽんたん！」

「メンド―だから！」

「それで認められると本気で思ってるの!?」

「じゃああれだ！当日ケガするから無理だ！」

「今してないなら却下よ！」

「何で認めないんすか！こんないたいけな後輩の頼みを！」

「いたいけな後輩は、殺気で人を脅さないし、先輩に暴言吐いたりしないし、怒りに任せて人を攻撃したりしないのよ！」

「だあもう！この横暴！分からず屋！お子様低身長！」

「言ってはならないことを言ったわねえええええ！」

ますますヒートアップしていく両者の主張。だが段々内容が幼稚なものになっている。このままでは埒が明かないと判断した達也と深雪は、最も冷静と思われる鈴音に事情を聞くことにした。

「蓮司はどうしたんです？あいつがあんな風に感情的になるなんて珍しいんですが…」

「…九校戦のことなんですが、龍童君は学年主席ということで選手として代表になることはもちろん、２種目出場が決定していたんです」

「当然だと思います。それで何が？」

「先ほど、唐突に生徒会室に来たと思ったら、突然の辞退を言いだしたんです。理由は先程のような適当な内容ばかりで…はっきり言って、そんなものが認められるわけがありません」

それはそうだ、と達也と深雪は同時に思った。先ほどの内容が理由なら、絶対に認められるわけがない。それが本当の理由なら。

達也たちはともにため息をつきながら、二人を宥め始めた。

「蓮司、落ち着け。そんな適当なことばかり言っていては、何も進まないぞ」

「達也…」
「会長も落ち着いてください。こういう時こそ冷静にです」
「はあ、はあ…そうね、彼のペースに呑まれていたわ…ありがとう深雪さん」
　仲裁が入ったことで、なんとか落ち着きを取り戻した両者。生徒会室が静かになったところで、
「なんだ、もう終わりか。真由美がペースを乱されるなんて珍しかったから、もっと眺めていたかったのに」
「敢えて放っておいたのね、摩利…恨むわよ…」
　摩利が涙目でそう発言し、真由美がジト目を送った。どうやらここまで摩利が静かだったのは、場の空気に呑まれたからではなく、珍しい親友の姿を見るのが楽しくて黙っていたからしい。
　そうして空気がリセットされたところで、今度は達也が蓮司に尋ねた。
「それで、どうしたんだ蓮司？お前が面倒なことを嫌う性格なのは理解しているつもりだ。だが、今回のことは唐突すぎるぞ」
「それを言うならこの選出だってそうだろうが。知らねーぞ俺はそんな選出基準…それが分かってたら、端から試験なんて手を抜いたっての…」
「私に勝っておいてそんな我儘は許しませんよ、龍童君」
　試験で手を抜けばよかったという蓮司に対して、深雪は冷ややかな視線を送る。やはり、試験結果は相当悔しかったようだ。対して蓮司はどこ吹く風といった様子だ。
「この学校では常識だし、通知だってされていたはずだがな。それに普通の生徒は九校戦の出場を1つの目標に掲げている者も多い。今まで怪我や病気でない限り、出場を辞退する生徒などいなかったはずだ。」
「んな名誉に何の意味があるんだよ阿呆らしい…」
　どうやら、相当九校戦に出ることが嫌らしい。嫌だの一点張りで話が全く進まない。達也はため息をついた。普段からは考えられない頑固さに、どうしたものかと達也が考えていると…

「龍童君。どんな内容でも構いません。ちゃんと理由を話してくれませんか？」
深雪が蓮司にそう話しかけた。これには達也が驚いた。こういう時、いつも前に出ていたのは達也だったからだ。
「さっきも言ったろ…面倒なんだよ。それに出る意味を感じねえ…」
「それが全てではないはずです。確かにあなたには高い実力、それを活かす知能もあり、同年代の魔法科高校生たちはレベルが低く感じるかもしれません」
そこで深雪は一旦話を区切り、改めて蓮司をまっすぐに見つめた。
「ですが…魔法師の弱肉強食を肯定しているあなたにとって、九校戦の舞台はある意味であなたの求める場なのではないですか？」
「…っ」
「各校の実力者が集い、鎬を削ることは、龍童君の思想に合っているはずです。だとしたら、それ以外の理由があるはずです。それをちゃんと話してくれませんか？」
「…」
深雪はただ真っすぐに蓮司を見つめ、そう問い詰めた。全員が事の成り行きを見守っている。正直、蓮司が深雪に押されるなど、考えもしなかっただろう。
深雪はただ黙って、しかし蓮司からは一切目を離さなかった。その視線を受けた蓮司は、う～～、だとか、あ～～、だとか唸り、頭をガシガシ乱暴に描いた後、静かに話し始めた。
「…嫌なんだよ」
「何がですか？」
「…魔法を使うのが」
「？…普段と何か違いますか？」
「大勢の前で使うのがだよ…」
「…つまり、どういうことですか？」
「～～～ッ…だから、一般人も含めた大衆の面前で使うのが、だよ！」
『！』
その言葉に全員が反応した。鈴音とあずさにはよく分からなかっ

たが、あのブランシュ襲撃事件後の保健室にいた他のメンバーは、ようやく蓮司が何を言いたいのかを理解し始めた。
蓮司はそこまで話し、乱暴に椅子に座った。
「…前にも言ったが、〝人間〟と〝魔法師〟は何もかもが違う。決して超えられない壁が存在している」
蓮司は苦虫をつぶしたような顔で話し始めた。できれば話したくなかった、という顔だ。
「一般人どもは、魔法師が活躍する場を見て魔法師に憧れる。〝私もああなりたい〟って、魔法師の放つ光に目がくらむ。そうして下の世代のやつらは魔法師になろうとする。…その結果が、ブランシュの襲撃事件なんじゃねえのかよ。魔法師に憧れなんか抱かせるから、ああいう連中に利用されることになるんだろうが」
九校戦は魔法科高校の全国大会でもあり、その様子はテレビ中継される。普段魔法と関わりのない人物でも、その瞬間は魔法をその目で見ることができる。
だからこそ、蓮司は危惧する。また魔法師に〝なろう〟とする人間が増えると。何より…
「その片棒を俺に担げと？冗談じゃない。政府の魔法師擬き量産計画に手を貸すなんざ御免だ」
面倒だなんだと言っていたが、それが蓮司の本音だった。蓮司にとって、魔法師はそういう存在として生まれる者だ。だからこそ、国や政府が掲げるような魔法師の量産計画は嫌いだった。その計画の一端である九校戦に参加することは本当に嫌がっている。無論、面倒くさいというのも本音だが。
全員が蓮司の主張を黙って聞いていた。特に、襲撃事件の日に保健室にいたメンバーはより真剣に聞いていた。自分たちとは全く異なる考えを持つ蓮司。しかもそれは、魔法師の闇を体現していたようなものだった。それが全てではないとは理解していても、その闇があることも事実。だからこそ、迂闊な発言が出来ないでいた。
「龍童君、話してくれてありがとうございます」
そんな中で、一番最初に発言したのは深雪だった。全員が、事の成

り行きを静かに見守っていた。
「九校戦の優勝を目指している先輩方を前に、本音を言いたくはなかったんですよね？例えあなたが関心を持ってなくても、目標を持って努力している皆さんに水を差したくなかったから」
「…」
「あなたの思いは理解しました。そのうえで聞いてくれませんか？」
「…なんだよ」
深雪は蓮司から目を逸らさず、静かに話し始めた。
「確かにあなたの言うことも一理あるかもしれません。魔法の脅威や危険性を大人が誰も伝えず、ただ魔法師の輝いている場面だけを見せて魔法師になるように勧める。これはとても危険なことだと、私も思います。」
「…」
「魔法はただの技術ではありません。他のどの分野よりも未発達です。加えて、現在の魔法は大多数が軍事活用されています。現在の環境で魔法に関わるということは、文字通り己の命を危険にさらす可能性がとても高いです。そんな中で、一般の方が魔法師になろうとすることは、あなたにとってとても受け入れがたいことでしょう」
「…おう」
深雪は静かに、淡々と蓮司に話しかける。1つ1つ、確かめるように。
「それでも、私は九校戦のような舞台は大事だと思います。それは、ただ魔法師の光を見せるだけでなく、魔法師の可能性を、そして未来を広げることに繋がっていると思うからです」
『！』
蓮司だけでなく、この場の全員が息を呑む。
「九校戦において重要になるのは個の選手の実力だけではありません。魔法の使い方、見せるタイミング、組み合わせ、工夫、選手を支える技術スタッフとの連携…あらゆる要因が重要になります。そしてそこで披露される魔法は、必ずしも軍事利用されるわけではありません。今ではまだ少ない、魔法師の経済的な活躍の場を広げる可能性

にも繋がります」
「…」
「そうなれば魔法の危険性も減らされ、より多くの魔法師の未来を広げ、安全な社会を作るきっかけにもなるんです」
「…理想論だ、んなもん」
「かもしれません。ですがそれに向かって努力をしている人がいることも、私はよく知っています」
そこで深雪は達也を見た。それは達也の目標の1つでもあったからだ。そして再度、蓮司を見つめた。
「あなたの過去に何があったかは私には分かりませんし、この場で問いただすこともしません。私には想像もつかないような、つらい思いをしてきたかもしれません。…ですが私は、そんなあなたにこそ九校戦に出てほしいと思います。魔法の危険性を誰よりも知っているであろうあなただからこそ、これからの魔法師のあり方を変えてほしいんです」
真剣なまなざしで、深雪は話していた。彼女も魔法に深く関わる者の1人であるからこそ、今の魔法師のあり方だけでは危険なことをよく理解していた。何より以前、達也と約束したのだ。魔法師のこれからについて、考えることを決して止めないと。
ここまで話し、今度は茶目っ気を交えて蓮司に答えた。
「それに今年の九校戦は、会長たち3年生にとって三連覇がかかった大事な大会でもあります。先輩たちの悲願に、普段から迷惑をかけているあなたも出場して協力してあげてもいいのでは？」
「サラッと嫌味を言いやがってこのやろう…」
蓮司は苦笑でそう返した。そこでようやく、重い空気が解放されたような気がした。
蓮司は深くため息をついた後、そっぽを向きながら答えた。
「…1種目だけだぞ、会長さんよ」
「え？」
「九校戦の種目、1つだけ出る。2種目は断る。断じてそれは嫌だ。その代わり…」

不貞腐れたように、しかしはっきりと不敵に答えた。
「出る種目は絶対優勝してやるよ」
相変わらず、先輩に取る態度ではなかったが、その宣言はとても力強いものだった。最近の生徒で、ここまで強気な発言をするものがいなかったからか、それはとても新鮮でもあった。
「はあ～～～～…君は本当に…」
真由美は大きくため息をついた後、苦笑しながら答えた。
「いいでしょう。君は1種目だけですが九校戦に参加してもらいます。そこまで言ったからには、優勝以外認めませんからね？」
「当然っすよ」
ようやく話がまとまった。こうして蓮司の九校戦出場が決まったのだった。

2―3　九校戦メンバー選定

「深雪さん、本当にありがとう！」
「ああ。君が居なかったらどうなっていたか…正直、私たちでは彼を説得しきる自信はなかったな」
「いえ、私はそんな…」
　先の話し合いが終わり蓮司が生徒会室を出た後、深雪は先輩たちより感謝を送られていた。深雪は少し照れくさそうにしていたが、それでも称賛は止まらなかった。
「なんと言いますか…龍童君にはああやって真正面から会話をした方がいいと思ったんです。下手な詭弁を使うのではなく、ちゃんと話せばしっかり聞いてくれる人ですから…」
「なるほど。確かにそうかもしれませんね」
「ええ、今後の参考にさせてもらうわ」
（深雪…）
　そんな深雪の様子を、達也は静かに見守っていた。妹はこんなに大きく、そして強くなっていたのだと、今更ながら感慨深くなった。
「これは俺も気合を入れる必要があるな…」
　達也は1人静かに、しかし力強く決意を固めるのだった。

　そしてそれから少し後。場所は部活連本部に移っていた。
「やあ蓮司君。やはり君も代表に選ばれたかい。よろしくね」
「スバルか…ひっっっじょ～～～に不本意だがな…」
「まあまあ。実力者を放っておく余裕なんてないということだね。運命さ」
　蓮司の隣に座ったのは里美スバルだ。入学式以降、特に大きな接点はなかったが、エイミィを通して話すことは度々あった。
　そうこう話していると全メンバーが揃ったため、九校戦メンバー選定会議が始まった。しかし冒頭から躓くこととなる。
　理由は達也だった。九校戦のメンバーにこれまで二科生が選ばれた記録はない。なのになぜ二科生の達也がいるのか、ということだっ

た。
　それについては、真由美から説明があった。今回達也が会議にいる理由は、九校戦の技術スタッフとして選出したからだ。これについては、好意的な意見もあった。
　しかし同時に、否定的な意見も続出した。それも明確な理由や論理的な理由ではなく、感情的で消極的な内容がほとんどだ。つまり要約すると、〝誇り高い一科生と二科生が同じメンバーになることなどありえない〟、というものだ。
　進まない会議に、蓮司のいら立ちも募っていく。いい加減何か言ってやろうかと思った時だった。
「要するに、司波の能力が不透明な点が論点と認識した。ならば、実際に確かめればいいだろう」
　十文字がこれまでの話をまとめた。彼もこの進まない会議にいい加減辟易していたのだろう。
「具体的にはどうする？」
「実際にＣＡＤを調整をさせればいい。何なら俺が実験台になっても構わない」
「いえ、彼を推薦したのは私です。実験台なら私が…」
　会頭の十文字に続いて、会長の真由美まで調整の実験台に名乗り出た。これで反対派は強く言い出せなく出せなくなってしまった。そしてここで、更なる声が上がる。
「その実験体、俺がなってもいいぞ」
　全員が声のした方向を見た。立候補したのは蓮司だった。
「いいのかい、蓮司君？ＣＡＤの調整はユーザーとの信頼関係が大切だよ？」
「抜かせ。この中で達也以上に信用できる奴なんていねえよ」
　蓮司ははっきりとそう言い切った。これには達也の加入に否定的な他の技術スタッフメンバーの視線は鋭くなるが…
「文句があんなら論理的な理由を述べてから言いやがれ。頭ごなしに否定してくる奴らなんざ眼中にねえんだよボケ」
　蓮司は睨みを利かせて黙らせた。これには他の者たちも一旦黙る

しかない。最近は鳴りを潜めているが、〝恐怖の帝王〟は健在だった。単純に高校生らしからぬ殺気が恐ろしかった。
「蓮司…抑えろ。これからチームメイトになるんだ。殺気を向けるな」
「龍童君、面白半分にそういうことをするのは止めてください」
達也と深雪がそれを抑えにかかった。その動きはスムーズであり、もはや慣れたものだった。
「はいはい、本気じゃねーよ別に」
蓮司はあっさり引き下がる。彼としても別に本気でどうにかしようと考えていたわけではない。ただ黙らせられればそれでよかった。
なお、蓮司と達也の関係性を知らない生徒は大いに驚いていた。一科生主席の生徒が二科生の生徒と仲良くし、しかも二科生の生徒が一科生を諌める姿など、誰も想像できなかっただろう。
一方、2人のことをよく知る生徒はこの時、同じことを考えていた。すなわち…
『蓮司のストッパーのためにも達也をメンバーにしなくては！』
ということだ。達也と蓮司、この2人のあずかり知らぬところで密かな団結が誕生していた。
その後、達也の調整には2年生の桐原が改めて立候補し、実際に調整を全員の前で行った。しかも完全マニュアル調整という高度な技術を披露し、桐原からも絶賛を受けたのだ。ここへ更にあずさと服部が強く達也を推薦し、十文字がそれを認めたことで、達也の技術スタッフ入りは決定となった。
ここで話が終われば、後はそれぞれ技術スタッフと選手でチームに分かれ、ミーティングが行われる予定だった。
そう。ここで終われば。

「会長！1つよろしいですか」
ここで、1人の2年生選手が名乗りを上げた。全員が、まだ達也のことで言うつもりなのかと少し身構えた。なお深雪の視線はこの時、恐ろしく鋭くなっていたが。

「ええ、何かしら」
「今回の選出について、もう1つ意見があります。そこの1年生についてです」
そう言って視線を向けた先には蓮司がいた。誰かも知らない上級生に突然指名された蓮司は、ちょっと展開を楽しみにしながら話を聞くことにした。
「俺になんか用かよ」
「…まずお前はその口の利き方を直せ。先輩に対して失礼だぞ」
「生憎と尊敬する相手は選んでるんでね。あんたに尊敬のポイントがないのが悪いんだよ」
「なんだと!」
蓮司は薄ら笑いを浮かべながら、敢えて挑発した。案の定、その2年生は簡単に激昂した。それを真由美が止めにかかった。
「やめなさい蓮司君!君は挑発しないと気が済まないの!?」
「面白そうだったんで。あんなのに反応する脆いプライドが悪いんすよ」
「まったく…それで、彼についての話とは?」
真由美がもう一度2年生選手に話を振った。先輩が間に入ったことで少し冷静になれたようだが、それでも視線は鋭いままだった。
「そいつの選手加入は反対です!この1年生の素行の悪さはここにいる生徒ならよく知っているはずです。いくら実力があろうと、こんな奴を代表に選んだら第一高校の品格が疑われます!」
それがその生徒の主張だった。これには少し反論しにくいところもあり、真由美はしばし黙ってしまった。
蓮司の成績が主席であることからも、その実力は確かなものだ。加えて普段から風紀委員として活動していることや、4月のブランシュ襲撃事件の動きを見れば、選手としての活躍を十分に認めることができる。
しかし同時に、蓮司は素行の悪さも目立っていた。先輩に対する態度は先程の通り敬う相手を選んでおり、しかもほとんどがその対象に入ってはいない。他の上級生からしたら、不快なことこの上ない。更

には非常に短気で情緒不安定な面があり、それが原因で他行の生徒と揉め事などを起こす可能性は十分にあった。
　さてどうしようかと、真由美が考えていると、
「ああ！思い出したぜあんた！新歓のときに、魔法の不適切使用で俺に捕まったやつだろ！」
　蓮司は突然大声でそう告げた。するとその２年生は苦虫をつぶしたような顔で睨んできた。
「つまり逆恨みか？はっきり言ってあれはあんたが悪かったと思うけどなぁ…なんせ「二科生が風紀委員なんて調子に乗りやがって！」なんて言いながら達也を狙って攻撃魔法を使おうとしたところに遭遇しちゃったからなぁ。俺に見つかっちまったのが運の尽きだったな」
　蓮司がそう告げると、達也に好意的な者たちは鋭い視線でその２年生を睨んだ。特に深雪の視線は絶対零度の冷たさだった。深雪は、新歓の時期に達也が何度も魔法攻撃を受けていたことは知っていた。自分が直接制裁を加えられないことに若干の苛立ちも覚えていたのだ。その敵（？）の１人が目の前にいるなど、許せるはずもなかった。
「う、うるさい！それは今関係ない！俺はお前の素行が第一高校にふさわしくないからと言っているんだ！実力があるからって調子に乗るな！」
「素行についてあんたに言われたかないね。こう見えて学年主席、先輩方からの信頼も厚いんでな。それに今回の選出は生徒会と話し合った末に決めたんだ。あんたが口を挟んだところでどうにもならねえさ」
「どうせうまくやり込んだんだろう！それに実力と試合はイコールじゃない、魔法ができるからって試合に勝てはしないぞ！」
「…なるほど、それは確かに一理ある」
　ここまで話し、蓮司は少し考えるように黙り込んだ。そして考えがまとまったのか、改めて真由美の方へ向いた。ここで真由美も、蓮司が何を言いたいのかを理解した。
「会長さんよ。そこの先輩と試合させてくんないすか」
　そう、実力が疑われているなら実際に見せればいい。先ほどの達也

と同じ。それが蓮司の結論だった。
この回答に真由美は内心嬉しかった。面倒くさがりな面が目立つ蓮司であれば、先ほどの2年生の発言を逆手に取り、九校戦を辞退する可能性が高いと考えていた。しかし蓮司は試合をすると言った。つまり自分たちとの約束である「1種目しか出ない代わりに、出る種目は優勝する」という約束をちゃんと守ろうとしているのだ。よってその申し出を、真由美は快く受けた。
「いいでしょう。彼はクラウド・ボールに出場予定よ。蓮司君は何に出場させるかまだ決めていなかったけど、クラウド・ボールで試合をしましょう！」
こうして蓮司と、蓮司が名も知らぬ2年生との試合が決定した。

2―4　クラウド・ボール

クラウド・ボールは、圧縮空気をシューターから射出された直径６ｃｍの低反発ボールを、ラケットまたは魔法を使って制限時間内に相手コートに落とした回数を競う競技だ。１セット３分の制限時間で透明な箱に覆われたコートの中へ２０秒ごとに追加射出され、最大９個ボールを選手は休みなく追いかけることになる。ちなみに女子は３セット、男子は５セット行われる。

「この試合、真由美はどう見る？」

場所は部活連本部から移動して校内にある競技場。クラウド・ボールようにセッティングされたコートには２人の生徒がいた。

１人は蓮司、もう１人は真由美に抗議した２年生だ。

蓮司の選出に納得しなかった２年生選手が蓮司との口論（一方的に捲し立てただけとも言える）の末、納得できないなら試合をして実力を示す、ということになった。

その試合の様子を、本日の会議にいた全員が観戦している。

ここで、真由美の隣にいた摩利が彼女に尋ねた。

「予想が付かない、というのが正直な感想ね。彼だって去年の新人戦クラウド・ボールで３位の実績を残しているわ」

「ああ、だからこそ蓮司君に勝負を挑んだんだろう。あいつも言っていたように、魔法が使えることと、試合ができることはまた意味が違う。それでも…」

「ええ。蓮司君が負けるところが想像できないのよね」

結論から言うと、根拠はないが蓮司が勝つ、というものだ。それは実際に蓮司が魔法を使うシーンを目撃しているからかもしれない。

一方、同様に勝負の予想を１年生たちもしていた。

「アイツ、本当はバカだったんだな」

「ああ、実績ある先輩と試合して決めるとか、無謀すぎるだろ。なあ森崎？」

「ああ。…ようやくアイツの鼻っ柱が折れるところを拝める」

男子の予想は蓮司の敗北だった。それは先輩の実力もそうだが、調

子に乗っている（と思い込んでいる）蓮司に負けてほしい、という願望もあった。
　女子の方はというと…
「蓮司さんが負けるところなんて想像がつかないよ！ね、雫？」
「うん。何か飛び抜けたことをしてくれそう。」
「確かに！蓮司君なら何かやってくれるんじゃないかな！」
「あり得るね。僕たちの予想を裏切る何かをしてくれるんじゃないかな」
　こちらも真由美たちと同様、根拠はないが蓮司の勝利と判断していた。ほのか、雫、エイミィ、スバルという蓮司と仲のいいメンバーを中心に話が進んでいるため、女子グループは蓮司寄りになっていた。
「お兄様は、この試合をどう思われますか？」
　1年生グループとは少し離れたところで、深雪は達也に話を振った。
「そうだな。蓮司の最大の武器はサイオンコントロールだ。針の穴を通すことより繊細にサイオンを操り、1つの魔法を放つのに適切なサイオンを放出できる。余計なサイオンを使わないから、スタミナ勝負は特に強いだろう」
「確かに、龍童君のスタミナはかなりのものだと思います」
「加えて魔法の大量展開も武器だ。クラウド・ボールは極論、自陣にボールが落ちなければ失点しない。相手のコートに返す魔法を連続で発動するか、自陣に返ってくるボールが落下する前に打ち返せば勝てる」
「…どちらで考えても龍童君に有利ですね」
　想えば、これほど蓮司に最適な魔法競技もないだろう。これはもしかしたら、ある意味で悪い結果になってしまうかもしれない。
　そうこうしているうちに、それぞれの準備が整ったようだ。
　2年生選手は動きやすい半袖短パンのスポーツウェアであり、ラケットを構えている。そのスタイルからして、加速魔法で自身のスピードを上げ、ボールを打ち返すスタイルなのだろう。
　一方の蓮司は、体育の時に着用する体操着を身にまとっている。そ

の姿でポケットに両手を入れて、仁王立ちしている。手首にいつものＣＡＤをつけていたが、まだ構えていない。
少ししてブザーが鳴り、試合が開始された。
シューターよりボールが射出され、２年生選手のコートに向かった。それを瞬時に動き、打ち返す。
「え、動き速い！」
「流石、新人戦３位は伊達じゃない」
ほのかと雫は驚いていた。流石は去年の新人戦で結果を残しているだけあった。
だが、すぐに試合の展開が変わる。
蓮司が僅かにＣＡＤを操作したかと思うと一瞬にして大量の魔法陣が展開された。それもコートの真ん中に、まるで壁のように展開されていた。

『はあああ!?』

これには蓮司の魔法を見たことがないほとんどの生徒たちが悲鳴を上げた。魔法を展開してボールを返す場合、普通はバウンドする箇所に魔法を展開し、相手に打ち返すことが普通だ。それを壁のように一度に魔法を展開し、そもそも自陣にボールを来させないなど、一体誰が考えるだろうか。
２０秒ごとにボールが増えていくが、蓮司のコート側から射出されたボールが魔法陣の壁にぶつかる直前、その部分の魔法陣が消されている。そしてボールが相手コートに入った瞬間、再び魔法陣が出現するため、ただ時間の経過とともに相手のコートにボールが増えていくだけだった。
２年生選手がいくら高速移動しボールを打ち返そうと、目の前に壁として立ちはだかる魔法陣に当たり、また自陣に返ってくる。壁を突破しようにも、その干渉力は相当なもので、突破することが出来なかった。
一方の蓮司は相変わらず立ったまま、しかし暇そうにあくびをして

いた。
「お兄様、これは…」
「ああ…あまりにも相手選手が可哀想だ…」
「真由美、これは…いいんだろうか…」
「ルール上はＣＡＤのスペックは競技の規定範囲のもので、その範囲で展開できたのであれば問題ないけど…これはもう…」
「雫…これってあり、かな？…」
「問題がないことはない、けど」
「さすがに私も哀れに思うよ…」
「そうだね…これはもう試合じゃなくて…」
この時、観戦していた全員の心が一致していた。
『これは試合じゃなくて、リンチだろう…』と…
目の前には、ただ壁打ちをしている2年生選手と、それを退屈そうに見つめる蓮司という、なんとも哀れな構図が誕生していた。
3分後、決着がついた。結局、2年生選手は蓮司の魔法を突破することが出来ず、時間経過とともに増えるボールにも対抗できず。ただただ点を取られ続けた。一体何点取られたのか、途中から訳が分からず何も見えなくなった2年生は、倒れながらもスコアを確認し…絶句した。スコアボードには無慈悲な数字が載っていた。
２３１―０
勝負どころか、遊びにすらならない、圧倒的な敗北。まだ1セットだが、この後2セット以上も続けるスタミナは、もう2年生選手には残されていなかった。
「そこまでだ。試合の続行は不可能と判断し、龍童蓮司の勝利とする」
ここで十文字が試合を終了させた。
「先ほど、龍童の実力が不透明という話が出ていたが、これでもう十分だろう。これ以上何かあるなら、今度は俺が話を聞こう」
達也の時と同様、十文字が発言してしまえば、もうそれ以上反論することなど、できるわけがない。こうして蓮司の代表入りは正式に決まることとなり、同時に、出場種目もクラウド・ボールで決定することとなった。

試合後、蓮司は未だに起き上がっていない2年生選手に歩み寄り、しかし手を差し向けることもせず、ただしゃがんで話しかけていた。
「よう先輩さん、どんな気分だよ？魔法が出来ても試合は…なんだっけ？」
「はあ、はあっ…だ、まれ…！」
「散々言いたいことを言って、意気揚々と受けた試合も無様に負けて…みっともないよなあ？実績持ちさんよ」
「…っ」
「別にあんたの功績をバカにしちゃいねえよ。ただな…」
そこまで話し、蓮司は立ち上がって背を向け、最後の言葉を放った。
「噛みつく相手は選びな。魔法の世界にゃ俺より年下で…俺より強い奴だって探せばきっといるだろうぜ」
それを最後に、蓮司はコートから退場した。2年生選手はその背中を、地面に倒れながら見つめることしかできなかった。

「見事だ、龍童。あれほどの魔法をそのいつもより低スペックのCADで発動させたその魔法力は称賛に値する」
「どうもっす、会頭」
「だが、奴が言っていたように、お前の上級生に対する態度は看過し難い。これからはちゃんと敬意を持て」
「さっきも言いましたけどね、敬意を表す相手は選んでるんすよ。あいつにはそれがなかっただけだ」
「お前から見てそうでも、上級生たちはお前より1年以上も魔法科第一高校の生徒として、この学校に貢献している。そのことに敬意を表せ、と言っているんだ」
「…」
「今のお前は誰でもない、魔法科第一高校1年生の龍童蓮司だ。その意味を正しく理解しろ」
「…はいよっす」

蓮司が十文字の言うことをおとなしく聞いている。これには彼を知っている面々は唖然とした。これまでどんな先輩の言うことにも素直に頷いたことなど、ただの一度もなかった。それが、淡々と述べた十文字の言葉には素直に従っていた。もっとも、素直に受け入れているかと言われれば、そういった様子ではないが。
「ほら、言った通りでしょう？龍童君と話すときは、下手に詭弁を使うより真っすぐに言葉をぶつけた方がいいと」
深雪はにこにこしながら達也にそう告げた。自分の考えが当たって、少し楽しそうだ。
「なんなら、見た目だけ大きい子供に言い聞かせるつもりでいいんだと思いますよ？」
「敵わないな…流石だな、深雪」
達也は深雪をそう褒め、頭をなでた。それに深雪はさらに嬉しそうだった。
真っすぐ蓮司と向き合う。それを今後の参考にしようと達也は誓い、ほのかたち女子メンバーと言葉を交わしている蓮司のもとへ向かった。

『なあなあ蓮司君。ハーレムが出来つつある気分はどうだい？同級生から先輩、お子様体型からスレンダー、巨乳ちゃんまで選び放題！1人分けてよ蓮司君！私のテクなら必ず堕とせるから！』
「要件がそれなら二度と連絡すんじゃねえよこの雑食淫魔」
帰宅後、また例によって美琴からの連絡がきたかと思うと、開口一番にそんなことを言い始めた。蓮司はこの手の会話は何度もされているとはいえ、いい加減うざったかった。
『しかし、君が九校戦にねえ…なんの冗談だい？君はこういうのは特に嫌いだったと記憶してたけどねぇ』
「…別に…気まぐれだ…」
『気まぐれで信念を曲げるほど、君はやわじゃないだろうに。まあい

いさ、それよりも…』
　不意に美琴の視線が鋭くなった。普段のお気楽な様子からは想像もできない表情だったが、蓮司も同様に視線を鋭くした。
『今回に関して言えば私は反対だね。それは、君も分かっているだろう？そろそろ来てもおかしくないんだから』
「…」
『今からでも遅くない、辞退したほうがいい。なんなら…』
「美琴」
　美琴の話を遮って、蓮司が言葉を発した。表情は真剣なもので、冗談は許さない雰囲気だった。その声を聞き、美琴は発言を中断した。
「どんなに小さいものでも…約束を破ることだけは嫌だ。出ると自分で言った以上出るし、優勝すると言ったからにはそれ以外はありえない」
　蓮司らしからぬ、真っすぐな瞳だった。だがそれだけ、その思いは本気だった。
　少しの間、沈黙が支配したが、やがて美琴が折れた。
『はあ…分かったよ、まったく。そういうところは本当に変わらないねぇ、君は。頑固で律儀、苦労性だよ』
「ほっとけ」
『でも本当に気を付けるんだよ。何かあってからじゃ遅いんだからね』
「…ああ、じゃあな」

2―5　新たな出会い

九校戦メンバー選出会議後、週明けの４時限目が終了した後に、九校戦発足式が開催された。メンバーはそれぞれ、選手用またはスタッフ用のユニフォームに着替え、式に臨んでいた。

「…だりぃ…」

代表メンバーの中にいる蓮司は非常に眠そうにしていた。成り行きでメンバーになったことや、元々こういった儀式の類に意味を見出しずらい性格をしていることも影響があった。入学式ですら全行程を睡眠に当てたほどだから、筋金入りであった。

「龍童君、ちゃんとしてください。全校生徒の前です」

「終わったらそうしてやるよ…ふあ…」

「はあ…」

目の前に徽章を持った深雪が現れ注意をしたものの、蓮司は全く聞く耳を持たなかった。これ以上何を言っても無意味と判断した深雪はため息をついた後、式を進行するため蓮司にも徽章を付けた。

（もういいか…）

そこで完全に集中が切れた蓮司は、しばしそのまま眠ることとした。幸いにもこれからまだ技術スタッフのプレゼンがなされるため、終了までにはまだ時間があった。こうして蓮司は立ったまま眠り続け、式が終わる絶妙なタイミングで起きることにした。

なお、起きることには成功したものの、居眠りをしていたことは真由美を含め数人に気付かれており、式の終了後に真由美より注意を受けることとなった。特に気にはしなかったが。

発足式が終われば、校内は一気に九校戦のムードになった。深雪たち選手たちは遅い時間まで練習をしており、達也たち技術スタッフはそれぞれが担当する選手のＣＡＤの調整に時間を費やす。その他にも運動系の部活動に所属する生徒たちも、色々と手伝いに駆り出されていた。よってこの間、文科系の部活に所属する生徒たちは、活動し

ている友を待つか、先に帰宅していた。
美月は文科系の部活所属者であり、前者の友を待っている方だった。そうして皆を待っていると、1人の生徒が目の前に現れた。
「美月か、ここで何やってんだよ?」
そう声をかけられたため、美月はその声のした方を向いた。そこには友達の1人である蓮司がいた。
「蓮司さん?えっと…今は練習中なんじゃ?」
「相手がいなくなったからな、これからはもう帰ることにした。暇だからな」
蓮司はあくびをしながらそう答えた。
蓮司も他の選手と同様にクラウド・ボールの練習をしていたが、身も蓋もない言い方をすると相手にならなかった。蓮司が実力を見せるために行われた練習試合で使われた『反射防壁(リフレクト・バリア)』(特に名称はなかったため、そう命名された)を他の選手との練習でも使っていたが、突破できる選手がいなかった。全員と試合をしたわけではないが、何度かゲームをした段階で十分だと判断し、それ以上の練習はしなかった。
唯一何度か、達也に頼まれ女子選手と何度か練習していたが、今日はそれもなかった。ちなみに相手はスバルをはじめとした女生徒たちで、『反射防壁』は達也の要望で使用せず、ひたすらラリーを続けた。蓮司にとっては特に面白くもなかったが、女子たちにとってはいい経験になっただろう。
よって今の蓮司は暇人である。そのためもう帰ろうとしたところで、美月に会ったということだ。
「相手がいないって…だめですよ蓮司さん。皆さんとちゃんと仲良くしないと。これからも練習が出来なくなっちゃいますよ」
「この間といい、お前の中の俺はどういう存在なんだよ…」
食堂のことといい今回といい、どうやら美月の中で蓮司は相当可哀想な存在という認識が強いようだ。どう話をつけようか考えていると…
校内から突然サイオンの流れを感じた。

突然のサイオンの感知に蓮司が怪訝な表情で視線を向けると、美月も同様の方向を見つめていた。そして不意に、美月が眼鏡をはずした。
「っ!!」
抑制効果のある眼鏡を突然外せば、当然増えるサイオンの情報量で痛みが走ってもおかしくない。案の定、美月は顔を歪め、痛みに耐えているようだった。
まもなく、蓮司は美月の視界を手で遮った。突然男子が自分に触れたことに美月は盛大に動揺した。
「れ、蓮司さん!?」
「いいから早く眼鏡かけろ。いきなり外せば痛みが続くぞ」
突然の接触に慌てふためいた美月だったが、自分を気遣ったものだと理解し、眼鏡をかけ直した。
「蓮司さん…今の、視えましたか?」
「生憎と、お前のように視ることなんざ出来ねえよ。ただ肌で感じただけだ」
美月は自分と同様の反応をした蓮司に問いかけた。だが蓮司は何かが視えたわけではなく、いつもと違うサイオンの流れを肌で感じていた。それにより、実験棟の一角で何かが行われていることを感じた。
「確認しに行くか…」
一応、蓮司は風紀委員でもあるため、何があったか確認しに行くことにした。
「わ、私も行きます!」
すると、美月も同行を求めてきた。蓮司としては特に断る理由もなかったため、ともに向かうこととした。
強いサイオンを感じた実験棟に向かい、1つの実験室の前に2人は来ていた。
「ここか…」
「はい…ここに何かあります」
互いに確認して入室すると、1人の男子生徒がいた。そしてその生

徒を中心に、青い光がうごめいていた。蓮司には馴染みのないものだったが、知識を探って1つの答えにたどり着いた。
（この感じ…精霊の類か…それを操ってる？古式魔法か何かか…）
「吉田君？」
蓮司が考えに耽っていると、美月が不意に呟いた。どうやら、目の前の男子生徒を知っているようだ。
「誰だ!!」
しかしこの呟きに過剰に反応したのは吉田と呼ばれた生徒だった。その声とともに、サイオンの奔流が2人を襲う。
「きゃあ！」
美月は悲鳴を上げて目を閉じ、蓮司は右手にサイオンを集め、2人の前に盾のように展開した。それによって特に被害はなかった。
「…ほう…いい度胸だ。反射的にとはいえ、風紀委員に不意打ちをかますとはな」
サイオンの波が止んだ頃、蓮司は静かに言葉を発した。だが、その視線は恐ろしいほどに鋭く、強い殺気を含んだものだった。それは目の前の存在を「敵」と認識したものだった。
その視線に、吉田と呼ばれた生徒は慄き、少しずつ後ずさるが、そもそも逃げ場などなかった。それに対し、蓮司は少しずつ近づきながら、伸ばしたままの右手に再度サイオンを集め始めた。
「とりあえず拘束させてもらおうか…話はそれからだ…」
今、吉田と呼ばれた男子生徒には、蓮司の一歩一歩が死神の足音のように聞こえていた。
そこで、美月が大きな声を出して蓮司を止めようとした。
「ま、待ってください蓮司さん！その人、クラスメートの吉田君なんです！」
「そうか、残念だったな、現行犯逮捕だ」
「た、確かに魔法放っちゃいましたけど！あれはどちらかというと私が声を出して邪魔しちゃったからだと思うので！大目に見てくれませんか!?」
「違反を見逃すのか？美月も意外とワルだな」

「ち、ち、違いますぅ！そうじゃなくてちゃんと話を聞いてみましょうってことです！というか蓮司さん、その右手で何をするつもりですか!?」
「ぐるぐる巻きにして拘束した後振り回して最後に地面に叩きつける」
「絶対だめですーーー!?」
　美月は必死に蓮司の制服を掴んで後ろに引こうとするが、蓮司はびくともしない。しかも蓮司の言葉で恐ろしい光景が浮かんだのか、涙目になって必死に止めようとするもどうにもできないでいた。
　この時、目の前に広がる光景に吉田は静かに思った。
（…僕は一体、何を見せられているんだろう…）
　見方によってはただのいちゃつきにも見えるが、1人は殺気を放ち、もう1人は涙目で制止しようとしていては、さすがに無理があった。
　こうしてこの攻防は、異変に気付いた達也が来るまで続いた。なお、達也がその光景を見たとき、真っ先に呆れた声が出たのは言うまでもない。
「お前たちは何をやっているんだ…」

「なんかこうして街を回るのもしばらくぶりだな…」
　休日。なんとなくすることもなかったため、蓮司は街に出ていた。
　蓮司の休日は、基本寝て過ごすものである。そして眠ることに飽きると何かを食べる。怠惰という言葉がぴったりなものであった。
　しかしこうして、たまに気まぐれで街に出かけることもある。理由は「なんとなく、そんな気分だから」である。そして街に繰り出す目的のほとんどは食べ歩きであった。
　今も蓮司の片手には大量のドーナツが入った紙袋がある。途中の店で見つけ、新作もあったためなんとなく大量に買った。ちなみに店員の顔は引き攣っていた。
「まあ、すること特にねえんだけどな…あむ…結構イケんな」

食べ歩きをしながら特にすることもなく歩く蓮司。次は何を食べようかと考えながら、少し前の出来事を思い出していた。
あの日、吉田幹比古との一連の出来事は、達也が来たことで幕引きとなった。その中で吉田幹比古が古式魔法の使い手で修練をしていたことや、美月の瞳が古式魔法における『水晶眼』と呼ばれる、精霊を詳細に見分けることができる眼であることなど、興味深いこともいくつか知ることができた。
なお、蓮司と吉田は一応互いに自己紹介を済ませたものの、初対面が初対面だっただけに友達になれたかは微妙だった。
「魔法科高校も色んな奴がいるってことか…俺が言えたことじゃねえが…」
なんとなくいろいろと考えていたが、特に正解もないためそこでやめた。そして次の店を探そうとした時だった。

「じゃーからしつこいのぉ！お主らとなど遊ばんと何度も言っておるじゃろう!?」
「そう言わずにさー。いいじゃん君ら2人だけなんでしょ？見た感じこの辺慣れてなさそうだし、俺らが案内してやるって！」
「そーそー！楽しませてやるからさ！」
「無理。お断り」

何やら騒音が前方から聞こえた。そちらの方に視線を向けると2人の女子が男2人に絡まれている様子だった。
女子2人のうち1人は小柄だった。記憶にある中では雫に近い体型をしている。特徴的だったのは膝近くまでの伸ばした長髪と、その古風な話し方だろう。
もう1人の女子は短髪で、女子の中では比較的背の高い方だった。表情は無に近いものだったが、僅かに眉をしかめていることから、目の前の存在が相当鬱陶しいのだろう。
男たちの方はいかにも遊び慣れているといったような様子だった。嫌がられているにも関わらず何度も話しかけており、それに対する女

子たちの反応すら楽しんでいるようだった。
　そうこうしている間にも言い争いは続く。
「そ、そもそも確かに儂らは確かにここら辺の者じゃないが、今時分からなくなれば自分たちで調べる！」
「そんなのメンド―じゃん。だから俺らが案内してやるんだって」
「いらない、別に」
「照れてるの？かわいー！」
「…うざい」
　男たちはどうにかしてその女子たちを同行させたいようだ。それに対していい加減苛立ちが募った小柄の女子が大きく言い放った。
「それに！今日は知り合いに会う約束もしとるんじゃ！待ち合わせの時間も過ぎてしもうたから急ぐんじゃ！」
「約束に遅刻するとかサイテーじゃんそいつ。あ、もしかしてその人も女の子？ならまとめて相手してやるからよ！」
　どうやらその女子たちには待ち合わせをした存在がいるらしい。しかしそれすらネタになるのか、男たちは楽しそうだった。
（…見てるだけで面倒くせえな…）
　もはや聞くだけ無駄だと判断した蓮司はそのまま通り過ぎようとした。すると小柄な女子は辺りをきょろきょろして…
　蓮司の姿を見つけた。すると…
「あ、おーい！やっと見つけたのじゃ！どこにおったんじゃまったく！」
　大きな声で蓮司に話しかけた。

2―6　新たな出会い　その2

「あ、おーい！やっと見つけたのじゃ！どこにおったんじゃまったく！」

蓮司の目の前で揉め事が行われていたためスルーして通り過ぎようとしたところ、その喧騒の中心にいた小柄の女子に大声で呼ばれた。全く予想もしていなかった展開に、流石の蓮司も固まってしまった。

そうしている間にも小柄な女子は、蓮司のもとへ駆けつけていた。もはや訳が分からず、ただ蓮司は立ち尽くすばかりだった。

「まったく～、今日は儂らを案内してくれるという約束だったじゃろう！どこに行っとんたんじゃ？」

いかにも「昔馴染みです」といった話し方だが、蓮司は本気でこの二人を知らなかった。ここで蓮司は、目の前の少女の顔を改めて見た。

こちらに笑いかけているが、若干引き攣っている。どうにも焦っている表情だ。どうにか話を合わせてほしい、といった様子だ。

（うわあ…面倒にもほどがある…）

奥の方をちらりと見ると、男たちは突然の展開について行けずただ茫然としており、そこに取り残されている短髪の女子は相当動揺しているようだ。気持ち的には「お前何言ってんの!?」という気分なのだろう。

さてどうしようか、と少し考え…

「阿呆か加奈子。待ち合わせの場所間違ってんのはお前らの方だ。どんだけ探したと思ってんだよ」

敢えて乗ることにした。理由は特にない。強いて言うなら暇だったから。新作ドーナツを大量購入出来て気分がよかった、というのは関係ないと蓮司は自己完結させた。

対して、目の前の加奈子と命名された少女は乗ってくれることに安堵したのか、親し気に会話を開始した。

「あれ、そうじゃったかの？確かに駅の出口にいたはずじゃが…」

「どうせ出口を間違えたんだろうが。こっちから連絡してやったのに出ねーとかまじでねーわ」
「す、すまん…」
「普段から落ち着けって言われてんだろ。これだからお子様体型なんだよ」
「今は関係ないじゃろう!?会って早々に失礼じゃな!?」
　話の方向性がおかしくなりつつあるが、ここまで話せば知り合いどころか昔馴染みに十分見えるだろう。そう判断した蓮司は、奥にいる短髪の女子に声をかけた。
「早希も早く来い。お前がいないとこのちんちくりんが暴走し続ける」
「いい加減にせんか！」
　小柄な女子が変わらずピーピー言っているが蓮司は無視した。すると、短髪の女子の方もクスリと笑い、
「そうね、早く行きましょう」
　絡んできていた男たちから離れて蓮司の側へ進んだ。そうして移動が完了したところで、蓮司は改めて男たちに声をかけた。
「連れが悪かったな。つーわけでナンパは失敗だ、他を当たりな」
　しっしっと手首で軽く追い払う仕草を見せて2人を連れて行こうとした蓮司だったが、
「待てよお前、誰の許可得てここから離れようとしてんだよ」
「つーか王子様気取りかよ？悪いこと言わねーからその子たち置いてけ。痛い目に合いたくないだろぼくちゃん？」
　どうやらこの2人組は相当しつこい類らしい。自分たちに従わないやつが許せない、といったところだろう。男の1人は去ろうとする蓮司の肩を後ろから掴んで止めた。
　しかしこの場にいる者は当然だが誰も知らない。目の前にいる男がどういった存在なのか。無闇に手を出したらどうなるか。
　それはその身をもって知ることとなる。
　ガッ！と蓮司は自身を掴んだ腕を掴み、握りつぶすかのように力を入れた。

「が、ああ!?て、てめ…」
「誰の許可を得て俺を掴んでんだ…てめえ…」

ドスの効いた声で言葉を放ち、殺気を込めた視線で相手を睨む。その間にも込めた力は一切抜かず、寧ろどんどん強くなる一方だ。
突然の殺気と腕の痛みに、目の前の男の中にあるのは恐怖しかなかった。
(な、んだよ、こいつ…こ、こ、こ、殺される!!)
「があ、あああ!?わ、分かった!俺たちが悪かった!だからっゆるっ、許してくれ!」
「ああ?」
「い、いや、許して、くださ、あああああ!?ゆ、ゆるし」
「何言ってるか分かんねーよ。…まあ、今日の俺は気分がいいからな」
そこで蓮司は殺気を抑え、掴んでいた腕も離した。
「は、はあ、はあ!」
「これで見逃してやる。悪いことは言わねーからさっさと消えろ」
―死に目に合いたくはねえだろ、ぼくちゃん?―
「は、はいい!」
「す、すみま、せん!おい、い、いくぞ!」
手を出されなかった方の男が、もう1人に肩を貸し、一目散に逃げて行った。余計な怪我を負わせなかっただけ、蓮司は十分加減したつもりでいた。無論、そう感じていたのは蓮司だけだったが。
「…我ながら、なんという男に助けを求めようとしとったんじゃ儂は…」
「私たちまで殺されるかと思った…」
そう声が聞こえたためそちらを向いた。小柄な女子の顔は盛大に引き攣っており、短髪の女子は顔を青ざめていた。よほど生きた心地がしなかったのだろう。
「あ〜〜〜…まあ、悪かったな。…だが俺は巻き込まれた方だし、巻き込んだのはお前らだし…うん、やっぱ俺悪くねえわ」
「すぐに手のひら返しおった!?」

「まあ落ち着けって。ほら甘いもんやるからよ」
「さっきといいお主は儂をなんだもぐぅ!?」
小柄な女子が変わらずギャーギャーと何かを言っていたため、とりあえず手持ちのドーナツを口に突っ込み黙らせた。そしてもう1人の方にも視線を向け、
「ほら、1つやるよ。今日の限定品だそうだ。味は中々だったぞ」
そう言いながらドーナツを食べるよう促した時だった。
「沓子ー・栞ー・どうしたの!?」
1人の少女がこちらに走ってきた。
鋭い目つきをしてこちらに近づいてくるが、日本人離れしたウェーブのかかった金髪が目立つ少女であった。
「おお、愛梨ー・実はさっき男に絡まれての…」
「なんですって…」
「それを、この人が助けてくれた」
愛梨と呼ばれた少女は2人より事情を聞き、蓮司の方を向いた。
「危ないところを助けてもらって、ありがとうございました」
「どっちかってーと、巻き込まれたって言い方が正しいな。まさか顔も名前も知らないやつに大声で呼ばれるとは思わなかったな…」
「私が少し離れている間に何してるのよ、あなた達…」
「達って、私を巻き込まないで。声をかけて近寄ったのは沓子」
「なにおう!?栞も最終的には乗ったじゃろう!」
そんなことを話していると…
ぐうう〜〜〜ぎゅるるる〜〜〜
突然そんな音が聞こえた。女子たちが不思議に思って発生源の方を見ると…
「腹減った…余計な体力使った…」
蓮司が何とも言えない表情をしていた。そんな様子に3人は呆れるばかりだった。

ちょうど正午になったため、蓮司たち4人は近くの喫茶店で昼食を

とることにした。
「そういえば、お名前を伺ってませんでしたね」
　先程愛梨と呼ばれていた女子が、蓮司に改めて尋ねた。
「龍童蓮司だ。まあ、この辺に住んでるただの高校生だ」
「ただの高校生はあんな殺気は放たんと思うのじゃがな…」
　適当な挨拶にもしっかりツッコミが入る。なんだか一校の仲間内での会話のようで蓮司は密かに楽しんでいた。
「はあ…改めて、一色愛梨です。よろしくお願いします」
「十七夜栞。よろしく」
「四十九院沓子じゃ。さっきは話を合わせてくれてありがとうの。ところで蓮司よ。1つ聞きたいのじゃが…」
　互いに挨拶を交わしたところで、沓子が蓮司に質問した。
「なんだよ」
「お主、魔法師なのか？」
「…なんでそう思った？」
「なんとなく、お主の雰囲気や空気といったところか。後は…儂の感かの」
　突然の話の展開だったが、蓮司は特に驚きはしなかった。蓮司もまた、目の前の3人の少女が魔法師であることは肌で感じていた。
「龍童…聞いたことないわね。一般家庭の出かしら？」
「少なくとも名家じゃねーな。一般かどうかは知らねーよ。そういうお前らも魔法師なんだろ？つっても、第一高校じゃ見たことねえがな」
「ええ、私たちは第三高校の生徒よ」
　国立魔法大学付属第三高校は、石川県にある魔法科高校である。尚武の校風を掲げていて、戦闘系の魔法実技を重視し、実践的な魔法師の育成を看板にしているらしい。
「第三高校か…確か実践系の魔法師の育成に力を入れてるってとこだったか…しかし、なんでわざわざ東京に来てんだ？」
「な～に、気分転換じゃよ。九校戦まであと少しじゃが、たまには休んでもいいじゃろ。それでどうせなら、遠出をしようかと思っての」

わざわざ東京に来た理由はそういうことらしい。そして先の話から、この3人も九校戦の出場者だと知ることもできた。とはいえ、知ったところでどうにもならないが。
「お主は第一高校の生徒なんじゃな？」
「ああ」
「ではお主も九校戦に出るのか？」
「まあな」
沓子の言葉に対して蓮司はそっけなく答えた。元々九校戦そのものに興味がないから、仕方がない。
「まあ、勝つのは第三高校です。せいぜい頑張ってくださいね」
ここで、愛梨が若干の嫌味を混ぜながらも勝利宣言を入れてきた。彼女のプライドは相当高いようだった。対して蓮司はそっけなく答えた。
「おう、まあ頑張れ」
「頑張れって…あなたも出るんでしょ？その言葉はずれてるんじゃない？」
「九校戦に興味はない」
続いて出た蓮司の言葉に3人は固まった。対戦相手がその大会に興味がないと言ったのだから、仕方がないのかもしれない。
「…どういう意味かしら。よければ話していただける？」
愛梨は鋭い視線で蓮司を睨んだ。自身が高みへ上るための九校戦。そしてその舞台での優勝という目標。それを目の前の男は「興味がない」の一言で切り捨てた。無視できるはずがない。
一方の蓮司は胡乱な瞳のまま、肘をつきながら答えた。
「…全員がそうとは言わないが、九校戦に出るほとんどのやつらは〝魔法師擬き〟だ。中途半端な志、たかが高校生の魔法師の中での順位付け…そんなもんに固執する程度のやつらばかりだ」
蓮司のこの感想は、クラウド・ボールの練習相手がいなくなったことにも起因していた。九校戦に出る生徒がどれほどのものか興味があったが、蓋を開けてみれば相手にならなかった。
「そもそも、魔法は秘匿されるべきもんだ。他者に知られないからこ

そその神秘性は増し、より力を発揮する。一般人どころか、権力に固執するような阿呆どもの前で魔法を使うことにも納得がいかない。…今の世の中は、魔法を公開しすぎなんだよ。その一環の九校戦も好かないな」

蓮司の主張に対し、3人は静かにその話を聞いていた。蓮司の話は、これまでの自分の常識にはなかった考えだが、一理あるとも考えていた。幸か不幸か、この場に集まった者たちは全員が魔法に深く関わる者たちだったからだ。

「…お主、中々興味深い思考をしとるの。その発想は思いつかなんだ。しかしの蓮司よ、少々考えが足りんぞ」

最も早く反応したのは沓子だった。しかも蓮司の主張には不足する点があると指摘までした。

「…どう足りないんだよ」

「確かにお主の言う通り、九校戦に出る者たちの中には有象無象が多いかもしれん。…だがの、その中で上位に入る者たちにとって、九校戦は通過点にすぎんということじゃ」

「ほう…」

「それに一般人に見せたところで、手の内を曝すという意味では関係ないの。一般人に魔法の力は理解できんからの」

「ふむ…」

「己をより高みへ登らせるために、九校戦を〝利用〟する。そう考えた方が楽しくないかの？」

沓子の話を一通り聞き、蓮司は静かに思考を巡らせていた。確かにそう考えれば、本当の魔法師が勝ち残るのは明白であるし、その者たちにとって手の内を曝したところで関係ないのかもしれない。事実、蓮司が他人の前で魔法を使っても、それを他者が同じように使うことは出来ない。

「なるほど…そう考えればまあまだいいかもな。なら…」

そこで蓮司は言葉を区切り、好戦的な笑みを浮かべながら告げた。

「勝つのは第一高校だ」

その言葉に3人は顔を引き締めた。性別が違うから直接競うこと

はない。出る種目も分からない。それでも、同じ大会に出る以上はライバルとなる。
特に第一高校は優勝回数も九校の中で最も多い強豪だ。そこに所属する生徒からの挑発となれば、自然と気合が入った。
その言葉を受けて、愛梨、沓子、栞も力強く返答した。
「…あなたの考えは正直好まないけれど…その言葉は気に入ったわ。それでも勝つのは第三高校よ」
「そうじゃの。儂らもそれなりに強いからの。楽しんで勝つのじゃ」
「私は負けないわ、絶対に」
この3人の九校戦にかける思いは強いものだ。何より、己の力に自信と誇りを持っている。だからこその強気な発言だ。
(…いいな。こういう強気は好きだ…)
好戦的なのは蓮司も同様だった。蓮司は九校戦に出るのが億劫なだけで、元々勝負事は好きな方だ。そのため、こういった強気な発言をする人物は、蓮司の中では好印象だった。
「では、互いの宣誓も完了したところで…」
沓子が飛び切りの笑顔で告げた。
「今日は楽しむかの！案内頼むぞ、蓮司よ！」
「それは見逃してくんねーのかよ…やっぱちんちくりんに話を合わせたのが間違いだったか…」
「ちんちくりん言うな?!」

その後、4人は街中を色々と歩いて回った。とは言っても、蓮司も特に詳しいわけではなかったので、気になる店をそれぞれが見つけてはそこに立ち寄るといったスタイルだった。なお、蓮司が気になった店は飲食関係ばかりで、途中から3人には止められることとなった。
「いやあ！今日は楽しかったのじゃ！」
「そうね、いいリフレッシュになったわ」
「うん、たまにはいいわね」
「お気に召したようで何よりだ…」

気付けばいい時間になり、そろそろ帰宅の時間となっていたため、蓮司は3人を駅まで送っていた。愛梨たちは満足そうな表情だったが、丸一日買い物や街の散策に付き合うことに蓮司は慣れていなかったため、流石に疲れた様子だった。
「それじゃあ、俺はもう行くぞ。」
「ええ、最後までありがとうね」
蓮司はそう告げ、3人とは別れた。蓮司が帰路に着いたところで、
「蓮司よ！」
後から大きな声で呼び止める声がした。何かと振り向くと、沓子が大きく手を振って笑顔で告げた。
「またの！次は九校戦じゃ！それが終わったら、また遊ぶのじゃ！」
さりげなく、九校戦以降も会う約束をしながら、笑顔で別れを告げた。
「ああ、またな」
蓮司もそれに対して、僅かに笑みを浮かべながら別れを告げたのだった。

「よかった…最後まで九校戦なんか面倒だって言わなかった…言ったら怒りそうだったしな…成長したなあ…俺…」

2―7　出発

8月1日。夏休みに入り、いよいよ九校戦へ出発する日となった。
「達也」
「なんだ」
「暇だ」
「…だからどうした」
「なんか話せ」
「無茶ぶりにも程があるだろう…」
バスの外には達也、蓮司、摩利の3人が立っていた。今、第一高校の代表メンバーは、1人を除いて全員が集合している。達也は乗車確認のため外に待機していたが、後輩だけ外に出しておくわけにはいかないと摩利が出て、暇になったからと蓮司も出ていたのだ。
「大体話ってなんだ。お前の興味のありそうなものなんて食べ物くらいだろうに…」
「そうだな…じゃあ、深雪の家での様子を聞かせてくれよ。学校では優等生なお前の妹は、家ではどんな感じなんだ？」
「ほう、それは私も興味あるな。是非聞かせてくれ、達也君」
「委員長まで悪乗りしないでください…」
このままでは、深雪のことを色々吐かされてしまいかねない。しかもこの手の話においては、厄介な2人だっただけに、どう回避しようかと考えていたところ…
「ごめんなさ～～～い！」
ぱたぱたと、真由美がこちらに走ってきていた。集合していなかった1人とは真由美のことで、今日は家の急な用事で遅刻してしまったのだ。
近づいてきた真由美に対する反応は二極化した
「会長…ありがとうございます…！」
「た、達也君？なんでそんなに嬉しそうなの？」
達也は今までで一番真由美に感謝していた。なお当然ながら、感謝を向けられた真由美は困惑していた。一方で…

「ちっ…今来たのかよ」
「ああ、遅れるならもっと遅れてほしかったな。もう少しだったのに…」
「あなた達２人も何なのよ!?特に蓮司君！あなた今舌打ちしたわね!?」
いい話を聞きそびれた蓮司と摩利は残念がると同時に、ある意味悪いタイミングで到着した真由美に対して悪態をついた。真由美にとってはいい迷惑だ。
「蓮司、それに委員長、もういいでしょう。全員集合しましたので出発しましょう」
達也が最後の出欠確認を済ませ、移動を開始するよう促した。摩利はそのままバスに乗り、真由美もバスに乗ろうとしたところで、蓮司と達也の方へ振り向いた。
「…忘れ物ですか？」
「ううん、そうじゃないんだけど…ごめんなさいね、２人とも。私のせいで暑い中待たせてちゃって」
「中でブリザードに浸るよりゃましっすよ」
蓮司が親指でバスの中を指すと、真由美はその言葉の意味を理解した。
バスの中には非常に不機嫌な深雪の姿があった。恐らく達也が厚い中外で待たされている状況が嫌だったのだろう。笑みはなく、無の表情を浮かべていた。
「…改めてごめんなさいね、色々と…」
「いえ…」
「ところで２人とも」
改めて謝罪をした後、真由美はいたずら好きな笑顔を浮かべて達也に尋ねた。
「これ、どうかな？」
これ、というのは間違いなく、真由美の服装についてのことだろう。
真由美が現在着用しているのは花柄のサマードレスだ。腕は完全に露出していて、現代のドレスコードに照らし合わせば、少々大胆と

もとれる服装だ。幅広の帽子も夏らしいデザインで、ポーズを取ればモデルともとれる姿だった。
「とてもよくお似合いです」
余計なことを言えばまたからかわれると判断した達也は無難なことだけ言うことを選択した。
「そう？ありがと！…もうちょっと照れながら言ってくれたら言うことなかったかな」
指を絡めた両手を腰の前へ伸ばしながら上目遣いで達也を見る真由美。しかしそれ以上の反応がなかったからか、今度は蓮司へ視線を向けた。
「蓮司君はどう思う？」
「そうっすね…」
この場にいる以上、矛先が向けられることは予想していた蓮司。しかしこの場において間違った選択をしたのは真由美の方だった。
「まず服装のチョイスがいい。この暑さ、季節に合わせたサマードレスをそこまで着こなせる人はそういない。少々露出がすぎる気もするが、それが逆に持ち前の美貌をさらに強調出来ている。ビーチサンダルもドレスとの組み合わせでより会長の上品さを表している。何よりも自身のスタイルがより強調されているところがたまらない。スカートから覗く膝、完全露出している腕、鎖骨。何より俺の視線からよく見える胸の谷間が素晴らしい。小柄ながら女子が羨むであろうスリーサイズ、出るとこは出て引っ込むところは引っ込むという素晴らしいボディ。いつ欲情してもおかしくな…」
「ストップ！もういい！十分よ！恥ずかしいからやめなさい！というか途中から体型のことしか言ってないじゃない!?」
蓮司の褒めちぎった言葉を、真由美は顔を真っ赤にして遮った。普段は他人をからかいがちな真由美だが、以外にも自身がこういう目に合うことは慣れてなかった。まして蓮司が相手だ。真由美がこれまで蓮司を相手にして、この手のことで勝てたことは一度もなかった。
どうにかして蓮司の言葉を止めた真由美だったが、今度は涙目でキッと蓮司を睨んだ。対して蓮司は悪戯が成功したようないやらし

い笑みを浮かべていた。
「どうだっていうから感想言ったのに…我儘な先輩ですね」
「覚えてなさいよ蓮司君…いつか必ずやり返してあげるから…！」
ここに、新たなライバル関係が誕生していた。

「…そろそろ出発しませんか？」

「まったく、蓮司君は…」
蓮司に褒めちぎられるというからかわれ方をした真由美は赤い顔のままであった。蓮司を睨むように視線を送るも、当の本人は完全に熟睡中だった。
「…会長が手玉に取られ続けているなんて珍しいですね」
「まったくよ…こんな気分初めてだわ…いつか絶対やり返してやるんだから…」
鈴音が指摘した通り、真由美が誰かにからかわれるなど、真由美を知る者たちからすれば想像できないだろう。まさか後輩にそんな存在が現れるとは…と、鈴音は密かに感心すると同時に、現在隣にいる同級生の姿に新鮮さを覚えていた。
「会長は…龍童君のことをどう考えているんですか？」
なので思わず鈴音は聞いてしまった。真由美の蓮司に対する態度は、明らかに他の人物に向けるものとは違いすぎていたから。
「え？」
対して、真由美はそんなことを聞かれると思っておらず、少々気の抜けた声を出していた。
そして言われてから改めて、蓮司について考えていた。
不遜で、かなりの自由人というのが主な印象だ。一方で、誰よりも魔法師の〝闇〟を理解している稀有な存在である。もっと言うと、蓮司は〝闇〟を知りすぎており、〝闇〟に浸かりすぎている。
あの日。ブランシュの襲撃事件があった日の保健室にて語られた蓮司の思い。そこには強い憎しみと深い悲しみが垣間見えた。〝魔

法師〟と〟人間〟は異なる存在であり、交わることはないという言葉は、その全てを物語っていた。色々な意味で不安定な蓮司という存在は、総括すると…

「放っておけない弟…かなあ…」

というところに落ち着いた。

「弟…ですか」

「今までいなかったような男の子なのは間違いないわね。はっきり言って、私を〟七草〟と理解したうえであんな態度を取ってくる男の子なんてまずいなかったわ。だから彼との関りは新鮮に感じるわね」

恐らく、同様に接してくるのは十文字くらいだ。しかしそれは同じ十師族だからだ。

「だから楽しんでいる自分もいるのよね。彼と話していると…色々なしがらみから解放されて、素の自分で居続けられる気がするわ」

「会長…」

「でも!」

そこで言葉を区切り、強気な表情で後方の蓮司を見つめた。本人は変わらず爆睡しているため、その視線に気づくことはない。

「やられっぱなしは性に合わないわ。だから…いつか必ずやり返してやるんだから」

そう呟く真由美の顔は、とても楽しそうだった。

真由美たちがそんな話をしていた頃、バス後方の席ではとある問題が起こっていた。それは、不機嫌な深雪をいかに宥めるか、というものだ。

真由美が到着するまでの間、達也はずっと外で待っていた。誰が来ていないか分かっているのに、何故兄がわざわざ暑い思いをして外で待っていなければならないのか。しかも途中から兄は摩利と二人きりだったのだ(摩利が達也に対して申し訳なく思っての行動ということは考慮されていない)。そのうえ、移動中はゆっくりとしてほしかったのに、最愛の兄は狭い作業者に詰め込まれることになるとは

（技術スタッフは全員作業者に乗って、機材を管理していることはこの際考慮されない）。深雪の不機嫌さは最高潮に達していた。
結果的に深雪を宥めたのは雫だった。雫は達也の誠実さや真面目さを指摘し、褒めたたえた。それによって、深雪はご機嫌になったのだ。この結果に、雫とほのかはガッツポーズをとった。
（はぁ～～～…なんとかなってよかった～～～…）
ほのかは人知れず、そっと胸を撫で下ろした。このまま到着するまでの間、隣の深雪に不機嫌で居られてはたまらなかった。
しかし落ち着いたことで、今度はほのかに別の問題が起きてしまった。
（蓮司さん…会長さんみたいな人がタイプなのかな…）
それは、ほのかの後ろの席で爆睡している蓮司についてだ。
真由美が到着して少し経った頃、外での真由美と蓮司たちとの会話を聞いてしまった。真由美が自身の格好について達也と蓮司に質問し、達也はコメント少なく回答した。しかし蓮司は次々と真由美を褒めたたえたのだ。最終的には真由美が顔を真っ赤にしながら会話を終了させたが、その時の様子がほのかの頭から離れなかった。
無論、蓮司は真由美をからかっていただけだ。しかしほのかにはそれが分かっていない。故に、蓮司の言葉をストレートに受け取ってしまっていた。
（会長さんは確かにとても美人だし…スタイルだってすごくいいし…）
同性のほのかから見ても、真由美はかなりの美形だ。魔法師はその能力が高いほど容姿が整っている特徴がある。十師族たる真由美も、その例に洩れてはいなかった。
（私は…どうかな…）
改めてほのかは自身について考えた。容姿は比較的整っている方だと言われるが、自分自身は童顔だと考えている。胸は…同世代と比べると育っている方だと思うし、ウエストだって決して太くはない。
改めて、ほのかは蓮司の方を振り返った。
異性の友達が多くないほのかにとって、蓮司は高校生になってから

できた貴重な男友達と言っていい。最初こそ恐ろしかったが、話せばマイペースで、面倒くさがりだが、大事なことはしっかりやる、というのがほのかの蓮司に対する印象だ。

何よりほのかは、蓮司に命を救われたあの日を忘れたことはなかった。

生まれて初めて感じた死の恐怖。そこから彼は自分を救ってくれたのだ。加えて、恐怖に支配されそうになった心を癒してくれた。あの時にかけられた言葉は、今も色あせることなくほのかの中に残っている。

（私も…何か恩返しができないかな…）

いつか蓮司に恩返しがしたい。自分に何ができるかは分からないが、もらってばかりは嫌だ。

（そのためにはまず…私の頑張る姿も見せないと！）

蓮司のことも考えながら、ほのかはより一層大会に向けて気合を入れた。

ほのかの持つこの感情は何なのか…今の彼女にはまだ答えが出ていなかった。

「あぶない!!」

しかしその思考は、突然響いた叫び声に中断されることとなった。

2―8　事故

バスに乗った後、蓮司はすぐに睡眠に入った。同じ代表チームとはいえ、必要以上に仲良くなろうとはしなかったことや、クラウド・ボールでの練習の影響でより男子側との仲が悪くなってしまったこともあり、移動中は眠ることとした。

何事もなければ、会場に着くまで眠り続けることだろう。

何もなければ。

「っ！」

会場に向かう道中、蓮司は目を覚ました。それは、外で魔法の反応を感じたからだ。学校でならともかく公道、しかもこんな移動中にそれを感じるなど、通常ならありえない。

（どこだ？）

その発生源を探り始めた時だった。

「危ない！」

1人の生徒が前方を指して叫びをあげた。そちらに視線を向けると、対向車線を走っていたであろうトラックがガードレールを飛び越えて、こちらに向かって横転しながら突っ込んできていた。

バスは急ブレーキにより何とか急停止した。その間にも、こちらの道路に乗り上げたトラックが、炎上しながらこちらに突っ込んできていた。

「吹っ飛べ！」

「消えろ！」

「止まって！」

目の前の事態に、数人の生徒が対処しようと魔法を発動させようとした。その中には雫の姿もあった。親友の姿を見て、ほのかも何とかしようと魔法発動の準備に入る。だがそれは、蓮司に腕を掴まれたことにより叶わなかった。

「れ、蓮司さん!?どうして…」

「無闇に魔法を発動するな。やたらと魔法を発動させれば、互いの魔法が相克を起こして碌に発動しない。授業で習わなかったか」

その言葉に、ほのかははっとした。無秩序に魔法を同一の対象に発動してしまえば、互いの魔法が無秩序に事象改変を起こし、結果として魔法が相克を起こしてまともに発動しなくなる。以前に授業で習ったことを慌てて忘れてしまうとは情けない。

蓮司の言葉と存在で冷静さを取り戻したが、それでも状況は変わらない。

「バカ！やめろ！」

摩利の言葉もむなしく。複数の魔法は発動されてしまい、一帯はサイオンの嵐に包まれていた。それはさながら、強力なキャスト・ジャミング下にあることと何も変わらない。ここから更に魔法を発動するためには、発動中の魔法を圧倒するほどの魔法力が必要だ。

「十文字！」

摩利は唯一可能性のある十文字の方を見た。十文字も次の魔法発動の準備には入っていたが、その表情は険しい。摩利は絶望に囚われそうになった。

「私が火を！」

ここで深雪が声を上げ、さらには消火すべく魔法発動の準備を終えていた。それを見て、十文字も同様に魔法発動の準備を終わらせた。

しかしここで彼らにとって予想外のことが起きる。

「蓮司さん！だめぇ！」

突如として悲鳴が上がった。悲鳴を上げたのはほのかだった。全員が何事かと声の発生源の方を見ると…

蓮司が窓を開けて外に飛び出し、トラックとバスの中間地点に立った。

「蓮司君!?何をするつもり!?」

「龍童君!?」

「龍童！戻れぇ！」

突然の奇行に、何人もの生徒が声を上げる。その間にも、蓮司は態勢を整えた。

蓮司は瞬時に両腕にサイオンを集め、より大きな腕を形成した。その大きさは蓮司の背丈を遥かに超える大きさだ。そして左のサイオ

ンの手を地面にめり込ませて固定し、右腕はそのまま引いた、正拳突きの構えを取り…
「オォォオオオアァァ!!」
雄たけびとともに前方へ突き出し、突っ込んでくるトラックを受け止めた。
ガシャアアアアンッッ!!!と激しい衝突音が鳴り響く。蓮司は苦悶の表情を浮かべて、何とか衝撃に耐えている。しかしそれでもトラックの勢いは強く、僅かに蓮司が押されていた。なんとか耐えようとしたとき…

無秩序に発動していた魔法式が、一瞬で全てかき消された。

突然の出来事に蓮司は驚いたが、蓮司自身はこれに近い現象を一度その目で見ている。
「はっ!ナイスフォロー!」
蓮司は笑みを浮かべ、硬化魔法を発動して自身の位置を固定し、衝撃に耐えた。魔法式が全て消されたおかげで、改めて魔法を発動させることができた。
そしてそれと同時に深雪が魔法を発動させ、消火を完了させた。こうして1年生の現主席および次席により、事態の鎮圧に成功させることができた。
トラックが完全停止し、消火も完了したことを確認した蓮司は、腕にサイオンを集めたままトラックに駆けつけ、ドアをサイオンの腕で破壊して運転席を確認した。しかし当の運転手は、既に息絶えていた。
「ちっ…」
蓮司は苛立ちを見せ、舌打ちをした。もし運転手が生きていたなら、聞きたいことが山ほどあったからだ。
(さっきの感覚、不自然なトラックの動き…恐らく魔法によるものだ。だが、今付近を探ってるが、魔法師の気配はない)
蓮司は感覚を集中させ、付近に不審なサイオンがないかを探ってい

た。しかし、この場以外に魔法師らしい存在は感知できなかった。もし近くにいて魔法を発動させたなら、サイオンの残照を感知出来て場所が分かるからだ。
　しかしいくら探ってみても、第一高校の生徒意外に魔法師の存在は感知できない。これはつまり…
（まさか、こいつが？自爆特攻でも仕掛けてきやがったのか？…だが何のために？まるで目的が見えねえ…）
　蓮司の頭は疑問に支配されたが、いくら考えても答えは見えてこなかった。
（しょうがねえ…不本意だが、あいつに確認を取るか…）
　よって、蓮司は落ち着き次第美琴に連絡を取ることにした。気が進まないがあの女のことだ、何か情報を持っているはずだ、と蓮司は今後の方針を決めた。そうこうしているうちに、達也を含めた数名の男子生徒が、現場検証や記録のために集まってきた。
　それを確認し、蓮司はその場をその生徒たちに任せ離れることにした。途中、達也とすれ違う際に
「ナイスフォロー。助かったぞ」
「…ああ」
　短く言葉を交わし、蓮司はバスへ戻った。

「蓮司さん！」
　バスへ戻った蓮司は、悲壮な表情をしたほのかに真っ先に迎えられた。
「怪我は!?怪我はありませんか!?」
「別に、大したことはねえよ。表面を少し剥いただけだ」
　そう言いながら、蓮司は掌を見せた。言葉通り、蓮司の両の掌は所々が焼けて剥けており、血が流れていた。
　蓮司のサイオンの鎧は直接触れることなく物体を掴むことができる。そしてその強度次第で様々な物から身を守ることができるが、決して万能ではない。
　今回で言えば、確かに暴走するトラックを止めることは出来ていた

が、トラックの火が放つ熱まで防げたわけではない。加えて、向かってくるトラックの衝撃に耐えるためにより手にサイオンを集めたため、蓮司の手にはより負担がかかっていた。結果、蓮司はトラックの火の熱と自身のサイオンの鎧の負担により、腕に怪我を負った。

その手を見た瞬間、ほのかは更に顔を青ざめた。

「は、早く手当を！絆創膏、いや包帯！」

「落ち着け、表面を少しやっただけだ。何ともねえよ」

「何ともないとか関係ないよ!!」

蓮司の言葉に対し、ほのかは怒号を上げた。周囲はもちろん、親友の雫や当事者の蓮司も固まってしまった。

ほのかは多少思い込みが激しくなる時があるものの、基本的には大人しい性格だ。事実、蓮司はほのかが怒ったところは見たことがなかった。だからこそ、自身に向けられた怒りに、思わず固まってしまった。

「急に飛び出して…魔法だって発動できるか分からなかったのに…何をするか知らなかったし…もし死んじゃったらって…すごく…怖かった…」

ほのかは涙を浮かべて、その思いを吐露した。

蓮司にはトラックを止める手段があった。だからこそ行動した。

しかし周囲の生徒はそれを知らない。であれば、先ほどの蓮司の行動はまるで自殺行為のように見えただろう。それはほのかも同じだった。

もし目の前で死んでしまったら…そう考えるだけでほのかはとても恐ろしかった。

蓮司は改めて先の自分の行動を振り返った。

動ける者が自分だけだと判断し、緊急時において説明は無駄だと判断したから、誰にも何も言わなかった。結果として死者は出ず、負傷者も自分だけ、それも僅かに手に怪我を負った程度。蓮司の価値観で言えば上出来だった。

だがそれはあくまで蓮司の中の結果であり、他の者たちが全員それに満足しているわけではなかった。
「蓮司君。さっきは本当にありがとう。君が誰よりも前に出てくれたから。最悪の事態は避けられたわ」
ここで真由美が前に出た。言葉で感謝と称賛を述べながらもその表情は真剣なもので、笑みはなかった。
「でも誰にも何も言わなかったことはダメよ。君が何をするか分からなくて、とても不安だったわ」
「…」
「蓮司君の実力は知っているつもりだし、実戦において誰よりも動けることも知っているわ。…それでも、次からはちゃんと伝えてね。何もできなかった私が言えたことではないけれど…もう少し私たちを信頼してね」
「…はい、会長」
蓮司は素直に真由美の言葉に頷いた。信用してなかったわけではないが、何も言わなかったことは確かに蓮司に非がある。そう蓮司は判断し、受け入れることにした。
「言うべきことは、全て七草が伝えたな」
十文字も同様に蓮司のもとへ来たが、どうやら内容は叱責ではなさそうだ。
「改めて感謝する、龍童。あの状況下で不用意に魔法を使わず、迅速に行動したことは称賛に値する。そして…何もできずに済まなかった」
十文字からは称賛と謝罪が送られた。
十師族の一員として、そして第一高校の幹部として、あの状況下で何もできなかった己を恥じると同時に、自身の代わりに事態に対処した1年生をねぎらった。
「どうもっす、会頭」
「一先ず、お前は手の治療をしろ。光井、龍童の面倒を頼む」
「はい！蓮司さん、こっちに来てください」
「こんなもん放っておいたって…分かった分かった、ちゃんと治療するからそんな目で睨むな。眉間のしわが取れなくなるぞ」

「余計なお世話です！」

一先ず、現場記録や警察の事情聴取が完了するまで身動きは取れないため、各々が改めて休息を取ることとなった。その間に蓮司は持ち前の回復力を誇る治癒　魔法で手のケガを治し、それを見た周囲（主にエイミィ）の追求は躱し続けた。いちいち説明することは面倒だった。

そして約３０分後に全ての作業が完了し、再出発した。朝の出遅れも含め、第一高校の代表メンバーが宿舎に到着したのは昼過ぎとなった。

2―9　懇親会

途中、事故に遭遇したものの、昼過ぎには宿舎に着いた第一高校代表メンバー。それぞれが荷物を移動させている中、達也、深雪、そして蓮司の3人は先の事故について話していた。

「では、先程のあれは、事故ではなかったと…？」

「あの自動車の跳び方は不自然だったからね。調べてみたら案の定、魔法の痕跡があった」

「やっぱりか、妙だとは俺も感じてたが」

そう、先程の事故は、蓮司も感じていたように魔法によるものだった。その違和感を覚えていたのは達也も同様であり、だからこそ調べていたのだ。

「小規模な魔法が、最小限の出力で瞬間的に行使されていた。恐らく、専門の訓練を積んだ工作員だろう。使い捨てには惜しいくらいだ」

「使い捨て…ですか」

「予想は付いてたが…まだ面倒な話になってきやがったな…」

〝使い捨て〟という物騒な表現に2人の声は自然と引き締まった。

「最初はタイヤをパンクさせる魔法。二回目が車体をスピンさせる魔法、三回目がガードレールをジャンプ台に車体を跳び上がらせる魔法。いずれも車内から放たれている。魔法が使用されたことを隠ぺいするためだろう」

「では、魔法を使ったのは…!?」

「…運転手、自爆攻撃だな」

「ああ、俺もそう思う。サイオンの感知をしてみたが、あの場に他の魔法師はいなかった。一校の連中にも俺たちの存在を掻い潜って魔法を使える奴なんていないだろうからな」

「…お前、同じ学校の生徒も疑ってたのか」

「可能性は0じゃねえと思ったまでだ」

運転手による自爆攻撃。その目的が真っ当なものであるはずがない。

「卑劣なっ…！」

「もとより犯罪者やテロリストなど卑劣なものだ。そんなことで怒っていたらキリがないぞ？」
あまりに酷い魔法師の活用の仕方に、深雪は強い怒りを覚える。荒事に慣れている達也は、そんな深雪を宥めていた。
「目的は第一高校の妨害ってとこか…。だがその理由が分からねえな。俺たちに危害を与えて、得をする奴らがいるってことか？それともまさか、全校に似たような妨害があったのかねえ」
蓮司はそう推測するが、結局現状では情報が足りず、答えは見えてこなかった。
「まあ、今はいいか。…それよりねみぃ…俺の安眠を妨害しやがって…今日はもう休むか」
「…本気で言ってるのか、蓮司？まさかこの後のスケジュールを忘れているのか？…いや、お前の場合、最初から確認してないな」
「あん？」
蓮司の発言に対して、達也は呆れていた。達也の言う通り日程を確認していなかった蓮司は、達也が言っていることが分からなかった。
その様子に、深雪は苦笑を浮かべながら、蓮司に教えることにした。
「龍童君、この後は各校のメンバーが全員集合して懇親会があります。…サボらないでくださいね？」

そもそもの話だが、真由美をリーダーとした第一高校の代表メンバーが大会開催の前々日の午前中に集合していたのは、この日の夕方に予定されている立食パーティー、他校の代表生徒との懇親会に出席するためだ。
この懇親会は選手だけでなく、技術スタッフなどの裏方メンバーも参加する。何かと理由をつけて欠席する生徒もいるが、それでも毎年３００人～４００人ほどの規模のパーティーになる。そしてこの懇親会はプレ開会式の色合いが強いため、和やかさよりも緊張感の方が目につく。

だが懇親会が開催されて間もなく、例年にはないものが目につく、というよりかなり目立っていた。それは…

モク…

終わることなく一心不乱に食事をとり続ける1人の男子生徒。立食パーティーにも関わらず椅子とテーブルをどこからか用意し、ただひたすらに目の前の料理をむさぼり続けている第一高校の制服に身を包んだ男子。交流会にも関わらず周りの存在を一切無視し、そもそも認識すらせず、目の前の命の恵みに感謝…しているかどうか分からないが、とにかく食し続ける龍童蓮司。

今、会場で最も目立っているのは蓮司だった。

「すげえ…な、なんなんだよアイツ…」
「もう何人前食べてるんだ？腹いっぱいどころか胸やけしそうだ…」
「でも飛び散らかってないし、きれいな食べ方…」
「口に入れて、噛んで、呑み込む…その動作が恐ろしく速いのね」
「こんな人がいるなんて…流石第一高校、油断ならないね」

「…なんか第一高校の評価のされ方がおかしい…懇親会ってもっと殺伐としてなかったっけ？」
　真由美が何とも微妙な顔をしていた。第一高校は現在九校戦２連覇しており、九校戦優勝回数も全校の中で最多である。故にこの懇親会では、時に針の筵のような思いをすることもあった。故に、真由美はこの懇親会自体があまり好きではなかった。なのに…
「まあ、こういうことがあってもいいじゃないか」
　そう真由美に話しかけたのは摩利だった。片手にノンアルコールのグラスを持って、少し楽しそうでもあった。
「彼が他校の生徒と揉め事を起こさないか心配だったが…こういうことならむしろ歓迎したほうがいいんじゃないか？いい意味で注目の的だし、これからの３年間は風物詩にだってなれるだろうさ」
「…ふふ。そうね、そういうことにしておきましょ」
　なんだかんだで、蓮司の一心不乱な姿を見ることは楽しくもあった。普段は不遜で生意気なことがほとんどだが、食べ物のことになると面白いくらいに人が変わるところをこれまで何度も目にしてきた。なので今回も…
「弟みたいな後輩の成長でも見守ることにしますか。本当にしょうがないんだから」
　そう言う真由美の顔は優しさに満ちていた。

「わーお…ここでも蓮司君の食欲が爆発してるよ…」
「見るたびに思うが、彼の胃袋にはブラックホールでも仕込まれているのかい？異常を通り越しているよ…」
「あ、甘いものもあんなにたくさん…女子の敵だよあれ…」

第一高校の1年生女子は蓮司の食欲にドン引きしていた。
「何をしているんだあいつは…」
「あはは…」
ここまで誰とも交流せず、強いて言うなら料理とのみ交流している蓮司に、達也も他の生徒と同様に呆れていた。隣にいる深雪も、珍しく乾いた笑みしか浮かべられなかった。
「蓮司さん大丈夫かな…あんなにたくさん食べてたらお腹壊しちゃうよ。胃薬用意してあげなくちゃ」
「ほのか、それはちょっとずれてる」
ほのかは逆に蓮司の体調を気遣っていたが、感想が少しずれていた。そこをすかさず雫が突っ込んでいた。
最早、誰も蓮司を止められないのか。そう誰もが思って（思わなかったりして）いた時だった。

「おお、蓮司よ！久しぶりじゃな！相変わらずの食欲だのう！」

その空気を壊して、話しかける女生徒がいた。制服を見るに第三高校の生徒であり、古風な話し方が特徴的だった。突然話しかけた現実に第一高校の生徒も含め、蓮司を見物していた生徒たちは黙っていた。
対して話しかけられた蓮司は、口の中にあるものをドリンクで飲み下し、その第三高校の女生徒、四十九院沓子と会話を開始した。
「沓子…じゃなかった、ちんちくりん。しばらくだな、相変わらず小さいな色々と」
「今言ったじゃろ。名前をしっかり言ったじゃろ！敢えてちんちくりんと言い直すな！それと最後のは余計じゃ!?というかセクハラじゃぞ！」
「バカ言え、セクハラってのはもっと美人でナイスバディな女性にするんだよ。こんなもんお子様いじりだ」
「やかましいわ！」

「お前がな」
　しかし会話を開始したかと思えば突然の言い争い。周囲の見物人はもはや訳が分からなかった。
　そこへ、更に2人の女生徒が会話に参加した。
「相変わらずね…それに会って早々何をしているのよあなた達は…」
「2人とも静かに。目立ちすぎ」
　話しかけたのは、同じく第三高校の一色愛梨と十七夜栞の2人。以前街中で交流した3人と蓮司は、約束通り九校戦の場で再会を果たした。
「お前らもしばらくだな。あとこいつをどうにかしろ。ピーピーうるさい」
「あーはいはい、もう付き合うだけこっちが疲れるだけじゃなあもう」
　蓮司が文句をいい、沓子が拗ねて、愛梨と栞がため息をつく。何ともおかしな空気に4人は同時に笑った。
「漫才はこの辺にしとくか。改めてしばらくだったな、沓子、栞、愛梨。調子はどうだよ」
「お主に大分狂わされたわ。まあ上々じゃの」
「そうね、いい感じに集中できてるわ」
「私は少し気が抜けてよかったかも。あなたの食事姿も相変わらずね。そっちも調子良さそう？」
「まあ、悪かねえな。でもまだ食いてえ」
「ふはは！相変わらずじゃのう！腹に焼却炉でも抱えてるようじゃ！」
　そうして始まる談笑。さっきまで誰とも話していなかったのに、突然会話が行われたことに周囲は唖然としていた。
　特に、第一高校の面々の反応は顕著なものだ。
「…摩利…なに、あれ…」
「言うな真由美…私だって自分の目を、いや頭を疑ってるんだ」
「おいおい、あの龍童が他校の女生徒と友達とか、笑えねえな」
「ふむ…意外と顔が広いのだな、龍童は」
「会頭…それは感想が少し違う気が…」

傍若無人な蓮司をよく知っている上級生たちは、目の前の光景に唖然としていた。
「え、と…蓮司君が他校の女子と話してる?…夢か何か?」
「エイミィ…君の心が手に取るように分かるよ。…だって僕も同じだから…」
「れ、蓮司さん…いつの間にあんな美人さんと…」
「うん、これはびっくり」
「お兄様…私、人生でもトップ3に入るくらい、とても驚いています」
「気持ちは分かるよ深雪…俺も似たようなものだ」
同級生たちも困惑の色が強かったようだ。
「お、おい…アイツ、〝エクレール・アイリ〟と普通に話してるぞ!?」
「何者なんだ…実は名家の出とか?」
「お前、さっき軽くあしらわれてたもんな…」
「他の2人だって〝数字付き〟だぞ」
周囲の生徒はどちらかというと、愛梨たちと普通に話していることに驚いているようだ。
「ジョージ…アイツのこと知ってるか」
「名前だけはね。龍童蓮司、第一高校の1年生選手で、出場種目はクラウド・ボールのみ。それ以上のことは知らないけど、一色達と話しているところを見るに、ただの生徒ではないようだね」
「ああ。それにアイツ…強いな…」
そして蓮司たちの様子を遠巻きに観察している2人の生徒がいた。
1人は一条将輝。第三高校の1年生エースであり、十師族である一条家の御曹司。この年齢で実戦経験のある数少ない魔法師であり、〝クリムゾン・プリンス〟の異名を持つ存在だ。出場する種目はどれも優勝候補とされている。
もう1人は吉祥寺真紅朗。第三高校のブレーンであり、若干13歳で基本コードの1つである「加重系統プラスコード」を発見した天才。その実績から〝カーディナル・ジョージ〟の異名を持っている。
両名とも魔法界では有名人だが、その2人をもってしても蓮司のことは何も知らなかった。だからこそ2人は揃って、今は無名の蓮司を

警戒し始めた。
ここに、蓮司を中心とした新たな空間が誕生していた。

『あ、あのー皆さーん？そろそろ会を進めたいのですが…あのー、聞いてますかー？』
なお、司会進行を担当したスタッフは、ほぼ全生徒に無視されるという、なんとも貴重な経験をしていた。

2―10　老師という存在

『そ、それでは気を取り直しまして…』
　懇親会会場における注目が蓮司に集まっていながらも、声掛けを行いなんとか会を進行させることに成功した進行スタッフだった。なお、蓮司は多少意識を向けながらもまだ食事を進行していた。
「れ、蓮司さん…一端手を止めた方がいいですよ。後からまだ食べられますから…」
「そうじゃぞ蓮司。見よ、あそこにいる来賓たちの顔を。明らかにお主に苛立ちの視線を向け取るではないか」
　ほのかと沓子がそれぞれ蓮司に注意を促すも、蓮司は特に気にも留めない。それどころか…
「何見てんだてめえら…あ？」
　まさかの威嚇返しである。殺気を向けられた来賓たちは顔を青ざめ、速攻で視線を逸らした。まさか学生からそんな殺意を受けるなどとは微塵も考えてなかったのだろう。
「よし」
「よしじゃない!!」
　蓮司のいかにも「問題は無事解決しました」という態度に対し、ほのかと沓子が同時にツッコんだ。意外とこの２人は仲が良くなるのかもしれない。
　そうしている間にも懇親会は進んでいく。
『それでは、ここで来賓の方々を代表して、九島烈様よりご挨拶を頂戴いたします』
　これに、会場にいたほとんどの魔法科高校生たちはざわついた。
　九島烈。この二十一世紀の日本に十師族という序列を確立した人物であり、２０年ほど前までは世界最強の魔法師の１人として目されていた魔法師だ。実質的な十師族の長老的な存在であることから、通称「老師」とも呼ばれている。
　最強の名を維持したまま第一線から退き、依頼、ほとんど人前に出てくることのないこの老人は、何故か九校戦にだけは毎年顔を出すこ

とでも有名だ。
そんな伝説の存在をこの目で見ることができる。初めて九校戦に参加する者たちは期待に目を輝かせ、そうでない者たちは目を輝かせながらも緊張感を漂わせていた。
蓮司もまた、緊張感を漂わせていた。それは、九島烈の名を聞いた瞬間に食事の手を止めるほどだった。
(九島烈…十師族の設立者にして、魔法師界でもトップの存在。まさかそんな奴を見れるとはな…)
最強の名を欲しいままにした存在がこの場に現れる。これだけでもここに来た甲斐があったかもしれないと、蓮司は静かに考えていた。
『それでは、お願いいたします』
司会者が告げた瞬間から、会場にいた魔法科高校生たちは九島老人の登壇を心待ちにしていた。
そして現れた人物に、会場にいたほとんどの者は息を呑んだ。
眩しさを和らげたライトのもとに現れたのは、パーティドレスを身に纏い髪を金色に染めた、若い女性だったのだ。

会場中にざわめきが広がった。そこには息を呑む達也の姿もあった。
(スタッフの手配ミスか…?……!いや、違うな…)
ここで達也はその舞台を注視し、ようやく真相に気付いた。壇上に現れていたのはこの女性だけではなかったのだ。
女性の背後には、一人の老人が立っていた。ただ自分たちの意識が、派手に装った若い美女に吸い寄せられているだけだ。
(これは…精神干渉魔法)
恐らく、会場すべてを覆う大規模な魔法が発動されているのだ。目立つものを用意して人の注意を逸らすという「改変」は事象改変と呼ぶには些細なものだ。だが、その「改変」を全員に引き起こすための、大規模だが微かで弱く、それ故に気づくことが難しい魔法だ。
(これがかつての最強、いや「最高」にして「最巧」と謳われた「トリッ

クスター」九島烈の魔法か…）
その時、達也の凝視に気付いたからか、烈は僅かに口角を上げて笑った。そして間もなく頭上を見上げ、更に楽しそうにしていた。
烈が女性に囁き、女性はスッと脇へどけた。次にライトに照らし出された老人の姿に、大きなどよめきが起きた。ほとんどの者には、烈が突然現れたように見えたことだろう。
『まずは、悪ふざけに付き合わせたことを謝罪しよう』
その声は齢９０近い人物とは信じられないほど若々しいものだった。
『今のはちょっとした余興だ。魔法というよりは手品の類だ。だが、手品のタネに気付いた者は、私の見たところ６人だけだった。そして…』
そこまで話したところで一度止まり、そのままある方向を指差した。
『その中でも、既に迎撃態勢を整えている者が１人』
その発言と指摘に、会場の者たちがそちらに視線を向ける。そしてまたも驚愕に包まれることとなる。
烈の指した方向にいたのは蓮司だった。蓮司も同様に烈に向かって手を向けており、その手元には砲撃用の魔法陣がいくつも展開されていた。後は蓮司次第で、文字通りいつでも迎撃が可能だった。
『つまり…もし私がテロリストで、毒ガスなり爆弾なりを仕掛けたとしても、それを阻むべく行動できたのは６人だけ。そしてその中でも、すぐさま鎮圧に移ることができたのは１人だけだったということだ』
老人の言葉は決して荒げられたものではない。だが会場は、それまでとは別種の静寂に覆われていた。
『魔法を学ぶ若人諸君。魔法とは手段であって、それ自体が目的ではない』
『!!!』
烈のこの言葉には、会場にいたほとんどの者が息を呑んだ。そして、烈の言葉を一言一句聞き逃すまいと、更に集中した。

『私が今用いた魔法は、規模こそ大きいもの強度は極めて低い。魔法力の面から見れば、低ランクの魔法でしかない』
『だが…君たちはその弱い魔法に惑わされ、私がこの場に現れると分かっていたにも拘わらず、私を認識することが出来なかった』
『魔法を磨くことはもちろん大切だ。魔法力を向上させる努力は、決して怠ってはならない。しかしそれだけでは不十分だということを肝に銘じて欲しい。使い方を誤った大魔法は、使い方を工夫した小魔法に劣るのだ』
そこまで話した後、改めて全体を見回して、微笑みながら話を締めた。
『魔法を学ぶ若人諸君、私は、諸君の工夫を楽しみにしている』
そうして、九島烈の挨拶は終了した。そして会場は徐々に拍手が広がっていった。達也も同年代たちと同様に拍手をしていたが、同時に笑ってもいた。
現代魔法師社会はランク至上主義と言ってもいい。だが魔法のランクではなく使い方を重視する考えは、現在の魔法師社会の在り方に喧嘩を売るようなものだ。この国の魔法師の頂点に君臨しながら、今の在り方に逆らうよう促す老魔法師。これが口先だけのものなら達也ですら反感を覚えただろう。だが老師は、それを分かりやすい形で実現して見せた。
―これが、「老師」か…―
この国にはまだまだ学ぶべき存在が多くいることを達也は改めて感じていた。同時に、研究室に籠っているだけでは決してできなかった体験をできたことに感謝もしていた。
しかし、話はここで終わらなかった。
『ところで…』
拍手が会場を満たしている中、烈は改めて話を再開した。先ほどのもので終了したと思っていたのは、高校生たちだけでなく他の来賓たちも同様であったため、今度はざわめきが立ち込めていた。
その空気の中で、烈はもう一度指をさし、発言を開始した。
『君は、いつまで私にその手を向けるのかね？』

そう烈が話すと、またも全員の視線がその指の先に集中する。そしてまたも驚愕に包まれることとなる。
全員の視線はまたも蓮司に集中していた。何故なら、先程展開していた魔法を、蓮司はまだ解除せず烈に向けたままだったからだ。
『ついでに言わせてもらうなら、この頭上にある魔法も解除してもらいたいものだね。話しながらも、いつ魔法が発射されるか冷や冷やしたものだよ』
そう言いながら、烈は頭上を確認した。その発言を受けそちらも確認すると、蓮司が展開しているものと同様の魔法陣が展開されていた。
何故今もなお解除しないのか。会場は疑問に包まれていた。達也にももはや訳が分からなかった。
その空気の中、蓮司は言葉を発した。
「悪いな。俺は九島烈に会ったことがないんでね。目の前のあんたがそうだとは信じられないもんで警戒を怠れないんだよ、爺さん」
それはそれは楽しそうに話していた。反対に、第一高校の面々や近くにいた生徒は一様に青ざめた。なお、心境は皆同じであった。

―お前、何してんだよ??!!―

蓮司は烈の演説が始まってからも、一切の警戒を怠らず魔法を展開し続けた。しかし、それは決して目の前の老人を疑っていたからではない。
寧ろその反対。目の前に老人が、魔法師として高みにいることを本能で理解することができた。そしてその考えも知ることができた。今の魔法師社会に喧嘩を売るような発言も、蓮司には好印象だった。
こんな愉快な悪戯やサプライズも行ってくれたのだ。ならば…自分も若人代表としてサプライズで返そう。それが蓮司の判断だった。
「悪いな。俺は九島烈に会ったことがないんでね。目の前のあんたがそうだとは信じられないもんで警戒を怠れないんだよ、爺さん」

故に、まずは悪態をついてみることにした。この老人ならば、付き合ってくれるかもしれない。そんな期待も持ちながら。
「れ、れ、れ、蓮司さん…も、もう止めた方が…周りのめ、目がすご、すごいことに…！」
ほのかが涙目で蓮司をなんとか宥めようとする。現に第一高校の面々や知り合い以外の人たちは、すごい顔で蓮司を睨んでいた。
だが、こうなった蓮司はもう止まらない。ハラハラする周囲を置いてけぼりに、蓮司と烈の会話は続いていく。
『ふむ…私もそう言われたのは初めてだよ。私が私であることの証明か…』
「口舌なら文章を作れば他人にもできる。それらしい雰囲気だって練習すればできる。さっきの演説やちょっとした手品で自分を九島烈だとするには、俺からすればお粗末にもほどがある」
『そうか…では少年よ。どうすれば私を本物だと定義するかね』
「そうだな…じゃあこういうのはどうだ、爺さん？」
蓮司と烈は楽しそうに話していたが、ここで蓮司が提案をした。そしてその提案を聞いた烈は更に楽しそうに、周囲は絶望にすら包まれそうになった。
「俺はこのままあんたに魔法を放つ。それを対処して見せろよ爺さん。天下の九島閣下なら容易いだろ？」
最早、正気の沙汰と思えない展開だ。
「やめなさい蓮司くん！いくらなんでもやっていいことと悪いことがあるわ！」
「いい加減にしろ！出場前に失格になりたいのか！」
「くそ、だからこいつを代表にするのは反対だったんだ！」
「よりにもよって、九島閣下に楯突くとか…」
「ちょっと、私たちどうなっちゃうの!?」
真由美や摩利を筆頭に蓮司に怒りを表し、第一高校のメンバーは絶望し始める。何故こいつを選んでしまったのか、と。しかし…
『いいだろう』
他ならない烈がそれを了承してしまった。

『君の魔法をそのまま放ってみなさい。そして私の行動を見て、改めて判断しなさい』
「はっ、後悔しないようにな」
『その言葉、そっくりそのまま返そう。そして、恥をかかぬようにな』
もはや2人のやり取りを止められるものはいなく。後は運命に任せるしかなかった。
「お、お兄様！止めなくていいのですか!?もう止められるのはお兄様しか…！」
「落ち着きなさい、深雪」
深雪も他の生徒と同様に慌てまくっていた。普段の彼女からは考えられないほど焦っている。対して、達也はどこまでも冷静だった。
（蓮司…お前の考えていることは、俺には正確に分からない。だが…知りたいんだろう。魔法師の頂点がどういう存在か、お前なりのやり方で）
達也はそう考えていた。蓮司は蓮司なりに、魔法師の矜持を持っている。魔法が関係する蓮司の行動は、常に明確な理由や目的が存在する。それをこれまで見てきたからこそ、達也は冷静でいられた。
「蓮司を信じよう」
故に達也は蓮司を信じることにした、これまでのように。
僅かな沈黙の後…蓮司の魔法が放たれた。
蓮司の手元、そして烈の頭上にある魔法陣より光弾が放たれた。魔法弾である以上、当たれば怪我では済まない可能性もある。周囲の生徒たちは悲鳴を上げた。
そうして放たれた魔法に対し…
九島烈は、何もせずただ直立していた。
『閣下！』
司会進行のスタッフが思わず悲鳴を上げるが、それでも烈は身じろぎ一つしない。
そしてそのまま光弾は烈に向かって飛んでいき…

烈に当たる直前で弾けた。その光は、まるで花火のようだった。
その結果に周囲は再び静まり返った。目の前で起きた現象は理解できたが、展開が急すぎて着いてこれる者は誰もいなかった。
「ちっ。微動だにせずかよ」
その結果に蓮司は舌打ちをしていたが嬉しそうでもあった。
『なに。攻撃する気はあっても、危害を加える意識が感じられなかったのでね。君の善良な心を信じたのだよ』
「心にもないことを…。初めから見抜いてたんじゃねえかよ」
烈の感想に蓮司は再び悪態をついた。しかし、この結果に蓮司は満足していた。
（この堂々とした振る舞い、圧倒的な余裕…これが老師か）
目の前の存在がいかに偉大かを理解できた。そして同時に、自分はまだその高みに届いていないことを蓮司は悟り、まだ見ぬ強さに感情が高ぶった。
蓮司はそのまま立ち上がり、右手を胸に当て、頭を下げた。
「閣下、あなたに疑念を持ったこと、この場にて謝罪いたします。そして約束しましょう。私は、あなたを退屈させないと」
恭しく、しかし力強い蓮司の発言に、烈は大きく頷いた。
『そうか。では、楽しませてもらうとしよう』
そこまで話し、今度こそ烈は舞台から退場した。

「彼が龍童蓮司君…例の子か」
舞台裏にて、烈は先の会場での一件を思い出しながら独り言を呟いていた。
烈と蓮司は、確かにあの場が初対面だ。そして九島烈の名は魔法師では知らぬものがいないため、烈を一方的に知っている者は数知れない。当然、蓮司もそこは他の者たちと同様であった。
烈も蓮司と相対したのは今回が初めてだ。だが実は、烈は蓮司の存在を知っていた。
それが如何なる理由によるものか…それは烈本人にしか分からない。

（君がどんな輝きを放つのか…それを見極めさせてもらおう）
「龍童蓮司君。君は果たして、この世を救うのか。…それとも、この世を滅ぼすのか」

2―11　温泉交流会

九島老師が去り、懇親会が継続されても、会場は依然として静かなものだった。それも当然と言えるだろう。九校戦に出場する高校生が、あろうことか老師を試すような真似をしたのだから。それもただ弁舌をするだけでなく、直接魔法を放つことによって。結果的に何も被害がなかったとはいえ、その場に居合わせた者達は生きた心地がしなかっただろう。

特に、第一高校の生徒たちはそれが顕著であった。元々、九校戦において圧倒的な戦績を誇るが故に他校からはライバル視、悪く言えば敵視されていた。しかし今回は、明確な敵意を周囲は向けていた。

「いやあ、いいもんが見られた。これだけでもここに来た甲斐があったな」

そんな中で、当事者の蓮司だけが呑気に楽しそうにしていた。九校戦そのものに関心のない蓮司にとって、周囲の評価や意識は気に留めるものではない。

しかし、この状況でするべき発言ではなかった。

「お・ぬ・し・は！何を考えておるかぁぁぁぁぁぁぁぁーーー!!!」

そんな怒号が響いた。発したのは、蓮司の近くにいた沓子。他校の生徒ではあるが、仲がいいが故に誰よりも早く蓮司に怒鳴っていた。

「馬鹿か、馬鹿なのか!?他校の生徒相手に啖呵を切るならまだしも、老師相手にあんな発言をするとは何事じゃ!?しかも魔法まで使いおって！」

「あんなサプライズを用意してくれたんだ。こっちも相応のお返しをしてやるのが実力者への礼儀だ」

「それは競技で示せばよい！もしあれで老師が怪我なぞをしてみよ！お主の今後の魔法師生活すら危ぶまれるぞ！」

「あれで怪我をしたなら偽物だ。そんな奴に、魔法師社会の頂点に立つ資格はない」

「確定じゃ！お主は馬鹿じゃ！」

もう駄目だ、と言わんばかりに天を仰いだ沓子。蓮司を相手に舌戦

で勝利するにはまだまだ経験が足りない沓子であった。
しかし忘れてはならない、他にもいることを。最初に怒ったのが沓子なだけであって、他にも怒りを抱えている者たちがいることを。
「ねえ、蓮司君？」
ふと、蓮司を呼ぶ声がした。蓮司はそちらの方を向くと、思わず肩を震わせた。
蓮司を呼び止めたのは真由美だった。それはそれは、とてもいい笑顔をした真由美だった。しかし怒りのせいか周囲にサイオンが漂っている（ように見える）。背後に般若のようなシルエットすら見え、不意打ちを受けた蓮司は思わず身が竦んでしまった。
さらに真由美の傍らには、怒りのあまり血管を数か所に浮かべた摩利や、眉間に夥しい皺をよせ、もう高校生と判別できない顔となっている十文字をはじめ、上級生たちが怒りのオーラを漂わせていた。
正直、有象無象についてはどうでもよかった蓮司だったが、三巨頭と呼ばれる３人の怒りは凄まじく、蓮司が怯むほどであった。これには流石の蓮司も冷や汗を垂らした。
（やっべ…楽しみすぎたか…調子に乗っちまった…）
呼び止められはしたが、どう返事をすればいいか分からず、しばし黙っているしかなかった。そこで真由美は改めて声をかけた。
「ねえ、蓮司君？」
「…はい、会長」
先程と全く同じ声色で声をかけられたため、とりあえず返事をした。蓮司にしては珍しく慎重に言葉を選んでいた。
返事をされた真由美は更に笑顔を浮かべたが、もちろん喜んでいるわけではない。
「正座」
「はい？」
「正座」
「いや…他に生徒が」
「正座」
「…話は部屋で…」

「正座」
「…はい」
　下手に逆らってはいけないと本能的に感じた蓮司は、幾ばくかの抵抗の後大人しく正座をした。先程の不遜な態度を感じられない、見事な正座だった。
　それで多少気を良くした真由美だったが、だからと言って怒りのボルテージが下がったわけではない。
「これからたっっっっっっぷり！君とお話したいな～～～」
「…はい」
「もちろん、付き合うわよね？」
「…はい」
　こうして蓮司の公開説教は始まった。なお、懇親会が終了してもその場で続き、その間ずっと正座の姿勢を続けた蓮司だった。

「はあ～～～…いい湯加減だねえ」
「それにしても、こんなところがあったんだね」
「軍用の施設だけど、頼んだら使用許可が出たんだよ」
　ところ変わって、ここは宿舎の地下にある大浴場、人工温泉施設。現在ここは、第一高校生徒1年生女子メンバーが利用していた。
　九校戦出場メンバーが利用する宿舎はただのホテルではない。本来は国防軍の演習場に付属する施設である。よって、あらかじめ使っていいと言われている施設以外は基本的に立ち入ることができない。
　しかしエイミィがこの温泉施設の存在を知り、試しに頼んでみたところ使用許可が出た。そこで1年生女子メンバーを誘い、現在に至る。
　なおここに至るまでに、ほのかのスタイルを目にしたエイミィがほのかにセクハラを働き、ほのかが雫に助けを求めるもほのかのスタイルに嫉妬した雫が放置、そこへ深雪が訪れ宥めるものの、今度は深雪の圧倒的な美貌に女子メンバーが目を奪われ、それに危機感を感じたほのかが「いい加減にしないと皆氷漬けになるよ！」と斬新な脅し文句を使い皆を落ち着かせるなど、僅かな時間で多くの出来事が起こっ

ていた。
一端落ち着いたところで、話題が変わった。女子高校生らしく、異性についてだった。同年代についてだったり、年上のバーテンダーをはじめとしたナイスミドル世代も取り上げられる中、話題はある人物に移った。
「そういえば、会場に一条の跡取りがいたよね」
「見た見た！結構男前だったよね！」
「そういえば彼、深雪のことを熱い眼差しで見てたね」
やはり、同年代で言えば有名人に当たる一条将輝のことが話題となった。名家の跡取りというだけでなく、見た目も整っているとなれば当然かもしれない。
「え、そうなの？もしかして一目ぼれかな??」
「深雪だったらあり得るね」
「むしろ深雪に惚れない男が珍しい？」
「案外知り合いだったりして！」
「どうなの、深雪？」
女子たちが盛り上がる中、改めて雫が深雪に尋ねた。
しかし、深雪の答えは素っ気ないものだった。
「一条君のことは写真でしか見たことがないわ。会場のどこにいるかも分からなかったもの」
この言葉だけで三校を戦力ダウンさせられるかもしれないことをサラッと言い放ったが、こと恋愛話においては女子の力というものは凄まじい。
「じゃあ深雪の好みってどんな人？やっぱりお兄さんみたいな人が好みかい？」
スバルのこの質問に全員が反応していたが、深雪は呆れた表情を浮かべて答えた。
「…何を期待しているのか知らないけど、私とお兄様は実の兄妹よ。お兄様を恋愛対象として見たことはないわ」
「それもそうか」
深雪の答えに対して、その場にいた女子たちはそれ以上問い詰めな

かった。常識的に考えて、それ以上追求しようがなかったからだ。
　そしてここで、新たな話題へ移る。
「じゃあ蓮司君はどうだい？僕の見たところ、お兄さんを除けば一番仲がいいんじゃないかな？」
「えっ」
　この質問には、全員が反応した。特に大きかったのは、深雪、雫、そしてほのかの３人。ここから話は新たな展開となる。
「蓮司君かぁ。ルックスは悪くないよね。目つきはかなり悪いけど」
「あまり意識がいかないけど、髪も長くてきれいだよね。目つきはひどいけど」
「実力もあり学業も優秀。中々いない人材だよね。目つきは怖いけど」
　どうも蓮司の目つきの悪さは異性受けしないようだ。受けたらそれはそれで問題だが。
「いい人だよね。なんやかんや会話してくれるし」
「今時あんなにはっきりと自分の考えを言える男子も少ないと思うよ」
　ここでエイミィとスバルがプラスの意見を述べた。この２人をはじめ、普段仲良くしている人物から見えてくる視点もある。
「…これで素行さえよければ言うことないよ。…さっきの懇親会とかさぁ…」
　しかしここで１人の女子が先の事件のことを口にし、改めて全員がそのことを思い出していた。
　九島老師への失礼な態度、魔法による攻撃…はっきりいって自分たちの魔法師人生が終わったような気分だった。その後に上級生たちによる説教を受けていたが、はっきり言ってそれで蓮司の素行の悪さが改善されるとは思えなかった。
「で、でも！優しいところだってあるよ！」
　全員の蓮司に対する印象が悪い方向に傾き始めたとき、ほのかが発言をした。それまで静かだったほのかが言葉を発したことで、全員の視線がほのかに集中した。一瞬怯んだものの、ほのかは言葉を続け

た。
「今まで関わってきたから分かる。粗暴かもしれないけど、絶対優しい人だよ。確かに行動がハチャメチャな時も多いけど、蓮司さんは蓮司さんなりの信念があって動いてるのが分かる。私だけじゃなくて雫やエイミィもだけど、蓮司さんに何回も助けられたし、一番頼りになる人だよ。」
ほのかは真っすぐにそう言い切った。それはこれまで行動を共にしてきたからこそ見えてくるものだ。何よりほのかにとって、ブランシュ襲撃のことは強く印象に残っていた。
死の恐怖に支配されそうになった自分に言葉をかけ、壊れそうになった心まで救ってくれた。頬が若干赤いのは、温泉によって体温が上がっているからか、それとも別に要因があるからか。それはほのか自身もはっきりしなかった。次いで、雫と深雪が発言した。
「それになんだかんだで、行動や主張は理に適ってることも多い。先輩とかに対する態度がちょっとあれだけど、基本的に主張は魔法師として正しいものだと思う」
「私も2人の考えが分かるわ。確かに極端なことも多いけど、彼は彼なりの行動理念がある。そしてそれを貫き通す強さは、同年代男子には中々ないものだと思うわ」
深雪や雫もほのかと同様に蓮司に対しては好印象だ。これもほのかのように、近くで蓮司を見てきたからこそ出てくるものだった。
そしてここで、深雪が茶目っ気も交えて締めくくった。
「だからって今回のようなものが続くと寿命が縮まる気分だけどね。皆も彼を相手にするときは、大きな子供を相手にするような感じにしないと、身が持たないかもしれないわ」
まさか深雪からそんな冗談が出るとは思わなかったのだろう。全員がきょとんそした後、
『あはははは!!』
笑い声が響いた。あれだけ怖いと思っていた相手が大きな子供だと思うと中々シュールであり、親近感も沸いた。
「こ、子供かぁ!あっはは、そう考えたらなんか可愛く思えてくるね

！」
エイミィが笑いながらこれまでのことを思い出し、そう感想を述べた。他の女子たちもそうだったようで楽しそうにしていた。
こうしてほのか達の好意的な印象や深雪のフォローにより、人知れず評価を上げた蓮司であった。恐らく、本人が知ったら不本意極まりないものだろうが。

女子たちが大浴場でそんな会話をしていた頃。説教から解放された蓮司は美琴に連絡を取っていた。元々懇親会が落ち着いたら現在の不穏な動きについて尋ねるつもりだったが、予想外の妨害（あくまで蓮司にとって）により、連絡がかなり遅くなってしまった。
「…で、何が起こってんだ？お前のことだ、何か掴んでんだろ？」
『それよりその説教話をもっと聞かせておくれよ。美少女たちに怒られて新たな扉が開いたかい』
「てめえじゃあるまいしねーよこのＳＭ女。それよりさっさと話せ」
いつものやり取りから始まったが、ようやく本題に入った。
『私もそこまで気に留めてなかったんだけどね。九校戦は違法賭博に利用されているんだよ』
「賭博だあ？」
そこでもたらされた情報に、思わず気の抜けた声が出たが、もちろん話はここで終わらない。
『ホストは無頭龍。ブランシュなんかとは違って、明確な犯罪組織さ。そして今回の賭博の参加者は、九校戦で第一高校が勝利することに賭けている奴が多いらしくてね。だから第一高校に妨害を仕掛けて、自分たちが儲けようとしてるのさ』
「また阿呆みたいなこと仕掛けやがって…」
蓮司はこういったことは存在意義すら理解できないため、間の抜けた声しか発すことが出来なかった。
『だが奴らにとっては大切な資金源さ。それに犯罪組織なら、失敗の代償は死であるから必死にもなる』
「…」

『開始前からそんなことを仕掛けてくる奴らだ、競技中だって何をしでかすか分からない。くれぐれも注意しなさい』
「言われるまでもねーよ」
そこまで話し、通話は終了した。どうやらこの九校戦は例年になく荒れるようだ。
「めんどくせーことになりそうだな…」
何が起こるか予想もつかず、ただぼんやりとそんなことを呟くしかなかった。

2―12　九校戦の始まり

懇親会で衝撃的なことはあったが、そんなことは関係なく翌日から九校戦は開幕された。

九校戦の観戦客は10日間で延べ10万人、1日平均1万人のギャラリーの観客が集まることになる。有線放送の視聴者は軽くその100倍以上にはなるだろう。

それだけ多くの人が注目する中、規律を重んじた開会式も静かに終了し、ついに初日の競技が開始された。

初日は本戦男女スピード・シューティングの男女予選から決勝まで、そして本戦男女バトル・ボードの予選が行われる。注目されているのはやはり第一高校。特に、3年生の真由美と摩利が出ることもあってより注目度が高くなっている。両名とも九校戦で実績を残す実力者であり、さらにはその容姿も相まって人気が高いことも理由だった。

「帰りてえ…」

「自分の種目どころか何も始まってないだろうに…」

場所は変わって観客席。蓮司は達也たちいつものメンバーと試合を見るために集まっていた。しかし他の面々が楽しみな表情を浮かべている中、蓮司だけはゲンナリした様子だった。

実を言うと、蓮司は一部の試合を除いて今日はそこまで熱心に観戦するつもりはなかった。本当であれば今日は適当に過ごし、屋台が出ているそうなのでそこで買い食いをする予定だった。

では何故ここにいるのか。それは懇親会の際の公開説教が理由だった。

流石に好き勝手やりすぎたと自覚のあった蓮司は、真由美からの説教をおとなしく聞いていた。その中で、蓮司は真由美と以下のような約束を交わした。

①大会期間中は余程のことがない限り1人で過ごさないこと。

②他校の生徒相手に挑発的な行動をしないこと。

③生徒及び大会関係者に危害を加えないこと。
④1つ破る度に真由美の言うことを1つ聞くこと。
4つ目は恐らく真由美の個人的恨み兼要望も混じっていただろうが、大会期間中は原則1人で過ごすことを禁止されていた。よって達也たちとともに観戦することとなった。
「はあ〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜〜………」
「そ、そこまで溜息つかなくても…」
「見ることとも勉強になるよ?」
テンションが駄々下がりの蓮司をほのかと雫がなんとか宥めていた。
「蓮司、すげー萎えてんな…」
「まあ、いい薬になったんじゃない?昨日のはあたしもその場にいたけど生きた心地がしなかったわよ」
「あはは…」
「…あの時と同一人物だと思えないね…」
二科生組（レオ、エリカ、美月、幹比古）は同情しつつも自業自得のため慰めることは出来なかった。ちなみにこの4人はエリカのコネによりホテルスタッフのアルバイトとして現地入りしていた。昨日の懇親会でもエリカと幹比古がホール、レオと美月が裏方として働いていた。
「…はあ。龍童君、いい加減にしてください。今回に関しては完全にあなたが悪いです。それに当校の生徒であれば先輩たちの応援をすることは当然です。ちゃんと集中してください」
「深雪の言う通りだ。それに会長にはマルチスコープがある。最悪、試合をしながらこちらも見られているぞ。小言を受ける前にシャキッとしろ」
そこで深雪が溜息をつき、達也とともに蓮司に注意をした。ちなみに蓮司のお目付け役に選ばれたのは達也と深雪だった。ついでに言うと、そのサポートとしてほのかや雫もつくこととなっている。
「分かってるっつーの…だから大人しくここにいんだろーが…」
そこでようやく蓮司は姿勢を正した。流石にずっとだらけている

わけにはいかなかったのもあったが、理由は他にもあった。
（十師族の会長、そしてそれに匹敵する委員長…その力、じっくり見せてもらおうか）
　元々蓮司は、九校戦開催期間中に真由美、摩利、そして十文字の試合をどこかで見るつもりだった。三巨頭と呼ばれる3人の実力は第一高校はおろか全魔法科高校生の中でも群を抜いて高いと言われている。しかし実際にその実力は見たことがなかったためこの3人の試合は少し楽しみにもしていた。あくまで、今日はそのつもりがなかっただけなのだ。なお、その他には本戦のクラウド・ボールのみで、理由としても自分が出る種目についての情報収集が目的だった。
　そうこうしているうちに、ついに第一種目のスピード・シューティングが開始された。

「何事もなく1日目が終了したか」
「ちゃんと大人しくしてたわね。偉い偉い」
「子供扱いしねーでくださいよ…まああんだけ言われりゃ流石に大人しくしときますよ」
　初日が終了し、今は第一高校の生徒たちが講堂で食事をとっていた。その一角で、蓮司、摩利、そして真由美がいた。
「それで、どうだった初日の九校戦は？ついでに私たちの試合について感想とかもらえたらいいなあ」
「ほう、それはいいな。サボらずにいたかどうかはこれでしっかり分かる」
　そこで真由美と摩利はニヤつきながらそんなことを聞いてみた。
　正直なところ、今のこの質問に深い意味はない。強いていうなら真面目に観戦してなく適当なことを言うなら、それをネタにまたからかうつもりでいた。普段そういう隙を見せない分、いつもより楽しそうな2人であった。
「そうっすね…総括したらつまらなかった、ってところですね」
「…えっ？」
「何？」

だからこそ、真面目な顔でそんなことを言い切った蓮司に、思わず気の抜けた声を2人は出してしまった。
「要するに実力に差がありすぎるんすよ。先輩方の実力は確かに高かったっすよ。」
そこで一旦話を区切り、改めて蓮司は2人の方を向いて話し始めた。
「会長のドライアイスの亜音速弾、そしてそれを用いて正確に無駄なく打ち抜く精密射撃、それらを支えるマルチスコープと魔法力は流石の一言に尽きる。並みの魔法師じゃ情報が多すぎてまともに制御できないし、そもそも魔法力が持たない」
「…うん」
「委員長も技術の高さを見せていた。硬化魔法、移動魔法、加速魔法、振動魔法と、4つも常にマルチキャストする絶妙な組み合わせの良さ、多種多彩に戦術を組み立てる応用力は真似しようとしてできるもんじゃない」
「ほう…」
予想以上に自分たちのことをしっかりと見ていた後輩に感嘆の声が出た。そして同時に2人は思い出した。普段は飄々としており、不真面目さが目立つ蓮司だったが、こと魔法については誰よりも真面目で真摯であることを。
しかしそこまで話した蓮司は、今度は冷めた瞳となり、2人から視線を逸らして外を眺めた。
「…それを差し引いてもないな。九校戦、魔法科高校生の全国大会に出てくる生徒の実力…はっきり言って低レベルすぎる。『魔法は手段、応用や工夫が大切』って老師が事前に言っていたにも関わらず、ありきたりな魔法の使い方しかできない」
正直なところ、蓮司は元々そこまで期待はしていなかった。それは選手選考の際に新人戦で実績を残していた2年生選手と試合をした時や、その後に練習相手がいなくなったことなどから既にレベルはなんとなく理解していた。しかし、百聞は一見に如かず。他の高校にはもしかしたら飛び抜けた生徒がいるかもしれないと、僅かに期待をし

てもいた。
　だが結果は蓮司にとって期待外れにも程があった。真由美と摩利以外の試合は特に見応えもなく、面白い魔法の使い方をする生徒は見当たらなかった。競技が始まった時点で他の仲間達、しかも達也を無視するほど観戦に集中していた蓮司だったが、最後まで蓮司を引き付ける生徒は目の前の2人を除いて存在しなかった。
「これじゃあ、新人戦も退屈になりそうだ。しかもそれを大衆どもが見てきやがる。やる気なんか益々出なくなりましたよ」
　だからこそ、蓮司は落胆していた。少なくとも現時点において、蓮司は既に九校戦に対して見切りをつけ始めていた。
「はあ…相変わらずね、その完全実力主義は」
「いっそ清々しいほどに分かりやすいよ」
　真由美と摩利は若干の呆れ顔を見せながらも笑っていた。さてこの後輩をどう言いくるめようか、と楽しそうにしていた。
「確かに対戦相手としては不足してたかもね。自分の戦いをするだけで終わってしまったから、勝負にならなかったっていうのは事実だし」
　真由美は少し茶目っ気も交えながら、蓮司に語り聞かせ始めた。
「でもね蓮司君、これもある意味、強者の定めみたいなものよ。私たち十師族は他の魔法師より圧倒的な存在でなくてはならない。十師族はこの国の魔法師を統一し、守護する存在でもあるの。だからこそ他を圧倒できるような存在である必要があるの。今日の試合展開は、言ってしまえば義務のようなものね」
　それが十師族という存在だった。圧倒的な力をもって魔法師たちを統治し、諸外国からの脅威を排除しなければならない。だからこそ、たとえ力を制限された九校戦という舞台でもその前提が覆ることがあってはならないのだ。
「私の場合は少し違うがな。明後日のバトル・ボード準決勝では去年優勝争いをした七校もいるし、こちらはいい勝負になるだろう。…だが私も真由美とまではいかずとも強者であろうとしているよ。それはこの国がどうこうと言うより、第一高校の後輩たちのためにそうあ

りたいんだ」
　摩利の場合は第一高校のためという思いの方が強い。これから先も九校戦を戦い続ける後輩たちに、強者としての自分を見せることで鼓舞しようとしていた。
「蓮司君ほどの実力者なら、確かに新人戦は退屈かもしれないわね。きっと誰よりも実戦経験が豊富だろうし、魔法の工夫っていう点でもきっと蓮司君はスバ抜けていると思うわ」
「しかしそんな君だからこそ、手を抜かないでほしい。いっそ、君に対して悪態をついていた連中はおろか、観客たちすらも黙り込むしかないような状況にしてしまえ。その方が私も見ていて楽しい」
　冗談を交えながら、蓮司に語り聞かせた2人。直接口にしてこそいないが、つまり2人が言っているのはこういうことだ。
　結果を残せ、と。既に強者の立場にいる蓮司は、これからのためにもその存在を示さなければならない、と。2人は言外にそう言っていた。
「会長、委員長。少々よろしいでしょうか。今後のことで改めてお話が」
　そのタイミングで鈴音が3人のもとへやってきた。どうやら明日以降の九校戦についての作戦会議をしたいようだった。
「分かったわリンちゃん。それじゃあね、蓮司君」
「新人戦、期待してるぞ」
　そう言って、真由美と摩利は蓮司のもとを離れていった。
「…」
　蓮司は静かに外を眺めながら、先の話を思い出していた。2人の言うことに納得できる面もある。一定の理解を示すこともできる。が、1つだけ、蓮司にとって受け入れ難いものもあった。
「あんた達もそっち側か…」
　それが何かは、いずれ判明するだろう。